女鑑

明治三拾六年三月拾五日發行

第拾參年第六號



女鑑 第拾柒年第六號 目次

口繪

秋元子爵夫人宗子
松前子爵夫人藤子
英國名畫平和の圖
清國杭州城外運河の波濤舟（其一其二）
月の瀬梅景

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
（色刷は特に御相談に應ず）

明治三十六年三月十四日印刷
明治三十六年三月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 並木亘雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）



松前子爵夫人藤子

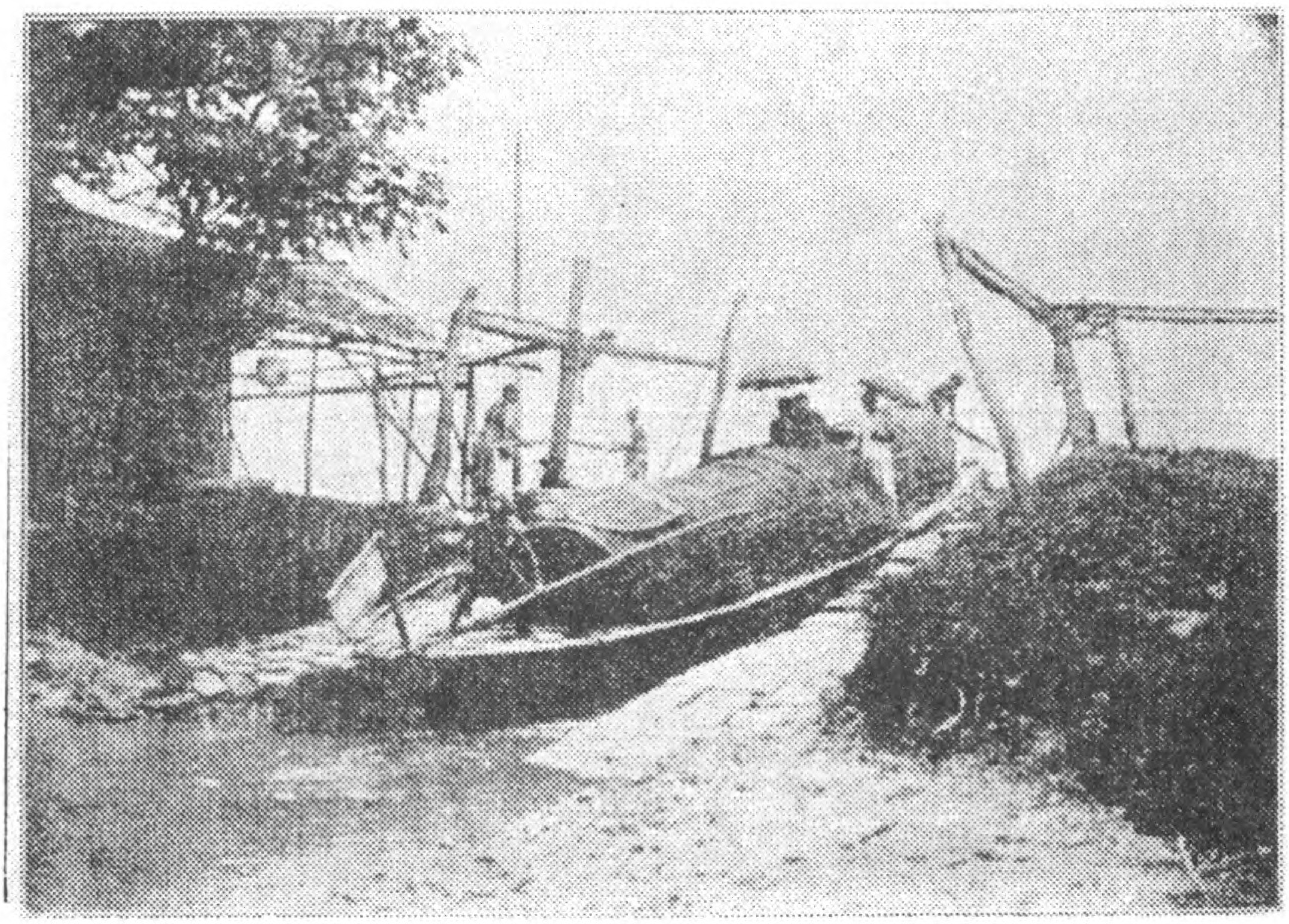


秋元子爵夫人宗子

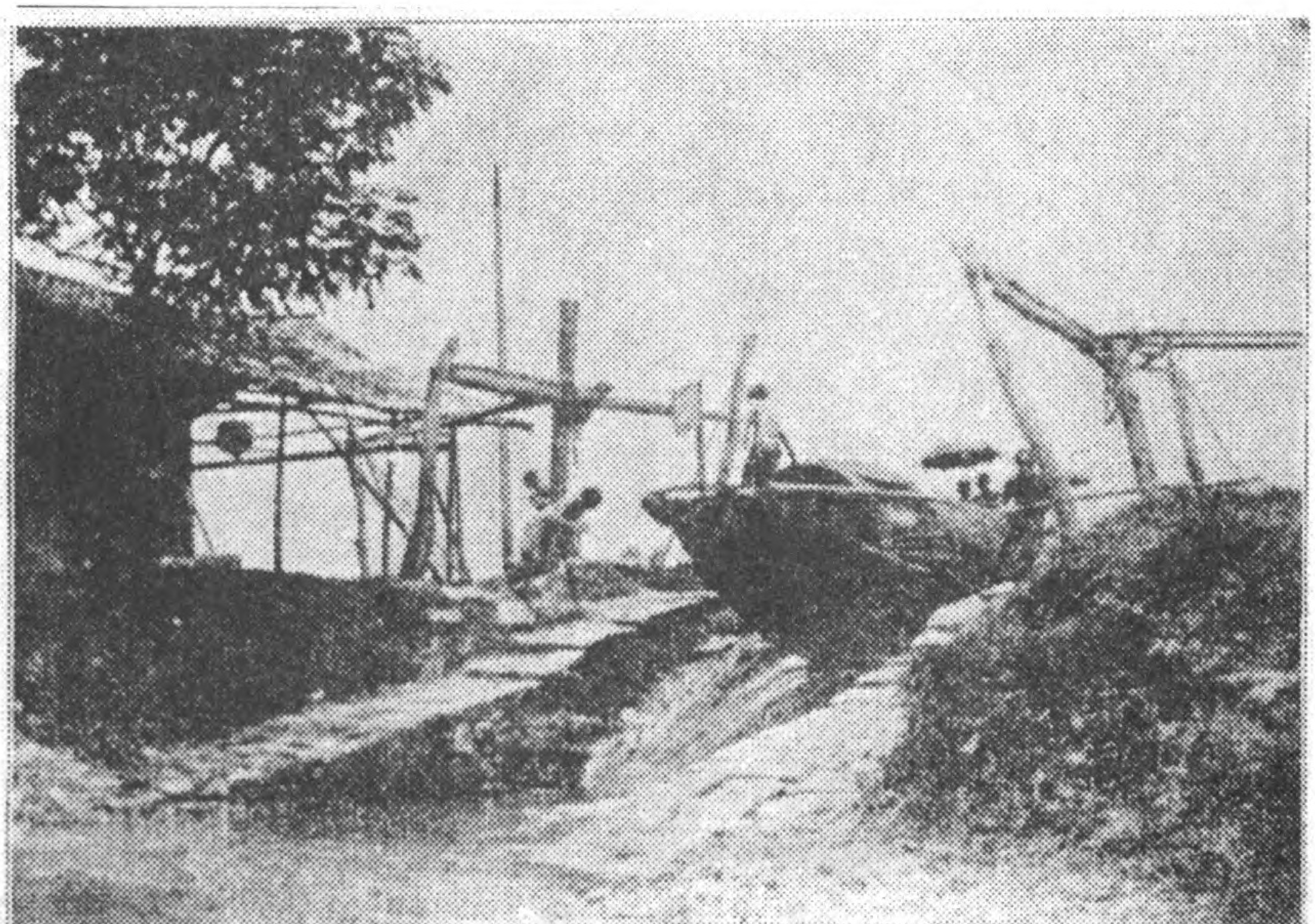


平和

（英國畫伯エドウインランドシヤア筆）

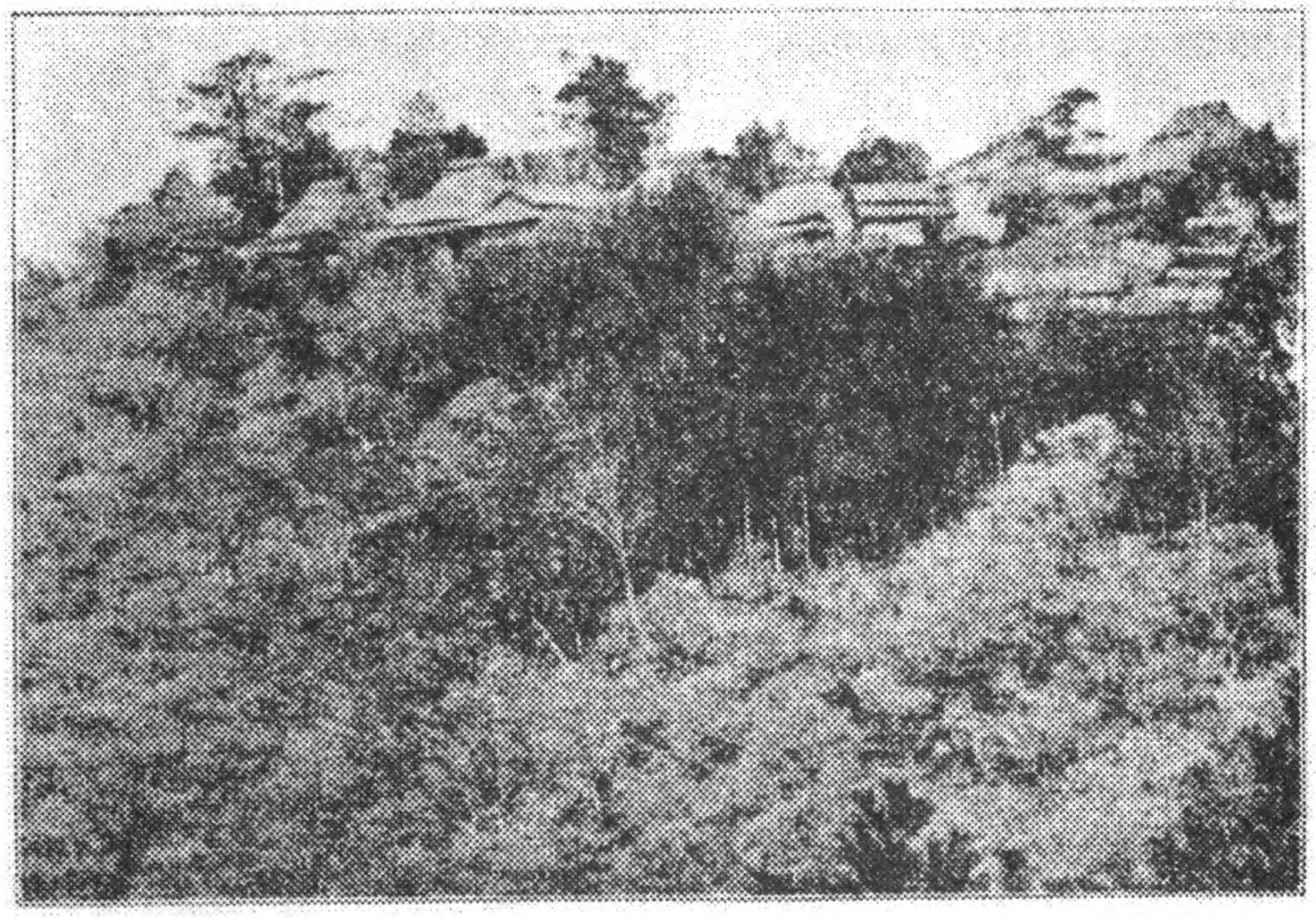


清國杭州城外運河の波濤舟（其一）

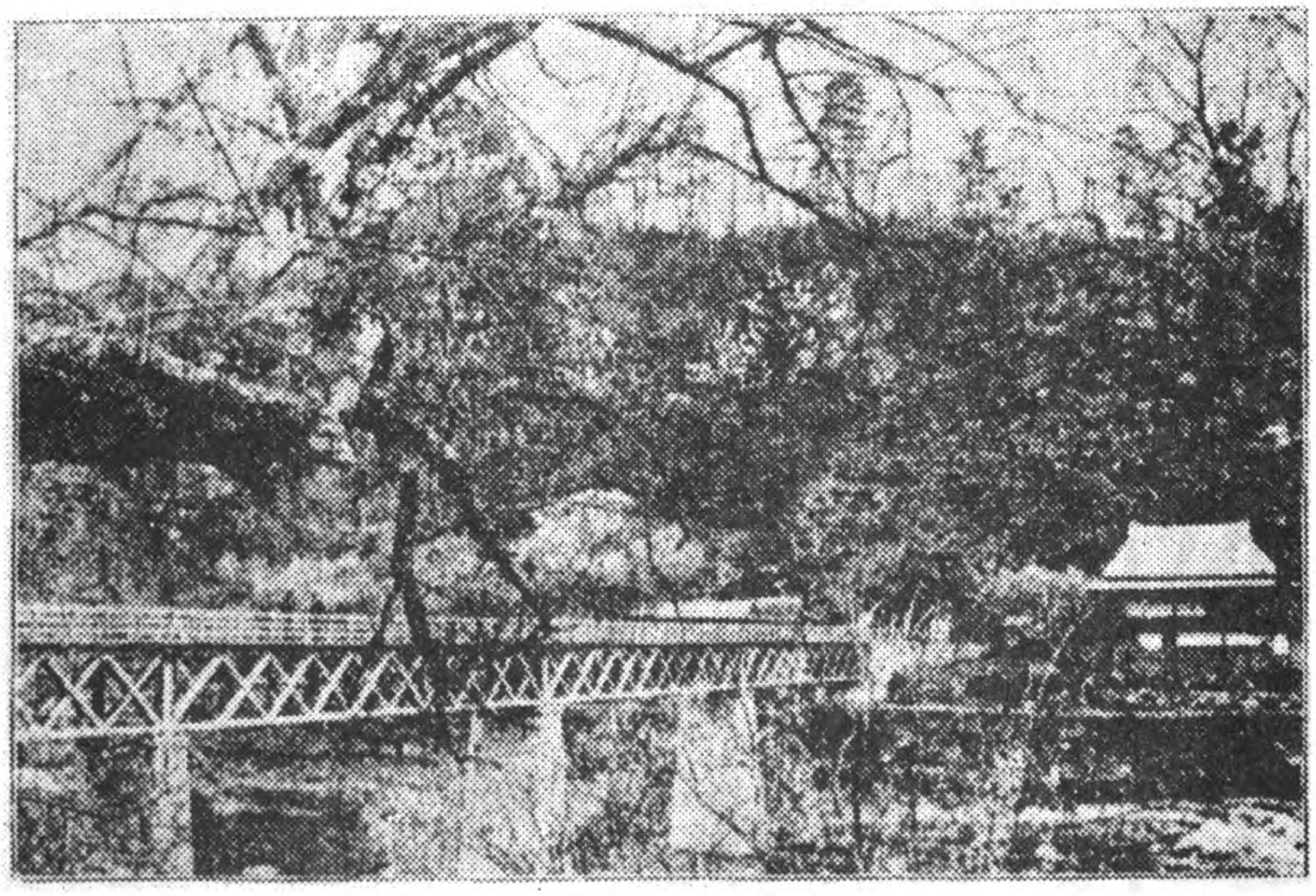


（其二）

月の瀬梅景



（其一）　帆浦



（其二）　月瀬橋

申込の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新刊 故男爵夫人中島湘烟女史遺稿 新刊

育成會主幹石川桂雨君
英文山櫻著者藤生夫人
共編

湘烟日記

幼にして京都に**神童**の一人とよばれ妙齢にして**宮中奉仕**の身となり二十歳にして諸國漫遊**自由民權** **女權擴張**を唱導し**牢獄呻吟**の身となり出てゝ自由黨副總理中島信行氏の夫人となる**保安條例**の厄を受けて横濱に退去し**女教育家**としてフェリス女學校の學監となる**外交婦人**として伊太利國に駐まり歸りて**男爵夫人**となり宗演禪師と法縁を結び**禪定悟達**の月淵大姉となり三十九にして世を去る

女史は實に**女詩人**として**女政治家**として**女禪師**として**賢夫人**として**女教育家**として**能書家**として古今未曾有の大經歷を有す◎本書の收むる所の詩集は**牢獄の悲慘**を歌ひ**時勢**を歌ひ**戀愛**を歌ふ其病中日誌の如きは六尺の男子を弄して或は**泣**かしめ或は**笑**はしめ或は**憤**せしむ**藝術家**に同情を表し**美醜**を論じ**苦樂**を説き**經濟**を談じ**悟道**を示し**子規**を評し**弦齋**を笑ひ**半古**を揚ぐるが如き**空前絶後**の珍書といふべし

定價金六拾錢
郵税金八錢
表裝美麗
コロタイプ肖像入
寫眞木版拾數葉入

東京本鄉區森川町一番地
發行所 育成會
電話本局二千四百十四番

御洋文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

二月十五日發刊

をんな

每月一回十五日發行

每號紙數菊版百四十頁

定價金拾五錢全國無遞送料

發行所　麴町區下二番町二十七番地　大日本女學會

（電話番町千三百三十番）



大日本圖按協會編輯
圖按
第拾壹號 二月十日發行
每月 壹回十日發行
定價 壹册金貳拾錢
郵稅 壹册ニ付金壹錢
東京築地二ノ廿一
發行所 株式會社 國光社
電話新橋 特八八番 二六九三番

社會の風紀と篤志婦人

社會改良の一半は、確かに婦人の力を藉るにあらずんば、その目的を達するを得ざるなり。風俗の矯正の如き、風儀の改善の如き、敎育の進歩の如き、慈善事業の擴張の如きは、一人の篤志なる婦人の奔走は、十人の才智ある男子の計畫よりも、優れて其功を奏するは、事實の能く證明するところなり。況んや熱心篤志なる幾多婦人の集合したる團體が、歩調を揃えて、行動するに於ては、その勢力の及ぶところ、又た何事か成らざるを憂へんや。

かゝる婦人の大勢力によりて、社會の風習風儀を矯正改善し、且つ敎育の進歩を計り、慈善事業の擴張を企てゝ、社會の進歩を促がすべきもの、我國今日の狀態上、その數指を僂ふる

に遑あらずと雖も、彼の都鄙幾多の製造會社に於ける幾十萬女工の救濟事業の如きは、その最も重要にして急務なるものゝ一なりと信ず。

現に東京府下に於ても、紡績、機織、卷煙草等の製造會社へ寄宿若くは通勤する女工の數は幾十萬人の多きに上るべく、而して猶募集廣告の各處に貼付せるを觀れば、その人員の甚だ不足せるを知るに足るなり。世運の進むに隨つて、製造諸會社の次第にその數を增すは、必然の勢なれば、女工の需用は將來益々頻繁なるに至るべく、中產以下の女子は之に因りて、生活の資を得べきが故に一面寧ろ悅ぶに足るべきもののなきにあらずと雖も、之と同時にその裏面に釀成する多の弊害が、製造會社以外の世間にまで流布して、遂に一般社會に及ぼすものあるを思へば、予輩、悚然として恐れざるを得ざるなり。

今の各製造會社に於ける女工の風儀が、如何に野卑陋劣なるかは、今更ら之を云ふの要なかるべし。渠等は無敎育のまゝの赤子なるに加へて、世間にありふれたる野卑なると、陋劣なるとの二三を覺えて、製造場に入來りたるなり。而して大なる野卑と甚しき陋劣とは、工場の

中に於て、衆多の集合の前に行はれ、演ぜらるゝを見且つ聞くなり。さらぬだに無教育にして廉恥を解せざる無智の少女が、その耳目に充滿する野卑と陋劣との教育によりて、三年五年の間に養成せられ、感化せられて、復び己が住所に還るに及びては、その教育せられ感化せられたるところのものを以て、その村落の少女を教育し、市街の幼婦を感化せざらむや。その影響は多年都會の惡風に感染したる墮落書生が、故郷に歸りて、その地方の少年に害毒を與え、兵營より復歸したる農家の子が、奢侈の惡種を、その鄕閭に蒔くに比して、更に幾層の弊風と惡毒とを流布し、蔓延し、增長して、風俗を害し、風儀を紊り、遂に社會一般の風紀を傷害することと夫れ幾何ぞ。

工女虐待の風評の世に喧傳するや、初は其の眞僞を疑ふものすらありしが、工女の或は逃亡し、或は投水して、生死の間に迷ふものあるを眼前に見るに及びて、鞭撻、減食、剝衣等の苛酷なる拷問が、法律の手の及ばざる處に於て、罪惡を縱まゝにしつゝあるを發見して、工女の爲に一片同情の涙を濺かざるものはなかりき。何ぞ知らん、何人の眼よりするも、苛酷無法と

認め得べき所爲を犯して憚らざる工場の中には、愚夫凡婦の心には、有勝ちなり、當然なりと思はるべきもろ〳〵の罪惡が伏在して、跋扈跳梁をその範圍の中に極めつゝあるを。而も鞭撻や、減食や、剝衣や、酷は固より酷なりと雖も、禍を受くるものは唯その當人一個に止るのみ。痛みを受くる者は醫すべし。饑に苦む者には食を與ふべし。寒に泣く者には衣を給すべきのみ。輙ち容易に回復の道はあるなり。獨り彼の野卑なる教育を受け、陋劣なる感化によりて、養成せられたる惡風惡俗は、膏肓に入りたる疾と同じく、生涯治癒するべからざるのみならず、廣く之を世間に傳へ、長く之を子孫に遺して、その害毒の及ぶところ、殆んど測り知るべからざるものあるなり。

されば工女虐待の弊害の如きは、一たび發覺するに及びては、機敏なる警察の眼力は、之を未來に防遏すべく、假借なき法律の制裁は、之を事後に嚴罰すべきが故に、此の惡弊を撲滅するに難からず、且つ工場法の施行せらるゝに當りては、是等諸の弊害を擧げて、一掃し盡すを得んこと、期して待つべきなり。唯夫の野卑陋劣なる言語動作が及ぼすところの弊害に至つて

は、警察力、以て防遏すべからず。法律の制裁、以て罰する能はず。工場法また之を矯正するを得ざるなり。噫是れ國家の權と力とを以てすと雖も、竟に奈何ともする能はざるものにあらずや。國家の强權と勢力とを以て奈何ともする能はざるところこそ、纖々たる柔軟かき婦人の手の及ぶべきところには非ざるか。

憐れむべき無数の工女が、惡風惡俗に感染して、一身を誤り、一生を誤まるの一事も亦既に心ある婦人の熱涙を催ふすに足るなり。況んやその惡風惡俗の及ぶところ長く且つ廣くして、社會の爲め甚だ寒心すべきものあるに於てをや。社會改良の道に志ある婦人諸子は、速に起ちて、團結の勢力を振ひ、以て女工救濟の道を講究すべきなり。蓋し風習の矯正、風儀の改善に就きて、その前途に横はれる關門は工場幾千萬の婦女ならざるべからずして、此の關門打破の行動は、同性にして、且つ同情ある婦人の双肩にかゝれる責務なればなり。その改善方法の如きは、予輩聊か卑見あり、稿を更めて、之を詳述し、大方の敎を乞ふところあるべし。今はたゞ有志婦人に警告して、その注意を乞ひ置くのみ。



女子と技藝教育

湯本武比古

凡そ教育の沿革に就て稽ふるに今日の教育の多分は專ら男子を目的として設定せられ女子は殆ど眼中に置かれなかつた。故を以て女子の教育は今日尚は缺陥多く種々の誤解あるを免れない。我國に於ても近年に及び此問題は識者の着眼する所となり。文部の當局者を始め在野教育家中にも其刷新策を講ずるもの續々起るに至れりと雖も、論者の多くは女子教育の眞諦を解せず、成案の見るべきもの罕れなるは遺憾である。蓋し性質に於て男子と女子とは全然同一でない以上は兩者の教育訓練其方針を異にせざるべからざるや無論である。然るに此點に關する研究從來極めて疎漏に、世間往々男女同種の教育を施し効果を收めんことを期する者がある。謬れるの太甚しきものと思はれる。

女子教育は何を以て基礎とすべきやの根本的問題今日未だ決せず、衆說多岐に渉りて徒らに枝葉の說に奔る。是れ恐らくば論者か女子の心理と其社會的關係を精究せざる罪であらう。

方針を誤まりたる女子教育の結果、幾多の害毒と奇観を社會に生せしは吾輩の屢次目撃する所、否心ある教育家は何人も浩歎して居る事實である。

例之ば中流社會の女子にして堂々たる高等女學校を卒業しながら一旦人の妻女となれる曉に、日常必須の家政に通せず、命を僕婢に俟つが如きもの其適例である。語を換へて言へば、女子に對する在來の敎育主義は何故か社會の實勢と伴はない。故に女子にも男子と等しき學藝を授け智識を平均するを以て、敎育事業の進步と認めたる當方針は斷然革めなければならぬ。若し將來も依然として舊主義を蹈襲するに於ては、男女互に同一事に向つて競爭擠排することにはなつて、互に長短補綴和合して社會の圓滿なる發達を遂ぐることが出來まい。果して然らば女子敎育の方針は今日何に依つて定めやうかといふに、吾輩の見る所を以てすれば、女子の特性を啓發練磨し男子よりは女子に適當せる社會の分野に於て鞅掌すべき實用的人物を養生すべしとの簡單なる解答にて足る。强ひて艱澁なる學說を引證する必要もないやうだ。蓋し男女は各天賦の特性を具へて居る。女子の特性を顧みず、男子の特性を發暢するに適した敎育を女子にも施して而して女子は男子に劣るの及はぬのといふ。實に正鵠を得ぬ議論である。邦俗殊に然りだ。意を女子敎育に留むる者の宜しく熟考すべき所である。

成程女子の中にも男子と競爭して男子をして瞠若たらしむるものもある。斯うゐふ女子の爲めに男子の修むる學科の高等なるものを敎授する學校も亦固より必要である。されど眼を放つて女子敎育なるものゝ全面を通觀し、何を以て一般の主義方針と爲すべきやと問はゞ、吾輩は女子の特性に鑑みて先づ高等なる理論の敎育よりは實用的技藝敎育を以てせんと應へざるを得ない。勿論之は普通敎育以上の女子一般の敎育に就いていふのである

而して女子は其の天職を全うする爲めに生理や衛生等の學科は男子よりは深く修めねばならぬ。育兒法は特に修めねばならぬ。未熟の洋語、難解の學說、若くば黴の生へた古文學の如き由來勿體らしく科程中に編入せらるゝも、此等は女子敎育上果して若干の價がある。學政監督の任に在る者、かゝる無益の學科には向後可成制限を加へ、代ふるに實用的技藝を以てせば、生徒は卒業後直に世の需要に應じ其所學を實地に行ふことを得、一身處世の爲め社會の爲めとなるは必然と思ふ。斯の如き女子の從事すべき職業の種類と區域とは今や年々増大しつゝある。適當の技能だに有せば供給地に困る杯といふ虞は尚々ない。

坤輿各國中日本人は最も指手の動作に精わりと稱せられ、其中でも婦人は特に斯技に長じて居る。歐米の女子が三ヶ年の訓練を要する技藝をば、我國の婦人は僅に二ヶ年にに成就する程で、手藝は日本婦人の一大特長である。然るに世人は兎角子女の技藝者たるを厭ひ、朝野の敎育家も此問題に對して無頓着に經過し、其結果女子の禀性に反して公私各學校共不得手なる學術に可惜時間と腦力を費さしめて居る。何たる謬見であらう。世の敎育家が女子の心理を考究する疎に且つ敎育の方針を誤りたる結果は歷々として社會の各方面に現はれて居るが、滔々たる誤解者は今尚は空想を抱き女子にも男子と殆ど同樣な高等敎育を施すを以て社會の進步と心得て却て失敗するやうだ。女子師範學校の如きは專ら敎員養成を目的とする所なれば事情各々異なるも、高等女學校に至りては女子に高等普通敎育を授くるに止まるを以て、學術の注入所たらしめず、女子たる性格を養成することを務めねばならぬ。偖人の性格に於て何が

最も必要な要素かといふと、獨立自營の資格である。妻として賢妻良母たる許りでなく未亡人となつても獨立自營の良母たるべき資格を養成せねばならぬ。然るに其實況如何と顧れば、矢張前陳の宿弊を承けて重きを學術注入に置き、技藝教育の如きは全く等閑視して居るやうな憾がある。其卒業者の實用的人物として無資格なるや決して偶然でない。

世間の女子動もすれば世路崎嶇として社會生活の容易ならざるを訴へるが、社會の實情に推して之を審査するときは、這般の歎聲は誤解より發すといふ事が速に理解される。蓋し舊來の學制下に養成されたる女子は、實用的技藝を目的とせず專ら形式的學術を修めて滿足した。唯だ奈何せん生存競爭なる一大動機は女子教育をも牽制し、社會の進歩は前述の教育主義と方嚮を異にせざるを得ざるに及び、虛飾的人物の一方に排斥せらるゝに反し實用的人物は漸次需要を增して來た。一兩年來女子技藝學校（名稱同しからざるも）の續々都下に設立さるゝ如き一左券となすに足る。縱令女子たりとて適當なる技藝學術を備ふるに於ては社會生活も困難でない。かの世路難を訴ふるは、必竟技藝教育の修養足らず若くは絕無の者の言と思はれる。唯だ此際一考を要するは、科學の研究及び應用の如き女子は到底男子の敵でない。男女若し同一の業務に服して競爭的生活を遂げんとすれば女子は必定劣敗に終る。故に可成險を避けて夷に就き、女性の特長を發揮するに足る職業技藝を擇んで勝を制すべしといふ事である。

女子は一般に男子よりも業務に勤勉である。動作着實である。思索周密である。指手を勞する技藝の如き所詮男子の及ぶ所でない。而も其勢力業務

由來甚だ振はずして百事無能視されたるは何故ぞ他無し、學制の設定其の方針を誤まり、生徒も父兄も、朝野の教育家も相牽ゐて實用的技藝を等閑にし形式的學術を重んじたる結果に外ならない。果して然らば吾輩が女子教育の現況に鑑みて向後大に實用的技藝教育の奬勵と改善を計らんとするの微意、此上多言せずとも大抵了解されるだらう。

娯樂に就て

（本篇は同氣俱樂部に於て演說せられたるを其儘速記したるものなり）

下田歌子

私は今日何か話を致すやうにと云ふことで御邪魔をする御約束を致しました、今日は新年の御集りでございまして皆樣の御健康を御祝し申上げまして、それから又私共の爲に皆樣から健康を御祝し下されるやうな譯で、新年の初めでございまして至極御目出度いことでございます、それで此女子同情會の主意も成るたけ慈善事業などの爲に注ぎたいと云ふ御主意でございますから、勢ひ貧民の情況を見るとか、憐みを掛けるとか云ふ悲しい御話が多うございますが、今日は新年のことでございますから、少し愉快な御目出度いやうな御話を致さうと思ひます、けれどもドウも是が講談など〻違ひまして面白い御話を申上げて皆樣を御喜ばせ申す譯に參りませぬ。

私は昨年の暮に色々な人から問はれました所の此社會の進む一現象と致して皆か注意を惹て居る娯樂と云ふことに付て御話申さうと思ひます、即ち樂みと云ふことは種々でございませうが、其樂みは自分の一身に起つた所の至極喜ばしい樂みもで

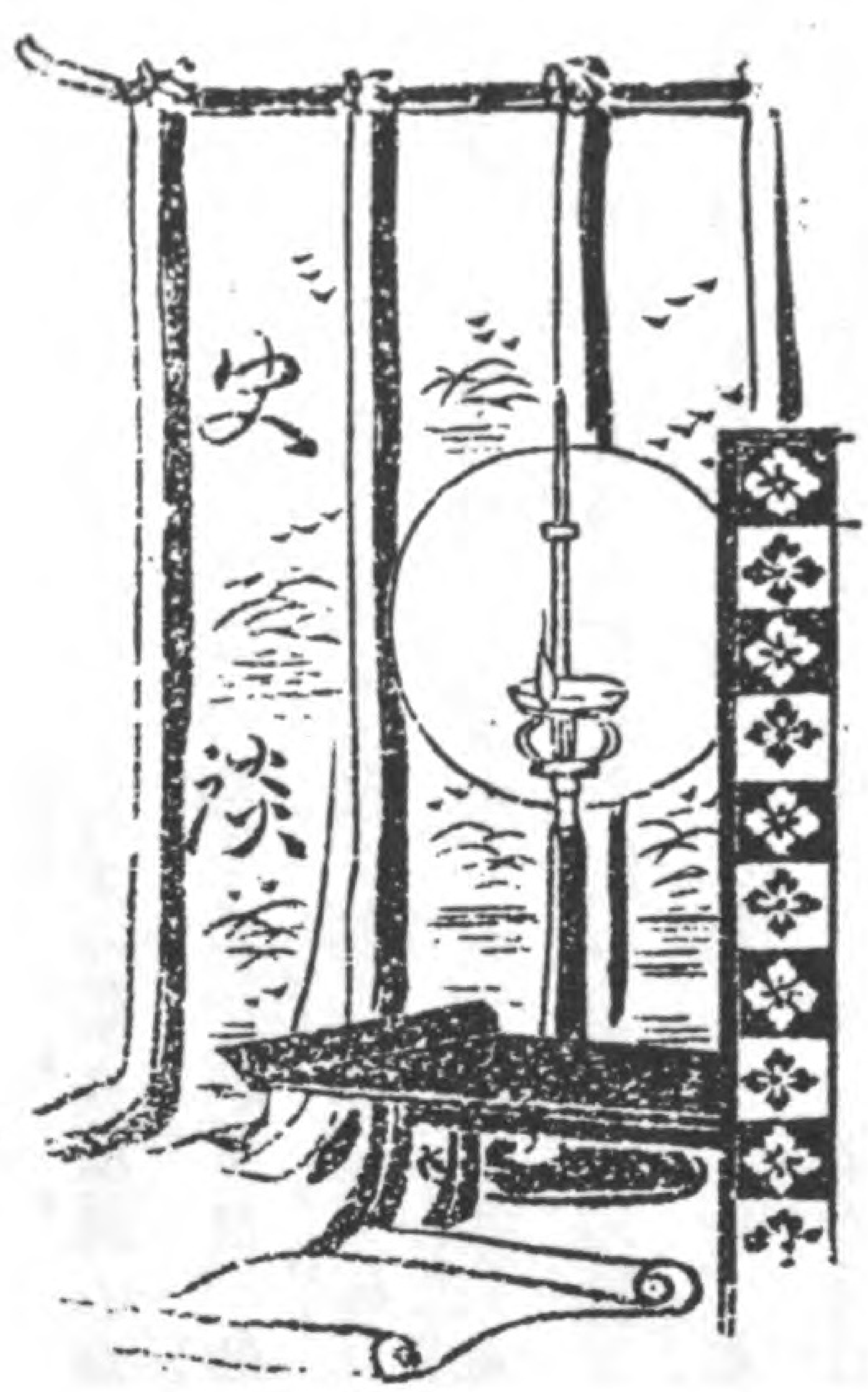
ざいませうし、又社會一般の時期が樂む時期であると云ふこともございます、即ち一月の初めなどと云ふのは時期が娛樂の時期であります、それ故に多少心配のある人も悲みのある人も一月一日は御目出たうございますと申します、それで新年には新年宴會とか何とかで、皆寄つて樂みを致します、即ち御若い方であると、羽根をつくとか、鞠をつくとか、加留多を取るとかして樂みます、それから一身の樂みでありますと是は個人〳〵で違ひます、樂みは一つと云ふものでありませぬ、それで此娛樂と云ふことは社會の進步の助けとし、又交際の助けとして是も矢張り研究を致さねばならぬことでございます、それはドウ云ふことであるかと申しますと、此職務とか義務とか云ふことは、之を氣候に例へて見ますると、冬の凛とした冷たい誠にムヅカシいものでございます、それから娛樂――樂みと云ふことは、氣候では春の氣候のやうなもので、花も笑へば鳥も歌ひ、氷も溶ければ雪も消へると云ふやうに、總て愉快になります、是も娛樂の力でございます、それで此社會には冬と云ふ寒い氣候があつて、雪などが降つたり、氷などが張つたり致しまして、此黴菌などが死んで仕舞ふやうな氣候が、至極大切でございます又是と同時に冬が去つて仕舞ふと溫和な暖い心よい春と云ふものが參ッて、さうして樹木は芽を吹き、花は咲き、鳥は浮れて歌ふと云ふ此氣候が大切でございます、そこで人間は働きをせねばならぬ、勤めをせねばならぬ、其働きと云ふ力、勤めと云ふ力を最も強くし、最も健全にするのは、何がするかと云ふと、娛樂と云ふものが助けるのでございます、弓も強い弓は引搾ッて、さうして矢を番ッて放つ間は最も強く張ッてありますから

使ッて仕舞ッたアトは、早く弦を外して休めて置かぬといけませぬ、ドンな强い弓でも弦を張り切ッて置くと、イッか段々緩くなッて來まして、ッア强く張らうと云ふ時に、十分强くありませぬから、强い弓ほど引いて仕舞へば、直ぐ弦は外して緩めて置かねばなりませぬ、それと同じことで、人間も最も能く働く人は、最も能く休養せねばなりませぬ、勿論それは事の緩急があッて、國家に大事があッた時は、ドンなに遊びたい人でも、遊んで居ることは出來ませぬ、是は一般に働かねばなりませぬ、又個人の上でもさうでございます、非常な希望があり、非常な職務があり、非常な義務がある人は是は休まぬで働きますが、總て一般の社會の上から云ふと、餘り勤めて働いて馬鹿にやることはいけませぬから、矢張り休む時と樂む時とがあッた方が宜しうございます、それ故に大切働き續けますることは取除けであッて、決して十人が十人、百人が百人として望むことは出來ませぬ、又時期としても、十年も百年も續きませぬから、總て社會の事は、一般の人の宜いと云ふことを選ばねばなりませぬ、一般の人が最も能く勤めて、最も能く慰むと云ふ法はドウかと云ふと、娯樂の法を能く立てると云ふのでございます、それで文明の民は能く勤め、能く遊ぶと申しますが、果してさう云ふ理屈がある、それ故に社會の交際上、社會の進歩上から、總て此娛樂と云ふことが大切であります、それならば遊びませうと云ふ此遊ぶと云ふことが中々骨の折れるもので、遊ぶことは宜いと云ふ許しがあるから遊びませうと云ふと是はムヅカシい、なぜムヅカシいかと云ふと、職務として働き勤めとして苦んで居る中に、又自ら樂みが生ずるものでございまして、若し遊ぶこ

とに耽りますと、其遊びから苦みが生じます、世の中のことは餘ほど妙なもので、爭ひを起し爭論を起し、遂に喧嘩になるやうなことが、隨分遊びから起るのであります、又遊びに耽ッて居る間は情誼を破ッて遂に大事を起すことがある、遊ぶ中に餘ほど注意が要るのであります、それから又遊ぶと云ふ事柄の種類に依ッて、其國の進んで居るとか退いて居るとか、其人民の品性が氣高いとか甚だ卑しく汚れて居るとか云ふことを見出されます、規則立ッた國の有樣を見ると云ふことも、種々の人が集ッて氣を許して遊んで居る時に、其國民の性質に就て見付けられます、それでありますから、此遊びと云ふことも大變大切なものであります、德義などゝ云ふことが、此頃になッて却ッて廢れたとか、種々の非難もある、或は其現象もありませうが、併し一般社會の表面から見まする

と、此娛樂……娛樂とばかりも言はれませぬが、婦人の集りなどゝ云ふものも、此頃は非常に進んで參りました今より三四十年以前の婦人の集りは之を新聞や雜誌に出して誇るやうな集りは、殆ど無かッたと言ッて宜い、お友達同志が新年なら新年に於て集ッたとか、或は親戚が、祝儀不祝儀に集ッたとか、又は芝居見物に行ッたとか、踊のお淩ひに集ッたとか云ふほか、女子の集りは聞いたことがありませぬ、モウ一つ極く古い所では、朝廷の娛樂が進んで居ッて、上流の婦人が、文學に集ッたと云ふこともありますが、其六七百年以前の昔の上流婦人の集りの例を取除けました以後は婦人の集りは、唯今申したやうな集りのほか、集ッた例は殆どありませぬ、それが此頃の集りは或る所に慈善をする爲に集るとか、或る所の敎育を擴張する爲に集るとか、或る公共の仕事を助けや

らうと云ふ相談の爲に集るとか、或はお互の交際を温める爲に集るとか云ふやうに、婦人の會が起りました、其實効は豫期したほどまだ擧らぬことは耻なければならぬ、モッと進歩せねばならぬが、その集りの名や、又集れる時の體裁が隨分外國の人に見ても耻しからぬ有益なのが起ッて來ました、茲に於て集つて有益なお話を聴くとか、或は學術の研究をするとか云ふことゝも、一方にチヤンと規律を立てゝ、正き方に誘くと云ふのは、誠に結構なことでございます、又それを爲すには樂みと云ふことが必要であります、それで樂むと云ふことに付てドウ云ふ注意をしたが宜いかと云ふと、此樂みの種類に依ッて其國の程度が分るのである、其種類に依ッて其國民の信用も出來、又不信用にもなりますからドウか、此樂みを段々高尚の方に引上げて行きたい、即ち其樂みと云ふものが又社會を進むる手本になりますから、此樂みの種類を引上げて行きたいと思ひます。（未完）



阿能局（つゞき）

小泉三申

（六）兄妹の生別

六郎太夫は、主水が自殺して果たるを聞き、愁然として以爲らく、扨は彼れ我が眞意を疑ひ、失望

の餘り世をはかなみしにぞあらむ、我は固より義を忘れ利に走る世の常の輕薄兒にはあらざるものを、苟且にも兄弟の義を結び骨肉の親みを重ねたればこそ、賴みもし賴まれもして、互ひに胸中の神秘を漏らせるならずや、然るを尙ほ我が心事を思ひ誤まりて、心短かくも世を去りしは、彼が鑑識の足らざるにあらず、恐らくは我が誠實の足らざるなるべし、遮莫、丈夫の約諾、千鈞より重し我は只だ我が盡すべき事を盡して、行くべき道を行かんのみと深く心に決する所あり、それより後は、然り氣なく振舞ひつゝ、一意孝養を怠らざりき。

かくて幾程をか經にけるが、後藤が母は風邪のこゝちとて打ち伏しけるが、丈夫に見えても老木は風に脆く、一夜無情の嵐に誘はれて朝の露と消へ果てぬ、兄妹が嘆きは言ふも愚かなり、懇ろに追善供養して、やがて七々の忌も明けたり。

母だに兎も角もなりたる上は、我れ汝がために義に赴かんとは、後藤が曾て主水に約せし言なりき今はや老母は世を去り給ひぬ、主水に對する約諾を奈何にすべき、さりながら、敵と目ざすは誰あらう右大臣信長公なり、天下無双の猛將と世に謠はれ、天下無双の要害たる安土山に在城すれば、我れに賁育の勇ありとも、單身孤劍將た何事をかなし得べきぞ、所詮義に赴くとは死に赴くの謂なるものを、母死したりとて尙ほ最愛の妹あり、纖弱き女性のたゞ一人、母にも兄にも死訣かれていかに淋しき月日を送るべきやと、彼を思ひ是を思ひては、さすがに猛き六郎太夫も、とさまかうさま惑ひ煩ひけるが、今なまじひに包み秘さんよりは、寧ろ明らかに事の顚末を語り、諭しもし慰もして後顧の念を絕たんこそ、我が爲に

も妹が爲にも、なか／＼に心安らかなるべしとて、一日妹に對ひ、從容として主水と約せし一伍一什を物語り、我が心既に決すれども、只だ卿の事のみ心にかゝりて、夜毎の夢も圓かには結び難し、弦を斷ち劍を懸けし古人の信義は、說くを要せず、ものゝ道理は卿こそ辨へたり、卿よく兄をして不義の人たらしめざるやと曰ふ。

妹は兄の諭言を聞きて、いかに驚き惑ふと思ひの外、莞爾として毫も愁る色なし、義を重んじ死を輕んずるは勇士の本意と聞き侍る、愚なれども妾も亦た家兄の血統を受けたる妹なり、別離の哀傷は私事にして言ふに足らず、家兄義に由て大丈夫の事を成し給はんとならば、只だ潔く事に從ひ給ふべし、妾は兎も角もして世を送りて、必ず家名を辱かしめざるやう爲し侍らむ、敢て少しも意を勞し給ふなかれとて、怡々如として家兄を勵まし立てぬ、實にや此の兄にして此の妹あり、其の意氣の壯烈なる、千載の下懦夫を起たしむべきかな。

六郎太夫は、世にも頼母しき妹が決心を聞き、卿が其の一言こそ我が爲めには千萬人の味方なり此の上は一日も躊躇すべきにあらずとて、遂に日を擇び旅裝を調へ、兄妹快く別離を叙しぬ、風蕭々易水寒、壯士烈女の心情、悲しくも亦た勇し。

（七）安土城の曲者

當時右大臣信長公は、既に畿甸の二十餘ケ國を平定し、江州日賀田山に新城を構へ、安土と改稱して之に居り、鬼柴田に越前を與へて北國の上杉氏に當らしめ、徳川家康を三河に置きて關東の北條氏を抑へしめ、これより將さに進むで南海中國に武を用んと爲たまへりき。

そもゝ安土山の城郭は、我が朝前代未聞の大建築にて、元是れ一天四海を知らしめすべき名城なればとて、仁義禮智信の五常に則り、五重の天守を組み上げたり、天正四年七月御譜請落成以來は、諸國の商人、集り來りて、城下の繁昌いはん方なし。

さても彼の千原の浪士後藤六郎太夫は、孤劍飄然として安土に來り、聞きしに優さる織田家の威勢に驚きながらも、厭くまで不思議の大望を懐きて運よくば信長公に一太刀酬いまいらせんと、眼を八方に配りつゝ、油斷なく時機の到るを待ち居たるが、信長公は御幼年より鷹野を好まれ、今も尚は折々城外に放鷹したまへども、前驅後從の警固嚴重なれば、身邊近く窺ひ寄るべき際もなくして、さしもの後藤も手を下さんやうなく、むなしく日を送り月を重ねたるが、斯くて有らんには際限なし、かねて亡き身と覺悟しつれば、危きを避け、難きを憚かる遑なしとて、密かに城内の案内を探り極め、夜陰に乘じて膽太くも城中に忍び入りぬ。

あゝ彼れ果して能く其の志を成し得べきか、夜深くして乾坤寂寥たり、安土城中、殘燈影幽にして、宿直の武士が鼾の聲のみ聞ゆる所、一個黑裝束の曲者あり、忽然として五層樓臺の殿廊に顯はれ出で、かねて右府公の御寢所と聞へたる一室の外に立ち、左右人無きを窺ひ、短劍を閃めかして躍つて室内に闖入した、言ふを要せず、是れなん後藤六郎太夫が、亡友福井主水の爲めに織田右府を刺さんとするものなるを、

既にして、曲者入れりの聲は、宿直の武士の咽喉を迸しり出でぬ、城中の諸士は愕然として驚き起てり、あゝ六郎太夫果して能く右府を刺し得たる

か、彼は首尾よく御寢所に闖入したりけれども、當時戰國の間に立ち、四方に敵を有せる右府公は、萬一の危險を慮かり、豫め空床を設けて敵を欺けり、憐むべし、彼はこの空床を冒したるなりき。

危きかな間髮を容れず、流星光底長蛇を逸せる後藤か遺憾はいかばかりぞや、宿直の武士は刄を揮つて四方より亂擊しぬ、されど後藤は周章てず騷がずよき程に戰ひながら、刀を逆まにして潔く自ら刎ねぬ。

されば城中の混亂名狀すべからず、いづこ如何なる者なれば、膽太くも我が君の御臥床を冒かしたるやとて、これより嚴しく同類を詮索せしが、彼は固より單身孤劍義に出つて斃れし者なり、他に一人半箇の同類をも有せざれば、安土の奉行職菅谷九郎左衛門が嚴重なる詮索も、遂に得る所なくして止みぬ、然らばとて、後藤が遺骸を城外に曝らし、傍に捨札を建て丶「これは御城内に忍び入りて斬り殺されし盜賊なり、若し此の賊を見知れる者あらば、速かに奉行所へ訴へ出でよ、三百貫の御褒美を賜はるべし」との意を記しぬ。

やがてこの評判城下にかくれなければ、諸人群集して之れを見れども、誰れとて見知れる者もなく徒らに罵しり騷ぐのみ、あはれ頂天立地の好漢たる後藤六郎太夫は、汚らはしき盜賊の寃名を受けて、芳魂長く眠する能はざらんとす、知らず、一人の起て義人のために寃を雪ぐ者有り耶無し耶。

桂昌院（つゞき）

文學士　小林雨塔

五代將軍綱吉の好文の質なる事は人皆な知る所なり、されば政を見るの暇老中以下諸臣を殿中に

召し、親ら論語を講じ、又尾紀水甲府加州等の大藩の主をして講義せしめし事あり綱吉は自から毎月八回の講演を開き、頓て論語を講じ了へて、又更に周易を講ぜられたり、之に就て桂昌院に關する面白き逸話あり、桂昌院一日増上寺に參詣せしに、住持の大僧正詮應(一説に祐天と云ふ)向ひ云ふ樣、上樣(綱吉を申す)には先頃より經書の御講義あり、誠に感じ奉る事に候へども、元來講義は甚だ六かしきものにて、下見などゝて中々辛勞を要するものに候、然らば上樣には晝夜政務に御苦勞なさるゝ上此く學問に御出精なされては、萬一御根氣に障り御病身ともならせたまはんかと御案じ申上候、就きては今少し御學問御控へ遊ばされたき樣存ずるとありしに、桂昌院答て我れの思ふ所は僧正の申樣と違ふなり、上樣の學問に精を入れらるゝは全く天下政務の助けとなさんとの思召なれば、天下の御爲にして私事にあらず、將軍家たるもの天下の爲に命ちゞまりたまふとも、更に憂べきにあらず、僧正は一宗の司ともあるべきものなれば諸國の末寺徒弟にも將軍家の御いそしみを申し聞かせ、まして其道の人々なれば晝夜學問を勵み、諸人に善き事を勸むるこそ肝要なれと曰ひければ、僧正も赤面して畏りしと云ふ、此を見ても桂昌院の資性のたゞならぬを知るべきなり。

爰に世に護持院僧正と傳ふる一僧あり、知足院隆光と稱す、桂昌院は深く此の僧を尊信して、爲めに幾多の弊を生ぜり、そも隆光はもと大和長谷寺の塔頭慈心院の住持にして、前に述べし護國寺住持亮賢の弟子なり、故に貞享三年知足院の前住持惠賢病死の時亮賢の推擧にて惠賢の後住となれり、此の年十月二十二日隆光(初め隆長と云ふ)亮

賢と共に將軍の前に召され尋で二十五日桂昌院に拜謁の時將軍も出座し、隆光に般若心經の一章講義を命せられしが、其講義巧なりければ、公も學僧なりと稱賛せらる、之によりて桂昌院深く之を崇信するに至れり、時に綱吉の幼子嚮に夭して今は鶴姫とて紀州家に嫁せし一女あるのみなれば繼嗣たるものなくして、綱吉も頗る心細き事に思ひ殊に桂昌院は一入之を歎き、或る時窃に隆光に向て御子孫繁榮の御祈禱の丹誠を凝すべき旨命せられしに、隆光はさるものなれば、奇貨置くべしとなし、云ふ樣こは中々の大法にてたやすく行ひ難き所に候へば、先づ御願主よりして萬づ清淨に保たせられずしては叶ふべからずとありければ、桂昌院直に之を將軍に告げ、將軍も尤もなりとて、さらば先づ祈願所として一宇建立すべしとて遂に有司に命じ神田橋門外の土地を相して、伽藍造營に取かゝり翌元祿元年三月漸く竣成したり始めは依然知足院と稱せしを、無本寺とし關東新義眞言宗の大本山と定め、後寺號を改めて護持院と稱しぬ、此れ全く隆光の桂昌院に取入りたる結果なり。

綱吉は世に犬公方と稱して、其の生類愛憐の政令は世に有名なる事なるが、此の爲め幾多無辜の民をして罪禍に罹らしめたるかは計り難し、しかも此れ又桂昌院の隆光の言を聽きし結果なり、初め城中の大奧諸所に狐狸出沒して、果ては其戯次第に多く座所寢殿の嫌なく狂ひ廻るに至りしかば、此の害を除かんとて犬を飼置きしが、桂昌院の住居にも又しかりしなり、一日隆光加持の爲出仕しける時隆光犬に就きて語るらく、是ぞ全く佛の御計ひと存じ奉り候、仔細に恐れながら上樣は(綱吉を指す)戌の年の御誕生なれば、尤も犬を愛

憐あるべき事にて、別して只今は御子孫御繁榮御祈禱の御中なれば、殊に犬を憐まるべき事と存じ候と、桂昌院深く之を信じ又綱吉へもしか申勸めしに公も此の折周易を講じ、氣數循環の理を研究中なりしを以て、あへなくも此る迷信の雲の掩ふ所となりて、直に有司に命じて天下に布告せしめし樣は、犬の事是までの如く無慈悲なる取扱致すべからず、萬一違背の者は急度嚴科に申付べし又武家町家共飼犬これあるものは、牝牡毛色年の程まで委細認めて屆出づべしと、此を手始めとして、如何にも笑ふべき、愚かしき布告度々出で此の令を守らねばとて、些細の事にも人民は嚴しき罪を蒙り、甚しきは命さへ失ふに至る、故に此の頃城受取の目錄中にも犬何疋と明細に記しある許なり、後には此愛憐の事啻に犬のみならずあらゆる畜類鳥魚の際まで及び全然殺生禁斷にして、四民の困苦一方ならず、殊に驚くべきは元祿七年大久保なる用邸二萬五千坪を劃して犬小屋を取立て、府下を搜索して主なき犬を集め飼ひしに忽ち十萬疋となりしかば、此の小屋にては狹しとて、明年又中野に十萬坪の地を見立犬小屋を作り、無數の犬を飼ひ立てしかば、一日の入用米三百三十石六升、味噌十樽、乾鰯十俵、薪五十六束と注されたり、言語道斷の事ならずや、此の暴令は綱吉薨館の日まで行はれしが、綱吉瞑目の日直ちに嗣君たりし家宣の命によりて廢され是に萬民始めて蘇生の思をなしたり、此れ全く僧侶の妄言より事起れり、此くて僧侶は大奥の女中の間に時めきて果ては怪しかる醜聞をも世に傳ふるに至りぬ。

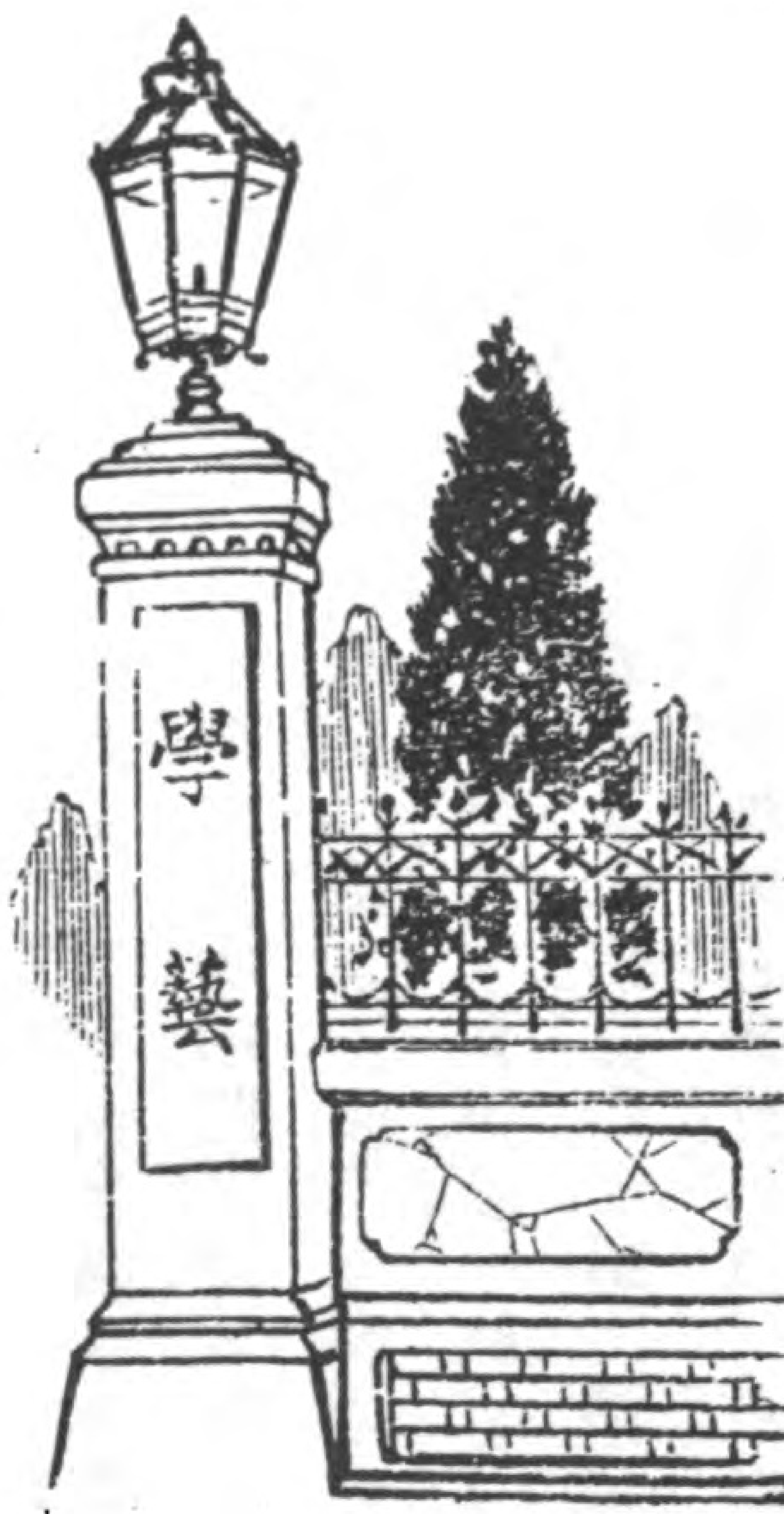
此の外桂昌院に關しては尙記すべき事多かれど、さまではとて略しぬ、要するに綱吉の孝順に乘じ僧侶の妄言に迷はされ、我執の強き性れば、萬事

學藝

己が心のまゝに行ひ、世に害毒を流せし事夥し、凡庸の婦人にはあらぬも、能く己が弱點に乘せられて他の利用する所となり、己れも德に遠ざかる世の婦人の有勝の一面を代表せる人と云ふべし、牝雞晨すれば國亂る、以て鑑戒となすべきなり。桂昌院は寶永二年六月廿二日逝去す、年七十九、法號を桂昌院殿仁譽興國惠公大夫人と稱す。（完）

尋むべきは人にことなるひと、倚うとむましきは、人に異なるさまの人。梅が香を櫻の花、柳の枝になどゝはおもふまじきことなり、心をつけて樂しむべし。たれりとおもふべきは我身、足らずとしてよきものは、つとむべき道。きゆる時をゆるして雪を見、栗の月を思ひて、夕立にあふべし。

白河樂翁



通俗土佐日記（第拾壹回）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

此の泊り、遠く見れども近く見れども、いと面白し、斯かれども、苦しければ、何事も覺えず、

○此の泊りとは室津を指せるなり、

○遠く見れども近く見れども　處に依りては、遠くては風景好くして近く見れば惡しく、又、

近くては好きも遠く見れば惡しき處あるものなるにとの心を含めて言へるなり、遠くとは、此處に漕ぎ寄せ漕ぎ離れなどせし時に見しをいひ、近くとは、碇泊中の眺望なり、是れ絶景を寫せる詞にして、やがて、下文に何事も覺えずとあるに、深く照應せしめたるなり、

○苦しければ　とは舟醉の爲めにもあるべけれど、又一つには、辛うじて出したる舟の復た元の港に返りて、何時都に歸るべしとも測り難き心の苦しさをいふなり、

○何事も覺えず　とは中庸に所謂「視レ之而不レ見、聽レ之而不レ聞」の心にて、絶景も絶景と思はれざるなり、

男同士は心遣りにやあらむ　詩などいふべし

○男同士　とは女の日記としたるが故に舟中の男の方を指したるなり、

○心遣り　とは心を遣るといふを名詞にいへるなり、苦しさの心遣りにの意にて、鬱散になどいふに同じ、

○にやあらむ　とは吟詩を聞きたる女記者が、男同士の心を推測していふなり、誠に興に入りて詩を吟ずるにはあらじ、男同士も實は苦しさの餘り、鬱散の爲めならんとの意なり、

○詩などいふべし　とは男同士の漢語をいふを聞きて、詩を吟誦するなるべしと察したるなり確かに詩なりとは聞かねど、屹度然るべき勢なるを察して、べしといへるなり、女の書く詞なれば、詩をいふなりと明らかに書かは、物知顏に聞ゆる嫌あればなり、且つ男子部と女子方とは船中と雖も隔離し居たるべければ、斯く想像的に書きて何處までも女の記したるらしくせるな

り、斯く男子部を區別して書けるは、此の下の歌數首は固とより紀氏の歌なれど、女の作歌と思しめんが爲めの手段なりと知るべし、

舟も出さで徒なれば、或る人の讀める、

磯觸の寄する磯には年月を何時とも分かぬ雪のみぞ降る、

此の歌は、常せぬ人の言なり、

○舟も出さで云々　の徒なればは、すべきこともなきなり、斯く徒なる故に此の歌を讀める樣に書きたれど、是も亦男子方の詩と同じく、苦しき心遣りに讀める心なり、

○或る人　は例の如し、此の歌と次のとの二首は、上にいへるが如く女の作としたるなり、

○磯觸　とは磯に觸るゝといふを名詞とせるにて、磯に觸れて立つ波のことなり、

○何時とも分かぬ　雪は大概冬に降る物なるに四時の區別もなき心なり、

○此の歌、磯の波の立ち止まぬを、四時の別なく降る雪と見たる由を讀みたるなれど、實は何時まで斯くて、都へ歸り得ざることぞと詫びたるなり、

○常せぬ云々　此の詞は前にもいへる如く、戯と紀氏ならざることを示したるなり、常は常にの意にて、せぬとは歌讀まぬといふ程の心なり

又、人の讀める、

風に寄る波の磯には鶯も春も得知らぬ花のみぞ咲く、

○人の　とせるは例の設けたるなり、

○風に寄る波の磯には　とは風に波の寄る磯にはといふ意なり、

○鶯も春も得知らぬ　とは鶯も春も知ることを得ざる花は、世にあるまじきを、斯くいへる

は、春ながら毎日風荒れ寒くして、鶯も啼かず春らしくもなき淋しきをいはんとしてなり、
○花 は波の砕けて散る様を見立てたるなり、
此の歌共を、少し宜しと聞きて、舟の長しける翁、月來苦しき心遣りに讀める、
　起つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつゝ人をはかるべらなる、
○此の歌共 とは前の二首なり、
○少し宜し の宜しは、歌を宜しといふにあらずして、善き歌といひて宜しき心なり、
○聞きて とは此の舟の長たる翁の聞けるなり
○舟の長しける翁 は紀氏を指せるなれど、土佐の任も誰と明記せざりしかば、是も猶は、誰とも知られざる様の書き様なり、
○月來云々 去年十二月より舟中に在りて倦みたる心遣りにといふなり、
○起つ波を云々 二つのかの字は、雪にあらずば花あるべく花にあらずば雪なるべく見ゆれば、其の孰れにか定めんとする意あるなり、
○人をはかる とはたばかるのた字の省かれたるにて、欺く意なり、雪か花かと思はするを斯くいひて、風を惡める心も籠れり、
○一首、風の波を寄せて雪かと思はせ、或は花かと思はせて人を欺く様なるを惡みて讀めるにて、波風の爲めに都に歸ることの遲きを歎き、且つは世の、外見を飾りて高位高官を受くるものゝ多きを憤り、身の配流同様の地に任せられしを歎けるなり、
此の歌共を、人の何角といふを、或る人聞き耽りて讀める、其の歌讀める文字、三十七字、人皆、得あらで笑ふ様なり、歌主いと氣色惡しくて笑まず、學べど

も得學ばず、書けりとも得讀み敢へ難かるべし、今日だに斯く言ひ難し、況して後には如何ならむ、

○此の歌共　とは上の三首を指すなり、

○人の何角といふ　とは人の評せるなり、下文に或る人聞きて眈りてとあるを以て察すれば、此の何角といふとは此の歌共の批難などしたるべし、

○或る人聞きて眈りて云々　眈るとは自負する程の心なり故に聞きて眈るとは、人々の評を聞くまゝに眈り心の生じたるなるべし、是れより下、又例の戯れ書きなり、

○此の歌讀める歌云々　三十七字ある歌なりしといふなり、字餘りの法に適へるものならんには三十七文字はおろか三十八九字あらんも差支なきことなれど、今此の歌は其れにも適はずして三十七字ありしを以て、人々笑ひ合へるなり、字餘りの歌の例は、二條院讃岐の「ありそ海の波間かきわけてかつぐあまのいきもつきあへず物をこそおもへ」といへる歌、第二句のみは法に違へれど、第一、三、四、五句は字餘りの法に叶ひて三十六字の歌なり、さもあらばあれといふ七字を五字に用ゐたる歌もあり、是は引き合はせてさまらばれとなるが故なり、さて本文、三十七字とある下には、必ずなりとかあるべき處なるを斯く省けるは、其の人の歌をいふや否や人々皆笑ひたるを以てなり、緩急宜しきを得たる法なり、

○得あらで　とは人々只にては得あらずといふ意にて、此の歌を聞き流して濟ますこと能はざりしなり、

○笑ふ様なり　とはさすがに其の歌主の面前な

れば、現然とは笑はぬ樣なるを、斯く樣なりと書きたるにて、凡手の及ばざる所なり、
○歌主云々　氣色惡しくては、前にもいへる如く機嫌惡しくてといふなり。現然とは笑はねど、笑ふことは明白なれば歌主機嫌を損ねしなり、畢竟、前の歌共を人の批難するを聞きて、我ならば然か批難せらるべき歌は讀まじと、聞き耻りて讀める歌なれば、笑はれて機嫌の惡しかりしも道理にこそ、
○笑まず　此の字恐ずなどの誤りなるべしとの說もあれど、斯くても解せられざるにあらず、につこりともせぬことなり、
○學べども云々　三十七字の歌を、其の歌主が言ひし通りに言はんとすれど言はれずといふにて、聞き覺えられぬ程の歌なりといふなり、
○書けりとも云々　聞き覺えられぬ程の歌なれば、よし書きたりとも、其れを見ん人讀み得ること難かるべしといふなり、頗る法外の歌なりしなるべし、以上の二聯、直接に歌を批難せずして、批難したるよりも數層其の歌の惡しさを思はしむ、絕妙の筆法なり、
○今日だに云々　今聞きたる當座さへ、其の歌のまゝをいふこと難し、況して後日にはいかでか言はれんやとの意をいかならむと書るなり、
○此の段、昨朝舟、室津に返りて此處に徒らに止まれる淋しさの餘りに、例の歎きを歌に讀みたるを、名の隱されたる此の日記ながら、然る歎きの爲めと人の見んことを恐れて、態と三十七字の歌のことをいひて、總て戲れに揭けるなり、故に此の三十七字の歌のことは、事實なりしか將た設けていへるか、兎に角、紛らさんが爲めに斯く戲れたるなり、

家政學大要講義

磯部武者五郎

余は本號より家政學の大要を抄摘して講義せんとす、もと〳〵大要あれば細き處迄講義せず、只大要旨だけを心得らるゝ樣にせしものなり、

（一）家政學の目的

家政學は一家を整理し、家政を辨理することを敎ふる學科なり、

（二）家政とは如何なるものなるや

家政といへば、衣食住の處理、家具金錢の管理使用、災難の豫防、家法の實行、子女の敎育、內外の交際、等に關する事件なり、

（三）家政學の成立

家政學は家事經濟、家庭衞生の二より組立てらる所の學科なり、すべての家政は此の經濟、衞生の二つに根據せざるはなし、

（四）家政學の分類

家政學を分類して講述せんとするに、科學的に分類すること甚困難なり、されば大略左の如く分類して可あるべし、

家政學の
- 性質
  - 家事經濟
  - 家庭衞生
- 物體―一家
  - 內部
    - 物に關して
      - 衣
      - 食
      - 住
    - 人に關して
      - 育兒
      - 養老
      - 看病
      - 子女敎育
      - 僕婢使役
  - 外部
    - 交際
      - 禮法
        - 日本
        - 西洋
      - 通信
    - 避難
      - 自戒
      - 防禦

主婦は以上分類せる諸般の事項を執行するものな

り、之を政府に譬ふれば一家經濟の事は大藏省、内部に關しては内務省、交際に關しては外務省、子女教育に就ては文部省、遞信に就ては遞信省、避難に就ては陸海軍二省の事務に當る、主婦たる者は一身にして一家内の諸官省の事務を主宰する總理大臣なりと云ふべし、

（五）家事經濟

家事經濟は一家内の金錢物品の管理使用より、衣食住より交際避難に至る迄、有効なる處理を得せしめ、以て一家の富を増進せんことを圖るものなり、

（六）金錢物品の管理

金錢物品の管理の要領は左の如し

（い）金錢の出納
- （イ）金錢の出納は明記すべし
- （ロ）金錢支出は豫算を立つべし
- （ハ）出納は自ら爲すべし
- （ニ）儉約と吝嗇とを區別すべし

（ろ）金錢の貯蓄
- （イ）預金
- （ロ）保險
- （ハ）貸付金

（は）物品の購求
- （イ）現金にて購求すべし
- （ロ）必要生して購求すべし
- （ハ）價格相場を心得購求すべし
- （ニ）日用品を先きとし娯樂品を後にすべし
- （ホ）物品目錄を備へて其の品目を記すべし

（に）財產の購求管理
- （イ）財產目錄を備へて其の價格を記すべし
- （ロ）毎月財產一覽表を作りて其の増減を明示すべし
- （ハ）殘餘の金錢は財產購求に充つべし
- （ニ）基本財產又は不動產の増殖を圖るべし

（未完）

和畫通信講義

山崎彩峨

墨畫にては、白色または、斑形ある貝は、淡墨にて、黒色の貝は、淡墨を含みし筆先に、濃墨を附して畫く、藻は淡墨にて描くなり。

彩色なれば、白色または、斑點あるものは、先づ淡墨にて形狀をとり、後ち、胡粉を塗り、乾きたる處へ、何色にても、其實物の色にて隈を入るべし。黒色のものは、赭墨か胭脂を含めたる筆先に濃墨を附して畫く。藻は黄がちの鮮靑色にて、畫くなり。

眼



家庭



子女の教養

島津公爵家
家庭教師　ミス、ハーワート談

先づ小兒の身體の健康に就てお話を致します。健康を保つには、一番に新鮮なる空氣を要します。夫れから充分に睡眠する事、色々な遊びを澤山にする事。毎日入浴する事で御坐います。夫れから余り濃厚いものを多分に食べさせてはいけません。併し私の遊びを澤山させる樣にと申すのは、無益な遊びのことではありません。私なども常に諸公子をお遊ばせ申すにも、翫具には、時計とか數字の書いてあるものとか、其他種々の動物とか、草木の書いてある物なんぞを集めて、夫れに就て遊戯の間に、時計の時間を教へたり、數字の位取りを教へたり致しますと、お子樣方は物を習つて居ると云ふ感念は少しも無しに、只樂しく遊んで居られるのでありますけれ共、知らず識らず其内に物事を覺えて居らつしやれます。

夫れから運動に就ては、先男の子にはクリツケツトとかテニスとか、馬に乗ることゝか、大勢して競走なさる事なんども、極く必要で御坐います。女の子にも矢張り、テニスとか馬に乗ることや、クリツケツトとか云ふ樣な事が宜う御坐います。遊戯中に於て注意すべき事は、其遊んで居る間は

決して他の方に眼を觸れないやうに成る丈け其方に斗り熱心に注目するやうに敎へんといけません夫れが遊戯中に就て、一番主なる注意すべき事柄で御坐います。

世間には善く遠足運動など﹅申して、一日の中に十哩程も運動させると云ふ事が澤山ありますが、私は是れには反對で御坐います。尤も日々夫れ程の里程を歩かせる事が出來るならば宜しう御坐いますが、平日は餘り歩行を爲さない習慣を付けて置きながら、稀に一日丈け澤山の運動をさせるのは、大變に身體の爲めに宜しくありません。で若しも止むを得ずどうしても、澤山歩かせんければ成らぬ事のある場合には、曾て前々から歩行く稽古をして、習慣を付けて置かないといけません。夫れから運動が果てた後にも矢張り餘計の運動を續けないと不可。最も此事は不意に非常の運動をさせてはいかんと云ふ丈で、決して少しも運動しては成らぬと云ふ譯ではありませんから、お間違ひの無いやうに願ひたいのです。素より日々に運動と云ふものは、必要であつた、健康が許す限りは、雨が降つても、風が吹いても、ちやんと一定の時間丈けは、歩かせないといけませぬ。但し濕氣と云ふものは身體の爲に大變害を爲しますから、衣服は勿



論靴なんぞも、濕つたものを着けては宜しくありません、何時も乾燥した物を着けて、一定の時間丈け運動すると云ふ事は極く必要で御座います。食事と食事の間に種々なものを食べさせる事はいけません。凡て食事は一定の時間通りに食べて、間には食べん方が宜しい。殊に甘味いものは宜しくありません。又小さい小供に食べさせる副食物は肉類は餘りよろしくありません。却て野菜とか菓物の方が宜しう御座います。

夫れから、極く神經の過敏な小供であれば仕方がありませんが、而うで無い限りは、成るべく夜分睡眠中は、燈火を點けて置かんやうにするが宜しう御座います。どうしても燈火が點いて居ると神經も充分休む事が出來んし、又室中の空氣も惡く成りますから、大變身體の爲めに宜しくありません。

小供には不規則を敎へてはいけません。成る丈け總ての事を時間通りに處置して、恰も兵隊が規則を遵守せんければ成らぬ如くに、小供にも、食事の時間から、起床の時、散歩の刻限等皆一定の時間に依つてさせないといけません。此の規則、不規則と云ふ事は、大變に道德に關する事で御座いまして少さい時に不規則な育ち方をすると、どうしても道德を重んじない樣な人間になります。私は始終お子供さん方に對しても、室の壁に貼つてある奇麗な紙の畫などに就て談話をしたり、又天氣の好い時に外へ出て、空が奇麗に晴れて居るとか、野原の草が美しく生へて居ると云ふ樣な事を話して、其樣な簡易ところから色々敎へて參りますさうすると、自然と小供衆の心が優美なつて、些細の事にも注意するやうに成ります。而うして猶は私は常に諸公子方に對して、英勇豪傑の傳

を書てある書物を讀んでお聞かせ申したい名高い人のお話なんかをして上げたりして、決して無益な話なんぞをせずに、一寸した事にも有益な事を話すやうにして居ります。

日本ではどうか知りませんが、小供には餘り翫具を澤山與へては不可と云ふ考へを以て居ります。夫は何故かと云ふと、つまり翫具が足りなければ、小供自身が木でも紙でも持て來て、自ら翫具を工夫して拵へて遊ぶやうに成つて自然腦を働らかせるやうな習慣が付いて、小供の智育の上に取つて宜しからうと思ひます。

小供を教育するに就て一番必要な事は、何でも奇麗にする事、即ち整頓する事を教へる事が肝要で御座います。翫具でも、器具でも、不順序に彼方に散らして置いたり、此方に散らして置いたりさせてはいけません。小供の時に、不整頓な事を爲馴れて居ると、夫れが大人に成つても直らないで、矢張り何の事業でも整然とした事が出來ないやうに成つて仕舞ひます。



之れも肝要な事でありますが、小供が物を人に與る事を悦ぶ樣に教育する事が必要で御座います。自分は兎も角も、人を先に悦ばせて後に自分が悦ぶと云ふやうな性質を養はなければ成りません此事に就ては、親が餘程注意せんければなりませぬ。何故かと申すと何れの親でも、親と云ふものは、自分の子を愛するのは當然の事でありますから、一寸物を與へる

にも、自分の小供の方に善い物を先に遣りたいのが常で御座いますが、さうしては矢張りいけません。先づ親からして、他人の小供に善い物を先に遣つて夫れから後に自分の小供に與へるやうにせんければ、迚も小供を教育して行く事は出來ません。けれ共此事は世の親心として、隨分難い事であらうと思ひます。(つゞく)

小兒の涙

しづえ

小兒の涙、即ち小供が泣くといふことは教育上大なる關係の有るものですが、世には餘り注意せぬ父母が多い樣に思はれますから、一二の主な事柄をあげて御話しませう、さて小兒といふものは至つて天眞爛漫であるから、自分で腹が痛いとか、苦しいとか、欲しいとかいふ種々な思想が心に浮び出して、夫れが意のまゝに成らぬ時は、直ぐ泣く、だから泣くのは即ち自分の意思を發表する言語である、故に其の言語が何を意味するかを聞いて父母たるものは、之に應ずべき處分をせねばなりませぬ。先づ其の一ツは

◎疾病の爲めに泣くのであります、注意深い母ですと直ぐ氣が付きますが、多忙であつたり、又は投やりの性質ある母ですと、其の原因を取調べないで、叱つたり、慊したり、菓子を遣つたり、などして機嫌を取つて泣止ませやうと致します、が此れは甚た不都合な不親切な話で、親たるもの丶任務を缺ぐのであります、マア一寸と見ても分ります、小兒が腹の痛い時分は、足を縮め體を屈めて泣くではありませんか、そんな分り易いことも氣を付けて居なければ、駄目です、だから充分氣

を付けて、早速適當な方法を取るべきでありますが、成るべくなれば醫師の診察を乞ふが宜しう御座います、夫れから

◎恐怖より泣く事が有ります、此の恐怖に依つて泣止させやうとするのは、小兒の成長後大なる害の有るものです、小膽、迷信、因循、等は多くこれから原因して來るのです、清淨潔白な心の底に恐怖なる汚點を付けて無暗に物を恐がらせるのは早や其の兒に一つの弱點を打つたのであります、

これに付いて斯う云ふ話が有ります、

東京の某家で常に狐が來るとか、親父さんが恐いとか、お化が何うだと云うて、小兒の泣きを止めて居りました、或時の事に矢張此の術で巡査さんが來るよと言うて、泣を止め菓子をやつて戸外に遊びにやりました處が、其子が戸外に出るや否や氣絶しました、家族の者が驚いて出て見ますと、折も折其の子が出たと同時に、巡査が通り懸つて、此子に「坊つちやん」と云ひ掛けたで、今此の恐いと云ふた巡査さんで泣き止んだのだから、小兒は驚いて此の始末になつたのであります、

之にても恐怖を起させて泣を止むるといふことの非道なのは分ります。夫れから小兒は自己の

◎希望の達せられない事よりして泣くのがあります、是は教育上最も大切で、此の注意の如何に依つて、我儘者となつたり、虚つきとなつたり、惡太郎となつたりするのであります、それで斯る場合に親の注意すべきことを左に記します、

一、望の直に叶ひ難き理由を親切に話り聴せること

一、それと同時に氣轉を利して他に意志をかへさすること、

一、涙は母の最も好まぬことを語り聽せると、

一、此際若し他日を期して望を遂せしめんことを約せしあらば、母は其れを忘れず必ず其の期日に望を遂せしむること、

などで一日禁止しても、間もなく其の望を遂せしむる樣な不規律なことを致してはなりません、夫でないと小兒の心では、泣きさへすれば、何でも望は遂せられる、とさもしい心が萠すやうになりますから、充分注意しなければなりません、狂歌に『子の愛にひかれて呼びし飴賣の踊りはやすも親馬鹿ちやんりん』と一寸穿つたところがあります、よく御研究なさい。

家庭と動物（上）

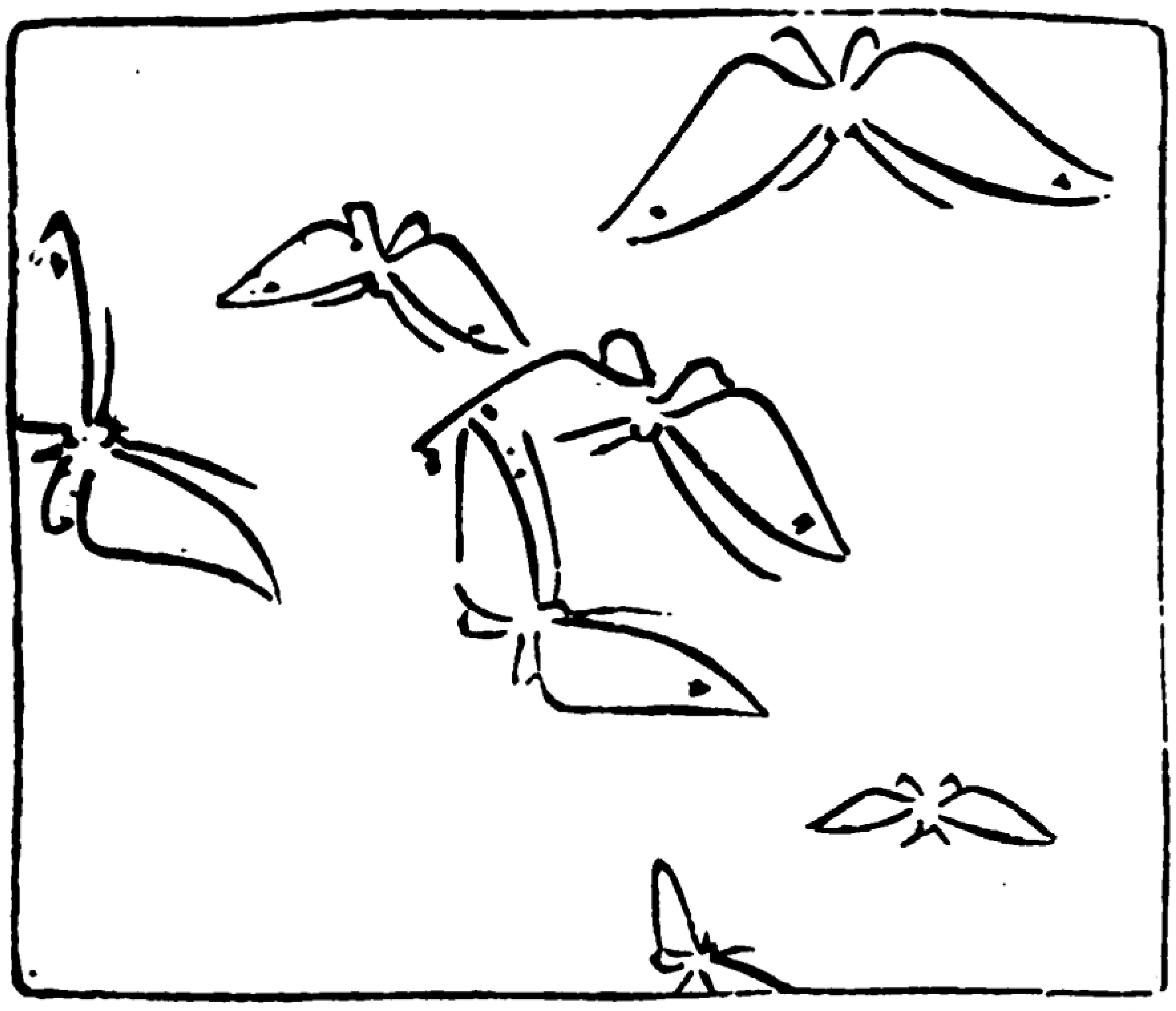
獸醫學士　四走涙人

家庭の圓滿と平和は、其家庭を圍繞する物質に仍りて、補助せらるゝのが常であります、我國にては未だ此邊の注意に對し、兎角滿足を表し兼ねるものが多いのであります、曾て某文學士が女子修養會演說の席上に於て、家庭の快樂を論じたることがあります、其時にも僅かに庭園の樹木に及び植物と動物とは倶に家庭に趣味の多いものであると言はれたのみで、詳いことを聞かなかッたのは甚だ殘念でありました、家庭を圍繞する物質と云へば、其種類も甚だ多く、之が細說には又た多くの言葉を費さねばなりませぬが、先づ住屋の構造室内の裝飾、庭園の光景此れ等は蓋し其大なるものであります、併しながら之が設計に又た其主人たる人の生活の程度を標準とせねばなりませぬ大小長短の構造皆此の範圍に屬して居ります。庭園の光景としては、是れまで種々の議論もある樣に思はれて居りますが、獨り此の動物の事に就

家庭

ては詳しく之を論じたるものがありません、元來日本の庭園は、植木屋と云ふ職人の手に仍りて、拵へられて居りますから、花卉、盆栽の如きは貴賤上下の庭園を通じて、盛んに行はれて居りますが、之に反して動物は甚だ寂寞たる關係を以て、小數なる家庭に飼養せられて居る位であります、斯樣の狀態となりますれば、動物と植物との趣味の關係を申上げて是非共趣味の多き動物を庭園に養ふことを勸告せねばなりません。

凡そ人々の性質に依り、動物を愛するものと植物を好むものとの二種の別がありますが、要ずるに趣味の豐富なるものは誰れにても之を好み且つ愛するの性質を有ッて居ります盆栽、花卉は家庭の伴侶としては、申分なき樣なれども、此れは僅かに短き花の期節か但し又霧の朝、雨の夕、雪中、雨中の光景位にて、其他は始終同一の姿勢と同一の狀態でありますから、深く人目を嬉ばしめ、又た人心を慰むる程のものではなかろうかと思ひます、唯だ或る場合に於て高尙にして、優美だとか、雅致だとかを賞する位が花卉、盆栽の長所と申すのであります、動物は優美、雅致と云ふ點に於ては、確かに一歩を植物に讓りますが、其代り日常愛養の趣味に至ッては、遠く植物の企て及ぶ能はざる點が澤山あります動物中にても最も趣味の深いものは犬にして猶之に次ぐ、其他の動物には家禽類の如き其種類の異なるに隨ひ、夫々特有の趣味があり



ます、今此には、犬に就ての趣味を述べ順次他の動物に及びます。

犬は能く人に愛嬌を賣り、又た能く人に親昵するの性情を有して居りますから、之を家庭に愛養するときは、家庭と倶に其苦樂を同くし、暗に家庭を慰むるが常であります、若し夫れ諸君が平和なる家庭を望まんと欲せば試に其家庭に一と夫婦の犬を養うて御覧なさい……主人は常に外にありて、煩雜なる業務に從事し、心神を勞し、躰軀を疲らして歸る、必ず一と夫婦の犬は門に出で丶家族と倶に其主人を迎へ、尾を掉り頭を垂れて其勞を慰撫するなどは、家庭中に於て他の物質の容易に及ぶべきものではありません、又家庭の無聊に於て、其妻君たり、其子女たるを問はず、犬を相手に戯るゝときは、其心は始終天眞爛熳とありますから、更に惡念を蓄へず、惡謀を企てず、之を教育を受くる時代の兒女に見るときは、高尚なる心理の究明に價ひすべく、之を一家を料理する妻女に見るときは、清快なる家庭の温風なりと形容するの價値があります、夫れ斯の如く、一家の主人も、一家の妻君も、將た兒女も犬の愛養に恩惠し、偕に之を娯樂の伴侶と爲し、家庭を温和にし、家庭を優柔に致しまする譯は、犬其もの丶性質が自然に親密の關係を家庭に有つて居るからであります、ソウして又た一面には訪問の客を勞ふと云ふ餘興があります、御承知の通り犬は家畜動物中に於て、最も怜悧でありますから彼れの行動は一から十まで悉く皆な大なる趣味であると云はねばなりませぬ、常に家庭の平和を重んずる西洋諸國にては、先づ中等以上の生活を爲す家庭には必ず數頭の愛犬が飼つてあります、常に主人は勿論一家の人々交る々々之と相戲れ其趣味に溺る

るものが澤山ありますソウです、所謂愛犬道樂一名犬狂とも云ふのが是れであります、彼の酒色に溺れ、遂に其家を忘れ其產を空うするものに比すれば頗ぶる上品にして且つ愉快なる道樂であります。

聞くだに畏こきことながら、我　皇太子殿下には頗ぶる動物御愛養の御性行に富ませられ、現に青山御所の御構内には、各種の御愛犬を始め、猿、熊兎、家禽の類を數多く御飼養あらせられ常に御嗜好を深く動物に傾けさせられ、殊に犬は御獵犬其他を通じて、三十有餘頭の多きに及ばせられ、毎日數回づゝ種々の技藝を御試驗あらせられ、常に其趣味を御歎賞遊ばさるゝやに承はりて居りますが此の御美風は漸く下々に傳はり、近來となりましては、華族方の家庭に段々と動物飼養の流行を初め出して參りました、是れに次で所謂中產以上の家庭もポツ〳〵と此の流行に趁はるゝのであろうと思ひます、否な寧ろ高潔なる家庭の必要は此の狀勢を促がして參つたのであります(未完)

だいどころ

鷄卵半熟の法

きな生

なんでも無いことの樣たが、うまく鷄卵を半熟にするのは、一寸むづかしいものである、此頃の何新聞かに鈴木醫學博士の發明談も載つて居たが、博士の方法は器具などが、揃はなければ、出來ぬと故、折角の發明も、先づ普通の家庭では、實行し難いのは遺憾である。

そこで如何なる家にでも、容易に實行するとの出

來る半熟の法といふは、卵子五個ならば、五個の容量より少し大きな鍋か湯沸しかを選みて、半分位水を入れて火にかけ、水の充分に沸騰るとき卵子を匙かなにかで、破れぬやうに鍋の内に入れて直に鍋を火よりおろし、五六分間程經て、取出して食するときは、白味は半流動體となり、黄味は煉羊羹の如くなりて、丁度宜しい程合のものになつて、おいしく喰べられる。

此の方法ならば、新參の下婢でも、すぐに解ることは勿論であるが唯だ注意せねばならぬのは、卵子を鍋の中に入るゝときには、湯が充分に煮えたつて居らねばならぬこと、夏季には火の上にかけたまゝでは、茹卵子の如くなる恐れがあるから、鍋をおろしておいて、直ぐに卵子を入るゝその二つである。

又一つの方法は卵子を器物に入れて、煮立つた湯を卵子の全部を充分に浸すまで注ぎ、そのまゝ蓋をして、二三分間立ちて後、その湯を棄てゝ、更に新しい湯を入れて前の通りにするのである、而して其湯を取替ゆる度數は、冬は三回で、夏は二回で十分である。

仮りにも我れを智ありとし、善なりと思ふべからず、吾が身の力を恃みて人を愚なりとし、侮るべからず、諫を拒ぎ我れを是とすべからず、人至て愚なりと雖も一事の善なきこと能はず、故に愚人の言をも理あるは取り用ゆべし、我を智ありとするものは、必ず愚人なり、我を善なりとするものは必ず惡人なり、惡を知るものは大惡にあらず、人を侮るものは必ず天の咎あり、人の怨みあり、我に學問智慧藝能ありとも、是れ皆我が分内の事なれば、矜るべきにあらず、是を自慢し、人を侮るべからず、古の君子は聰明叡智なれども之を守るに愚を以す、況や末世の凡人、僅なる才能に矜るは片腹痛きこと也。

貝原益軒



俗一言芳談

幸田露伴

序

そのむかし足利時代に成りたる書に一言芳談といふものあり。何人の編みつゞりたるにや明かならねど然阿上人よりは後、兼好法師よりは前に作られたるものにて、慈鎮、明遍、解脱以下それ〳〵の高僧碩徳たちの語の、道をすゝめ心を發すに足るべきを、次第も無く取り蒐めて、世の人々の迷を開き悟に入るの便となせるものなり。今こゝに其のおもむきを取りて、其の姿をうつし、我が知れる浮世の人々の語または、我が知れる人々より聞きたる人々の語の、我をして或は面白しと思ひ或は實にもと點頭かしめたるを、何の次第も無く取り蒐めて、我が心の友となし師となす一冊となせるに臨み、私にこれを名づけて俗一言芳談と申し侍る。

露伴學人識

○

◎年若くて夫に別れ、幼より養ひたるたゞ一人の子を頼みの杖とも柱ともして、終に其子を世に立ちて羞かしからぬほどの人となし果せ、今は心やすく世を送る老いたる女性の申されける。我わが養ひ子を生したつるに心を苦め思を費したること一々言ふべくもあらぬなり、特に我が眼の前ならぬところにて、如何なる事をなし、如何なる遊びをなし居るならんと慮るにつけては、一ト

方ならず胸を痛めけるが、後に圖らずも我が眼の及ばぬところを見徹すの道を得たるより、復女の常の習ひなる思ひ過しといふことをせざるやうになりたり。そは毎日〳〵我が子の眠れる間に其の小き蝦蟇口を撿めて一日の使ひ棄てたる額を明らかに知り、さて我が子が用ゐる品々の中にて新に購はれたるもの丶有無に照らし合はすれば、おほよその冗費の額を知る事を得。學問に心入れ深き時は、手帳、筆、鉛筆などの精品を買はんがために金を費すことはありとも、冗費は必ず少きものなり。又藝事に心の入らぬ時は冗費必ず多く、惡き友と交る時は、冗費愈々多くして且不定となるものなり。かく冗費は心術と行狀との良否を表すこと比へば寒暖計の暑さ寒さを表すが如くなれば、これによりて我が眼の及ばぬところを察して、それ〳〵の心備へをなし、善きことを其の弱きに扶け、惡きことを其の小なるに懲らすに、其の功甚だ大なるを覺えたり。

◎或田舍の人の云ひける。掌の皮の薄きものには心の病多し。

◎一生に幾人と無く夫を替へたる恐ろしき女の云ひける。はじめて夫と頼みたる男を振り棄てし時は、よく〳〵心に染まねばこそ思ひ切りたるなれど、さて年を經て後は其の男を思ひ出だす日少からず、幾人も夫を替へて後また夫を替ふる時は、堪へ難しといふほど厭はしかりぬを振り棄て丶、しかも其後に至りても思ひ出だす日など少し、これを思ふにつけても女の初めて夫と頼みたる男を棄つるは愚かなる事なりと知りたり。男を振り捨つる時、おのれを賢しと思はぬとは無かりしかど、

◎或男生活の聊か苦からぬやうになりしより古き陶器を集むることを樂となし、か丶る事に數十年の功を積める老いたる數寄者を師と頼みて、共に古き道具など賣る店々をあさりし末、或所に

て青磁の花瓶の佳品を見出しければ、數寄者は價も高からねば買ひ玉へと勸む。男も佳品とは思ひけれども大なる疵付きてありければ、あはれ疵無くば疵無くば、と云ひて終に買はず、數寄者はこれを見て冷笑ひながら、おのれ自ら買ひ取りつ、さて歸るさの途にて男に對ひ、卿は心に味無き人なり、我が如き者の友ならず、疵無き花瓶を求めんとならば、新し者賣る店にて購はんに、いくらも之を得べし、かく南北に彷徨ひあるきて要も無きもの丶古びたるに手を觸れ眼を注ぐは、面白き趣きあるものを得んとすればなり。されば物の形、釉の色だに面白くば、疵の一ツ二ツありたりとて何の厭ふべき事があらん、喜びてこれを購ふべきなり。卿知らずや蜷川式胤は陶器の缺片のみを一ト藏も有ち居しなり。數寄者の優しき心よりは缺片だも猶棄つるに忍びず、まして少ばかりの疵あるものをや、物の疵を厭ふほどの情無き人の友となりて歲月を經んも心苦し、我もまた人として疵無きならず、交りもこれまでなり、さらば、といひて別れんとしければ、男はひたすらにおのが心の淺かりしを詫びて、それより古の明主良將といはる丶ほどの人は皆疵物の疵を厭はず召抱へて功を立て名を成せしものなることを悟り、疵物をも厭はず買ひ集めしほどに、やがてあらゆる陶器を蒐め得しとぞ。

◎ある家の老婆其孫の智慧早きを見て悦ばずして云ひける。兩親の子を愛すること強くして子に對ひて物言ひかくること多ければ、多きほど其の子の智慧は早きものなり。それを生れつきの賢きありと思ふは、親の慾目の愚さにて、賢し〳〵と云ひ囃されて育つは其子の爲に益ありや否や覺束無し、世の多くの幼兒を見、またそれの育ち行くを見て、おのれは我が孫の賢しと云はる丶を喜ぶこと能はず。

○ある僧の老いて徳高きが云ひける。寺まゐりの好きなる若き女は、寺まゐりに無精なる若き女より殊勝なりと思ふなかれ。藝人、藝妓浮氣者、泥水商買のものなどは、思ひのほかに樒線香などを手にする事おほきものなり。

甲一と鳥藏（西洋お伽話）

佐藤天風譯

或る山林官が、朝早く狩獵にでました、鳥や獸をうちながら、だん〳〵森の深みに來かゝりますと不思議や、何處ともなく、小兒の泣聲が致します、耳を澄ませば澄ますほど、能く聞へますから其聲をたよりに、彼方此方を尋ねると、或る大きな樹のあるところに參ました、すると其樹の下には、可憐そうな女が、前後も知らず睡て居まして上を仰視れば、無慘なるかな其女の子供でしよう年は二つ三つの嬰兒が、鷲に攫まれて、樹の高い々々處に泣いて居ります慈悲深い山林官は、之れを見ると夢中になつて、一發の下に鷲を射殺し、高い枝に垂下つてる嬰兒を取り返しました、其嬰兒は、誠に可愛らしく、玉の樣とでも云ひたい程のいゝ子ですから、山林官は愛のあまり、とう〳〵。此子を己れの家に連れて參りまして、鳥にとられたと云ふ所から、鳥藏といふ名を付けました。

ところが此の山林官には、甲一といふて、丁度同じ樣で、同じ年の子供がありますゝ、ですから二人の子を、同じ樣に育てますと、兩方同じ樣に成長して二人とも、非常に仲よく睦しくして居ります甲一は鳥藏が一寸でも見えないと、それはそれは、大騷ぎをして、夢中になつて之れを搜し出さなければやみません。

然し玆の家に、一人の惡い料理人の惡助といふのが居て、大變子供を喰べるのが好きなのです、或

る夕方惡助は、いつもよりも倍になるほど釜に水を容れ、頗る澤山の薪を積んで居りますから、甲一は其を不思議に思ふて、其譯を尋ねました、すると惡助は、甲一に云ふのに、甲一ちやん、若し誰にも云はなければ、敎へて上ると、云ひましたから、甲一は、屹度默てると答へました、そうしますると、惡助の云ふには、

實は、明日朝早く、汝の父さんが狩獲に行た跡で、鳥藏を煮て喰べるのです、

之れを聞いた甲一は、愕驚しましたが、其夜は鳥藏と一處に床に就きましたが、翌朝山林官は、狩獵に出かけてしまいました、其跡で惡助は、最早釜にどん／＼火を焚き付け出したから、甲一は、もう堪忍が出來兼ねて、鳥藏を呼んで云ふには、鳥藏、お前が私を見捨てなければ、私は屹度御前を捨てないよと、いひますと、鳥藏も、屹度、未來永刧捨てないと答へました、其處で甲一は、惡助の計畫を、悉く鳥藏に話して、遂に二人で逃げ出しました。

惡助は鳥藏の床に行ますと、最早甲一、鳥藏、二人ながら影も形も見えませんので、憤怒の相恰凄ましく、三人の小使をやりて、其行衞を捜がさせました、三人は大急ぎで甲一鳥藏を追懸けましたが之れを見たる甲一は、鳥藏に向つて、御前が私を見捨てなければ私は、屹度御前を捨ないよといひますと、鳥藏も、屹度未來永刧捨てないと答へました、そこで、甲一は、それなら御前は茨になりなさい、私は薔薇花になりませうと、云ふて、二人は忽ち形を變へました、三人の小使は、此處に來ても、たゞ茨と薔薇花のみなるを見て、手を空うして料理番のところへ來まして、其事を申しますと、惡助は、それなら茨を斬りすてゝ、中から

薔薇の花を取つてこいと叱り飛ばしました。

三人の小使は、またかけて來ました、そこで甲一は、また鳥藏に、互に見捨てない事を誓ふて、今度は、鳥藏が寺の本堂になり、甲一は本尊の、金の佛樣となりました、さて、三人は茲に來て、ただ寺の本堂と、本尊樣ばかりなるのを見て、又茫然として惡助の處へ參りました、すると惡助は大に怒りて、

なぜ本堂を打ち壞はして、中の本尊樣を持てこない、

と怒鳴り付けて、よし己れが行くといふて、韋駄天の如く此に驅けて參りました。

之れを見たる甲一は、油斷は出來ないと思ふて、又鳥藏に云ふには御前が私を見捨てなければ、私も乾度御前を捨てないといふと、鳥藏は未來永刧見捨てない事を誓ひました、其處で、鳥藏は、池となりて、甲一は鴨に形を變へて、惡助の來るのを待て居ました。

すると惡助は、相貌畏ろし氣に走せて、此處に參りましたが、たゞ見る、茫々として、海の如き大池に、一羽の大きな鴨が泳いで居るのみです、惡助は此處に立ちて、先づ、どうしたらよからうと思案してる中に、鴨はだん／＼惡助の方に近づいて來ると思ふ中に、其大きな力強き嘴で、惡助の裾を啄へて、たゞ一引きに蒼々として深き池の中へ引き込みました、そこで、とう／＼、惡助は自業自得の死をとげました。

そこで甲一と鳥藏は家に歸り、互に睦しく、山林官に、末永く孝行を盡しました、目出度し、目出度し。

（をはり）

口合六佳選



桐に鳳凰　松に鶴



君に本藏松見する

雜録



世を宇治山と
人は云ふなり



[illegible]淨るりおまた
人は寄るなり。

繪　繪



おきまとはせる
しらきくのはな



常磐のなげく
しらゆきのなか

父をたづねて
高野へのぼる



質屋はじめて
帳場になほる



雜錄

さいた櫻に　なせ駒つなぐ



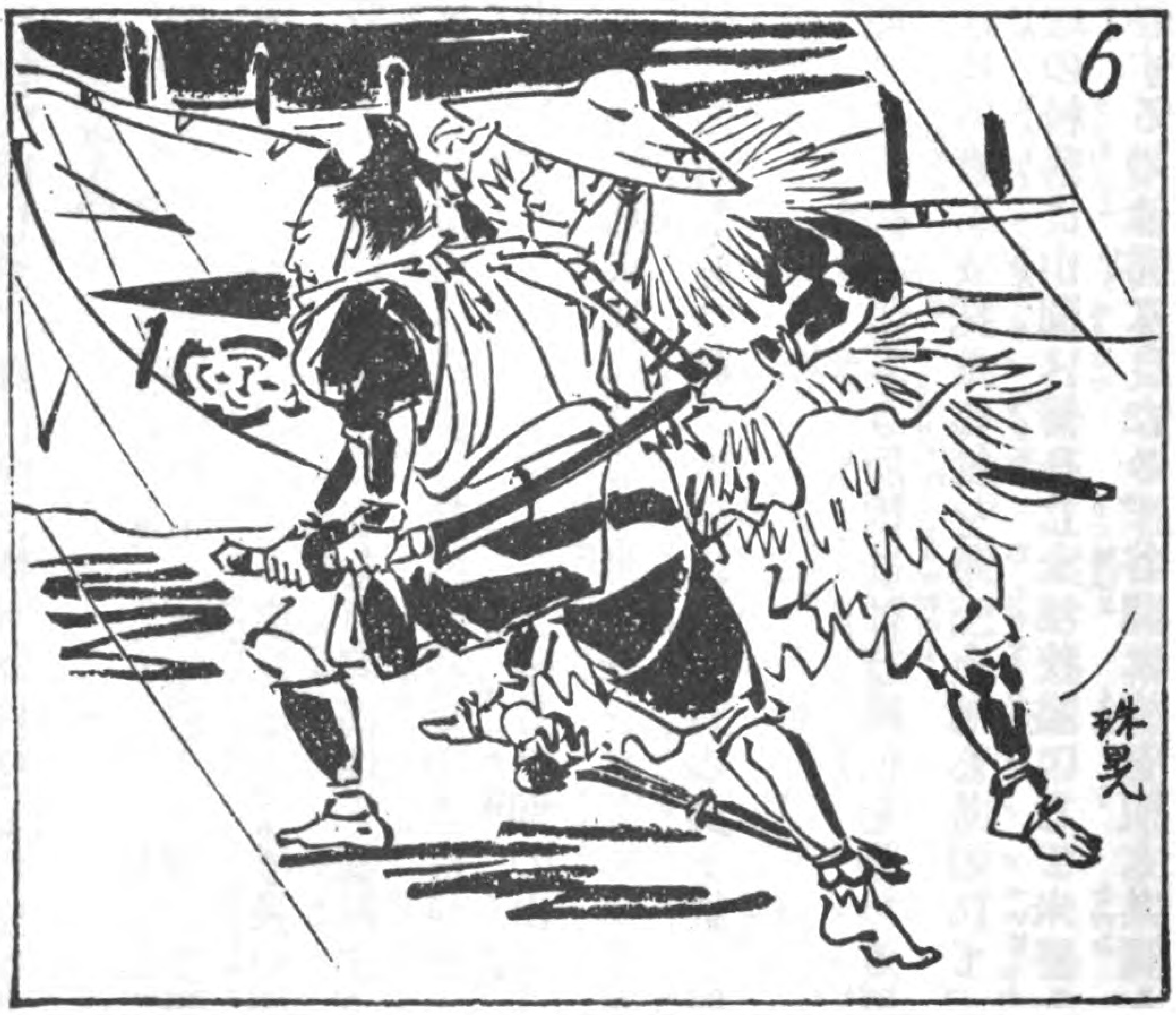
さびたさすがで　なべ釜みがく



虎は千里のやぶさへこすに



曾我は源氏のかりばへ夜うち



月ヶ瀬十二景

無腸居士

櫻花は吉野、紅葉は日光、梅花は月ヶ瀬、之を我國の三大美觀と謂ふも過當にあらざるべし。月ヶ瀬の梅は二月より咲き初めて、三月中旬を滿開とし、四月に渉り、花の壽命九十日と里俗は稱しぬ。此地は大和國に屬し躑躅川に沿へる村落にして梅樹は其谷間毎に植えらる、谷凡そ八、敵谷、鹿飛、搜雷、祝谷、菖蒲谷、杉谷、一目千本、大谷、是なり、麓より仰ぎ望めば白霧の茫々たる間に旅舍の隱現せる仙山樓閣の圖を見るに似たり、又山上より俯して眺むれば白雲腰を繞れる如き其絶間より紺碧の溪流を望む樣、宛も名畫の横卷を披げるに異ならず、若夫月の明き夜小舟を雇ふて、兩岸共に梅花に包まれたる溪間を泝洄りたらんには、清香骨に徹して、身は直に仙界に投せるの思ひあるべきなり。

躑躅川は巽より乾に流れ上、三重岩より下、雲景山迄里程一里三十間なり。又南北は嵩より長引迄里程十七丁廿間あり、此間を月瀬梅溪と總稱す。此地より笠置山へ三里半なれば健足の人は笠置より山越し來るも妙なるべし、元來月ヶ瀬の山水は頗る豐後の耶馬溪に似て一歩一景とも稱すべきもの故、歩行ならざれば十分に觀賞の興を盡し難きなり。

此地に斯く梅樹の多き所因は徃昔緋色を染める原料には梅實より採りし紅を最上とせしものにて、此邊の村落は山間に僻在し土地狹隘にして米麥を耕作するの餘裕なきため、谷間に梅を植ゑ其實を唯一の物産とせしなりと、然るに維新以後は宮中の禮服易りて緋の袴廢せられ、寺院衰微して本山

の高僧方も安直を旨となし化學染の赤法衣を身に纏ふ事になり隨て緋の染料たる梅實無用物となりしかば、哀れ數萬の梅樹も斧斤の禍に罹り摧けて薪ともならんとせしに、幸にも關西鐵道の敷設は此の深山幽谷に意外の幸福を來し、花時探勝の雅客年々に增加するを以て、往年實に依て生活せし山民は、爾今花に依て衣食の資を得るに至りしと云ふ。依て郡村長地方有志等協議して月瀨保勝會を設けて舊來の梅樹を保護し、且つ山間溪谷と謂はず、河岸圃頭を選ばず、苟も餘地あれは梅を栽えて益々景勝の發達を圖る由を聞けり。
月ヶ瀨の勝を記するもの齋藤拙堂先生の文を以て第一とすることは世人の知る所なるが、此他星巖山陽小竹春樵琴山鐵臣天江等皆紀遊の詩あり、されど山水の勝にけおされしか、さして出色の傑作として見るべきものもなし、例の山陽は耶馬溪山天下無と吹き立たる螺貝の口を此地にも指向けて「非覩和州香世界。此生何可說梅花。」と吟じ出せり。是日光を見ざる者は結搆を說くなかれと云へる俗諺より思付きて立案せしものなるべし、拙堂は「彭澤記文徒費力。何除此處有仙源。」と大にリキミたり、五柳先生頗る迷惑せられしならむ、鐵臣は云く「百里溪山誰種玉。十餘村落盡鋤雲。梢頭月出天皆白。林下水流波亦薰。」と此詩最も能く其地を形容せり。和歌には是ぞと思ふ者を耳にせず、歌人の杖を曳く者少きに因るか。
此地往時より尾山八谷、月瀨八景等の目あれど、當今寫眞として販賣し居るは、大谷、鶯谷、唐竹宮の芝、一目千本、奥の谷、五月山、雲景山、帆浦、月瀨橋、龍王灘、一目萬本、の十二勝なり。此地は伊賀伊勢の兩國に接近し、關西鐵道によるの便宜あり。其東よりする者は上野停車場に下る

べく、是より同地迄四里なり。其西よりする人は島ケ原停車場にて下車すべし、此處よりは二里半にして近し、何れよりするも道路は山道の割合に平坦故、人力車は一人曳にて差支なし、旅店は尾山、石打、月ケ瀬、桃香野等何れにもあり、其内月ケ瀬には可なりのもの兩三軒あり、保勝會も此處に置かれたり。近頃は夫人介愛抔を携へたる紳士的遊覽者少なからざれば飲食寢具等も山中としては完備せるものゝ如し、名物あれど稱するに足らず、殊に完全なる案内記地圖等のあらざるは遺憾と謂ふべし。

雲雀の話

橘村生

無絃の大琴、懸けて宇宙の中央にあり。萬物の情、萬物の心、悉くこの大琴の絃に觸れて、至妙高絶の音を爲す。武藏野平原八十里、野に麥莖青く畑に菜花黄なる處、朝暾森に上り、春光四に遍く、平和の影の滿ち渡る折しもあれ、叢間の●●營巢より出でゝ、藍青色の天に冲し、一小自在の聲を放ちて、此の太極の琴を奏するものは、鳴●●●禽類（鳴く鳥）に屬する、

糸遊のながき日ぐらしつながれて
中空にのみまふひばり。。。かな　千蔭

雲雀は天琴の彈奏者であるが、然し彼の歌は彼自身の聲でなくて、宇宙の眞中にかゝる大琴のしらべ、雲雀は鳥にして鳥ではない。長き●●●翼を張りて高く碧空の中に飛翔し、彼が官●●●能の美音をふるひ彼が緻密●●●●なる頭腦を以て、畠中の道を辿れる旅人が情を慰め、あるは又農夫が營々日中の勞働に、辛苦の膩を流す時、うるはしき自然の聲を聽けよとばかり、節高々とうたつてゐる。時に鍬と手を

を休めて、仰いて腕の疲勞を撫す、嗟呼大いある哉自然の聲。

聖壇にうたふ讃美歌の節、盛典に奏する凱歌の曲それらはいかに世界の大音樂家が巧妙のかぎりを極め、血潮を流して演奏するとも、固より人爲の繕ぐる處あるが故に、到底この少さき天然の聲に打勝ことはできないので。

人知れぬとりにしあれば
汝が影は似るものもなし、
夕ぐれをいろどるそらの
霓の環もふらし得べしや、
こゝろよくうたふ音樂ぞ
その身より雨としたゝる、

とぞ詩人シエリー讃嘆せり。

誰が言ひ習はしけん、「告天子」の名は古へより傳はりて、詩歌文章の綾にもうつされ、人の家にも養はれつ。大方の人に愛玩さるゝ此の小鳥は、鶯ほどの美色は無きも、軀躰自ら可憐、常に原野畑畝に棲み、春麥壠又は叢間の根方に小穴を穿ち草の根、木の葉を拾ひあつめて營巢し、四五顆の愛らしき卵をぞ産むなる。天禀の彈奏者が貧しく淋しげなる生涯を見給へや、一房の百合の花にだも如かざりし、ソロモンの榮華の極みにも似たらんか、素朴の風も偲ばれて、昔戀しき心地ぞする。

彼大音樂家が被むれる肩の衣服はいかにといへば、褐色の地に黑斑のある羽毛、さながら土砂枯草の色に似通ひたるは、無情なる人間の犧牲とならん保護色なり、次に脚嘴の、眼鋭く嘴尖りたるは昆蟲を捕へ食はん用意にして、趾の細長く、爪の尖れるは營業の用に使ゆるなり。四時一處に住居して決して他所に移轉せず、麥畠に發生せる害虫や

又は草果を啄み食ふ、農家の爲めの益鳥なり。麥は元來非情物なれど、自體の害蟲を捕食して呉れる恩惠がある故、其根を彼が營巣の用に供して悲しまない。嗚呼面白きかな自然の均衡調和。

なれども人の無情なる旦は空に彼等が辛苦を慰め夕べは畑に彼等が業を助く、この憫れなる天才に向つて、限りなき慘酷の迫害を加へ、己れ獨り高うして萬物の靈長なりと稱す。憎むべくしてあはれむべし、筆を投じて嘆又嘆。

茲に政府は法律もて之れを保護し、雲雀は四月十六日より八月十四日まで捕獲することを禁せられぬ皇恩禽獸に及ぶ聖代の餘惠。

白雲を搔へ蹴落すひばりかな　萬里

長閑なるものゝ上なき雲雀哉　素丸

霞たつ春野のひばり何しかも　眞淵
　おもひあがりて音をばなくらん

草の名の母子まじりにすみれ草　東潮
　野をなつかしみひばり鳴くらん

春の野はひばりの床と思ひしを　秋成
　空にやどりの夕ぐれのこえ

うらうらにてれる春日に雲雀あがり　家持
　こゝろかなしもひとりし思へば

（完）

新しき古蹟

文學士　濱田紅於

渡波の海濱

渡波は牡鹿郡石卷町の東方一里二十七町の處にあり、南方は直ちに石卷灣に面す人家宏壯ならざるも尙沿道の要驛たるべし、海水館は市街の南端に位し數十步にして、海水の淸冽を掬すべし

一帶の海濱白砂鮮やかにして、稚松欝葱たり、其風景三保松原海の中道に及ばずと雖も、亦以て曳杖の區となすに足る、近來海水浴場の設けられてより、三伏の天、佳人才子の會となると云ふ、又鹽田あり、汐やく煙の末長うたなびくも、いと詩趣あり、されど予はたゝる光景に飽きたれば、取りいでゝかきつけむも煩し、若しそれ夕陽の廣淵に沈まんとするや、茜根さす雲波に映じて、見るかぎり將に燃えんとす、やがて四顧蒼然として、上に星斗の陸離を瞻、下に細漣のさゝやきを聽くのみ。

浴後便服夕餐に就く、肋骨先生洒膽斗の如し、太白を呼んで獻酬すれば、滿面忽ち鬼灯の如し健兒兩三輩來りて茶話會を開かんと云ふ、乃ちその席に列し、醉餘の苦茗、味甘露もたゞならず、放談高論四筵を驚かす、肋骨先生亦氣焰虹の如し、已にして先生去て親戚の門を叩く、予も室に歸り、偃臥すれば、忽ち聞く滔々懸河の辯を、婢を招いて聞けば、教育演說會なりき、婢曰く先生も一場の法螺を吐き賜へと、對へて曰く大聲は俚耳に入らず、鳥なき里の蝙蝠も羨むべきにあらずと、急に枕席を命じて玉山を崩す。

吉野先帝御菩提碑

二十二日早起、妻戸おしやれば、有明の月影あはくして、夜氣森々肌粟を生ず、六時に至りて出發す、道は坦々として喬松の間を穿ち、木の下露に袖ぬれて、砂塵起らず、神氣轉た豁如たり、七時湊村につく、予豫ねて御所曲隈の名を聞くこと久し、傳聞これ護良親王伏匿の地なりと、故に途上これを訪はんと欲せしも、東道の主人なかりしかば、徒に經過し去りて見るに及ばざりしは、頗る遺憾となす、然れども岡崎兵右衛門氏の先導を

得て、日輪山多福院に詣り、所謂吉野先帝御菩提碑を拜しぬ。岡崎氏は耳順の老翁にして、護良親王の此地に潜匿し給ひしことを、熱心に主張する人なり、往年伏見宮貞愛親王殿下の、北奥に來任し給ふや、途偶々この地を過ぎて、この碑を拜し給ひしに、岡崎氏感慨極りて號泣せしと云ふ、其熱誠以て想像すべきなり、碑は花崗石にして長八尺幅三尺石臺二階あり、土を高うして之れを安置し小堂を營んで雨露を防ぐ、銘に曰く、

奉爲　吉野先帝御菩提也
　延元亖年己卯霜月廿四日敬白

綠竹猗々として榮へ、老杉蔚々として聳え、四境靜閑にして、頗る敬虔の念を起さしむるものありと雖、余や甚だ疑なき能はず、碑側又二石碑あり、大なるもの丶銘に曰く

宮城牡鹿郡湊村古蹟之碑

明治十三年夏、余奉レ使東下、路出二宮城縣牡鹿郡湊村一、拜二吉野先帝御菩提碑一、謁二一皇子祠一、先帝者　後醍醐天皇、而一皇子即　護良親王也、相傳碑　親王所レ建、而祠則土人祀二親王一、親王　天皇之第三子、英名最著二於時一、故謂二之一皇子一云頃者村人戸塚貞輔日野弘清岡崎陳秀等、相議將三刻レ石表二遺蹟一、請二余言一以證其說曰、建武二年秋、親王在二鎌倉一、亂作、足利直義遣二部下淵邊義博一戕レ之、義博不レ忍レ加レ害、乃奉以來奔、後十一年、正平元年、親王實薨二于此地一、余始得二此說一、竊有レ疑焉、夫元弘之亂、親王膺二鬪外之寄一、險阻艱難、百折不レ撓、遂成二中興偉業一、不幸爲二讒口所一レ陷、身在二二階堂土窖之中一、豈一日忘レ滅レ賊乎、幸而得レ脫焉、宜三起討レ賊、又何匿レ跡偷レ生、優遊以閱二十年之久一哉、然則舊史所レ載果可レ據乎、曰否、未レ可二悉信一也、北條時行之

襲鎌倉也、直義曰、將行不足慮、可慮者獨兵部卿而已、以遺義博、則　親王者直義所忌、其意任必除之也、然而義博還報棄首不齎、特持一襲衣以藉諸口、直義終無所問焉、天下有此理乎、而舊史不辨之、且曰屍爲侍女所火、噫何跡之秘也、意　親王死生之際、當時已有信疑難判者、況余在數百年之後、敢遽臆斷以決其有無乎、今村中御所入之地、又有斷碑數枚、文字往々可讀、而多用南朝年號、親王之事其或舊史有所逸、而口碑傳之者、亦未可知也、余深嘉村人之擧有志於懷仁慕義、姑錄所聞以應其需從爲之銘曰、

天災燕民、八州起塵、誰敵王愾、一死吞冤、
世慕其義、人悲其志、建祠祀之、千古墮涙
遺蹤有傳、牧山之前、乃疑乃信、予俟後人、

明治十五年六月

宮内大輔從四位勳二等杉孫七郎篆額、

宮内省六等出仕兼侍從從三位高辻修長撰并書

其小碑の銘は次の如し、

里傳曰、從　親王同奔者、日野日下平塚高橋遊山等八臣子、今村人多其孫、又前時村中商人有號淵邊者、又有屠戸淵邊、住多福院南山角、盖皆義博之後云、然今則在矣、又曰八臣之有傳一菊章白旗者、嘗爲他人所掠奪、今藏某所某家、又曰　親王匿跡在此地若干年、至正平元九月乃薨、　親王御祈願之熱田社今存。　親王供奉之臣、祭曰朝臣社今存

地名

御所入　御棲居　殿原小路　札立場　大門崎
中坐峰　御隱里　二條　三條　四條　五條　在
御所入山崖者四枚

又岡崎氏に導かれて某家に至り、菊章旗を拜す、

素練長六尺幅一尺許、一菊章を附す、やがて岡崎氏を訪ひて、碑文謄寫數葉を得、雜談數分にして辭す、岡崎氏は、樸茂誠實の好翁なり、然れども其主張は予不幸にして首肯しがたし、嗟乎史學の普及せざるや久し、地方人士或は事實を誇大せんと欲して、牽强附會を逞しうするもの多し、又謂ゆる其の佛に佞するの類なるか、金華山、吉野先帝御菩提碑の如き、その一例たらずんばあらず而して御菩提碑の如きは、更に搢紳の證明を得て信仰の度も益々强からんとす、褊固なる愛郷心が少年子弟の正常なる知識を荼毒すると鮮少にあらず、教育者又この點に注意あらんことを要す（未完）

一日の旅（後半日）

超舟漁史

かくて墓前を過ぎれば、左に彌漫たる海原遠く、眞帆片帆の、春雨にけぶりて、朧なるさま畫の如く、右は並木がくれに、沃野の間を走れる汽車の煙の、雨中に棚引きて、長蛇の如く見ゆるも可笑し。或るは徃きかふ人々の、雨に濡れじと裾ひきからげ、可笑しふ風呂敷など打ちかぶり、或るはまだ戀しらぬ乙女子の、羽織裏がへしに、赤き腰卷をくり上げつゝ、あたら衣服をぬらさじとや、小足に急げるさまの可笑しくも、亦愛らしさ。あはれ雨中の風情、また一入の興味かな、などゝ談り合ひつゝ行く程に、空はなほ闇けれど、雨は何時しかやみて、轉た遊子が吟筇の情を慰め氣なり。いざさらば一服せばやと、木影に立ち寄る甲斐もなく、梢を吹き渡る風の、雫をふらしていと寒し。

　雨やみてしづくや寒むき松のした

一文字の街道、なほ歩を南に進むれば、程なく、彼の彌次喜多が

ゝめしにたく麥藁細工かひたまへ
　　　これは子供をすかし屁のため

とうたひたる、大森町に至る。此の地、昔ならば、驛路の馬の鈴音に喧すしかりしを、今は却りて、電車が滊笛の聲に驚かさるゝ世の變遷、あはれ今昔の感なきあたはず。されど昔ながらに、麥藁細工の業を營める家多く、又世に賞翫せらるゝ淺草海苔を、賣る家も製する家も少なからず。

　のりかをる春や八町この繩手

今しも沖より歸り來し、海人小舟ならん、ねぢり鉢卷しける男なんどの、犇めき合へるも勇ましく、罵る聲のかしましさ。此の聲を後にして、街道を右に折れ、田中の路を行くこと六七町ばかりなりけん、大森停車場に出でぬ。此の上の丘は、即ち八景園なり。されど、此處は歸りの樂として、何にしろ腹へりたれば、飯し食ふ家もやと、行きつ戻りつ四邊を探ぐれど、一膳飯一錢と筆太に、障子に書ける家ならでは無きに、流石入りかねて、池上まで辛抱すべしと、空腹をかゝへて、進み行く彼方の森影より、今日初午とて、稻荷をまつれる幟も見え、里の童が太鼓うつ音も、春風に和して長閑にきこゆ。

　うち出だす太鼓の音もかすむまで
　　　今日のどかなる春あそびかな

つら〳〵史を案ずれば、元明天皇の御宇和銅四年、しかも初午に當れる、二月十一日の夕がた、山城なる三の峰に宇賀之魂の現じ玉ひしよし、古史に見えけり。是れ伏見稻荷の創めにして、五穀の神にましませば、庶民みな福の神と仰ぎ、此の日を以て、祭り日となし來たりぬ。其の後何れの御代の頃よりか、二の午にも、三の午にも祭るやうになりけり。世俗つたへて、此れ等午の日に詣

でゝ、願をかけなば、必ず其の効驗ありと云ふ。昔も今も迷信者のあはれさよ。

　稻荷山三の玉がきうちたゝき
　　我がねぎごとを神もこたへよ

とは惠慶法師の詠にして、後拾遺にのする處、また當時は、參者の普く杉を折りかざして、歸りたるものにや、夫木集に知家の歌として、

　いなり山杉の青葉をかざしつゝ
　　かへるはしるき今日のもろ人

とあり。今は既に、昔がたりとありたれど、未だ警視廳の禁制なき、明治の初年以前は、村童等が今日を無上の樂みとして、三々五々打ち群れ立ち、各自に繪馬を携へ、節面白く鄙歌をうたひつゝ、戸毎に錢を乞ひあるきて、菓子などかふ料となせり。若し與へざれば、貧乏や〳〵と罵り、與ふれば、其の額に應じ、五文なれば五兩の身上、十文なれば十兩の身上などゝ賞めそやせしとかや。今は只だ狐の面を被り、太鼓の音につれて驅けまはり、笑ひさゞめくを見るのみ。青眼子吟じて曰く

　鳴皷鼕々到レ處喧。狐王祠畔幟旗繁。
　東風二月人如レ織。傘影衣香八景園。

予また句あり、

　初午の子供や化けよふる狐

などゝ、我れ等も打ち興じつゝ、とある路傍の茶店に立ち寄れば、女中が進むる田舍饅頭も、時にとりては、山海の珍味よりも美き心地に、舌皷をうたせ、澁茶に渇を醫して、やがて八景園を南に去る、凡そ廿四五町なる、池上山の裏手に出でぬ。

〇　〇　〇　〇　〇　〇

心地よき松風を身に浴びつゝ、老樹森々として生ひ茂れる、木の下闇を辿り、丘一つ攀づれば、即ち本門寺なり。過ぎつる年、祝融の災にあひ、

爲に痛く舊觀を減じたりと雖も、今なは、輪換宏壯なる祖師堂をはじめ、藥師堂あり、釋迦堂あり、何れおとらぬ莊嚴の大伽藍にして、法華宗中の巨刹たり。顧れば、弘安四年の昔、鄕士池上宗仲が、初めて此山を開き、堂宇を創建して、日蓮上人を開基に請したる、洵に都下得やすからざる靈場なり。境內廣く、いと淸らかに、本堂より漏るる讀經の聲床しく、塵俗を脫する心地して、勿躰なさに、口を嗽ぎ懇に參詣しぬ。見渡せば庭上の梅樹、正に綻び、淸香馥郁として、手向顏なる風情あり。

　春風や祖師堂かをる梅の花

靑眼子も、また感慨にたへざりけん。一詩を賦して曰く、

　眞言亡國禪天魔。　高祖威風見二法華一。
　後五百年何寂寞。　寺門唯有二數枝花一。

夫れより、猶奥深く、輪藏の彼方に一つの草堂あり。是れ上人が遷化の當時、弟子等を誡めて、我が魂魄此處に存すると思へよ、との遺戒と共に、殘し置かれたる肉付の齒を藏めし骨堂にして、四邊寂として老樹天に交はり、春うた〻陰森なる處いとすごし。拜するもの誰れか、上人の昔を偲び、其の英邁高風を追慕感激せざらんや。

　骨白く骨堂あれて春さむし

なは、山の中をめぐり、苔蒸したる塚など打ち叩きては、人の哀れを語りあひつ〻、更に政界の傑物たりし、故星亨君の墓前に至れば、懷舊の淚そぞろに禁ずる能はず、燕雀何ぞ大鵬の志をうかがひ知らんや。徒に惡人と誤られて、無慘の橫死を遂げたる、恨み是れより甚だしきは無し、嗚呼英雄の末路また悲しむべきかな。大方は、外面如菩薩、內心如夜叉ならざるなき今の世に、獨り

赤裸々に武斷的なりし、君の如きは、僞善者に比して、實に群鷄の一鶴ぞかし。

かくて墓畔を辭し、横さに庫裡堂の前に至れば、思ひきや、浦若き婦人の、俗僧と睦びあひける樣、見るだに苦々しく、滿目の淸姿ために俗了せんとす。あはれ世は早や澆季なるかな、嗚呼巳みなんかな人の世や、青眼子と相顧て、茫然たると久しかりき。

折りから太鼓の音鼕々として、山岳もなほ動かんばかりの響に驚かされて、金剛門に來り、側なる念佛堂を覗へば、五六人の荒くれ男の、撥を高く振りあげつゝ、一心不亂に打ち續けるさま、殊勝にも亦すさまじげなり。

○　○　○

門を出づれば、檐を連ねし茶店の、何れも眺望に乏しからず。天若し朗かならんには、富士の秀嶺をはじめ、箱根、足柄、天城なんど、呼べば應へん趣きあるべけれども、をしや曇天なれば、只崖上より大森、蒲田、川崎などの驛々を樹間に隱見しつゝ、此處を東に沿ひて阪を下る、其の中腹は、即ち曙の梅園にして、其の名未だ轟かずと雖も、今を去る十餘年前、諸所より古木を集め植ゑたるものにして、多くは枝垂梅なり、就中蜀山梅と稱するは、三代將軍家光公の愛翫せられし古木なりとて、最も名高し。加ふるに、南天の紅よりも赤く今を盛りに處得顏なる樣、可笑くもいと麗はし。あはれ、梅花繚亂として暗香浮動する際、こゝに至らば、當に桃源朱陳の間に在る心地すべし。されど蕾相含みて、未だ一朶の白葩を微綻せず、芬を歛め香を飮み、春信を洩さんとして洩さざる風情、かへりて雅致愛すべきなり。青眼子、詩あり曰く、

黄鳥不レ睹春未レ回。　寂涼千朶萬枝梅。
還中猶有ニ風情在一。　休レ怪高人載レ酒來。

たゞ惜むらくは、此の園、公開にあらざれば、自由に縦覧するを得ず、厚化粧の楼婢が客呼ぶ聲のいやしく、却つて詩趣をそこなふ事尠なからず。

出女の呼ぶこゑ　いやし梅の花



園を出で丶、ぶら〳〵と前の道を返くれば、八景園に至りぬ。此の處、屏風の如き丘の、上方は矮松多く、麓には梅樹多ければ、恰も舞姫が晴れ衣の、裾模様の如く感せられて可笑し。さて、右に左にうねりだる一條の路を上れば、いと廣き芝生の彼方に茶屋あり、見渡せば品川灣は一目の下におさむべく、眺望最も佳絶なれど、今日は遊べる人々甚だ多く、爲めに雅致乏しければ直ちに坂路を下る、此のあたり梅花正に三分の春を召め、幽香芬々として衣袖に逼るもうれし。青眼子即ち一枝を手折り、予に贈りて一絶を賦す。曰く、

欲レ折ニ一枝一遥贈レ君。
君請看取我心温。
蕭々風雪山村夕。
唯有ニ此花異ニ凡群一。

予は是れに答ふるに、國風一詩を以て青眼子が高誼に酬ゆ。即ち、

色も香も知る人ぞしる梅の花
誰れにか見せん君ならなくに

ふと顧れば、やうやく七歳ぐらゐの乙女子が、梅の木影に佇みて、母人と何事か談りあふ樣のやさしく、愛らしさ、あはれ、佐保姫君の出でませしにやと、見ばれける間に、早や青眼子は停車場へ先きがけしてけり。こは仕損じたり乘り遲れてはと、急ぎ滊車に乘り込みぬ。漫々たる春浦の景色、見れば見るほど面白く、鐘聲暮靄にかすめる頃、新橋にて汽車を下り、伴はるゝ儘に再び青眼子の寓に至り、幾倍かの芳醇を傾け、陶然として醉ひ、且つ數皿のライスカレーを退治して、鼓腹便々たるも可笑しく、靄々たる和氣室内に滿ちぬ青眼子微笑して曰く、

御殿山頭月一痕。　斯波浦上正黃昏。
歸來酌對牛樽酒。　自覺春風滿二我門一。

予も亦一絶を得んと欲し、平仄の模型に廿八字を嵌め込みたれど遂に詩と云ふものにならず、却りて狂歌一詠を得たり。

初年の狐をだしに腹づゝみ
狸と化ぬきみがなさけに

雅談俗話こまぐ\出でゝ、よしや夜をあかすも盡くべきにあらねば、九時を告ぐる時計の音を合圖に、辭して出づれば、醉顏に吹きあたる夜風も心地よく、やがて神田の寓居に歸りて、一睡の夢を結びぬ。

（完結）

○露の干ぬ間　（つゞき）

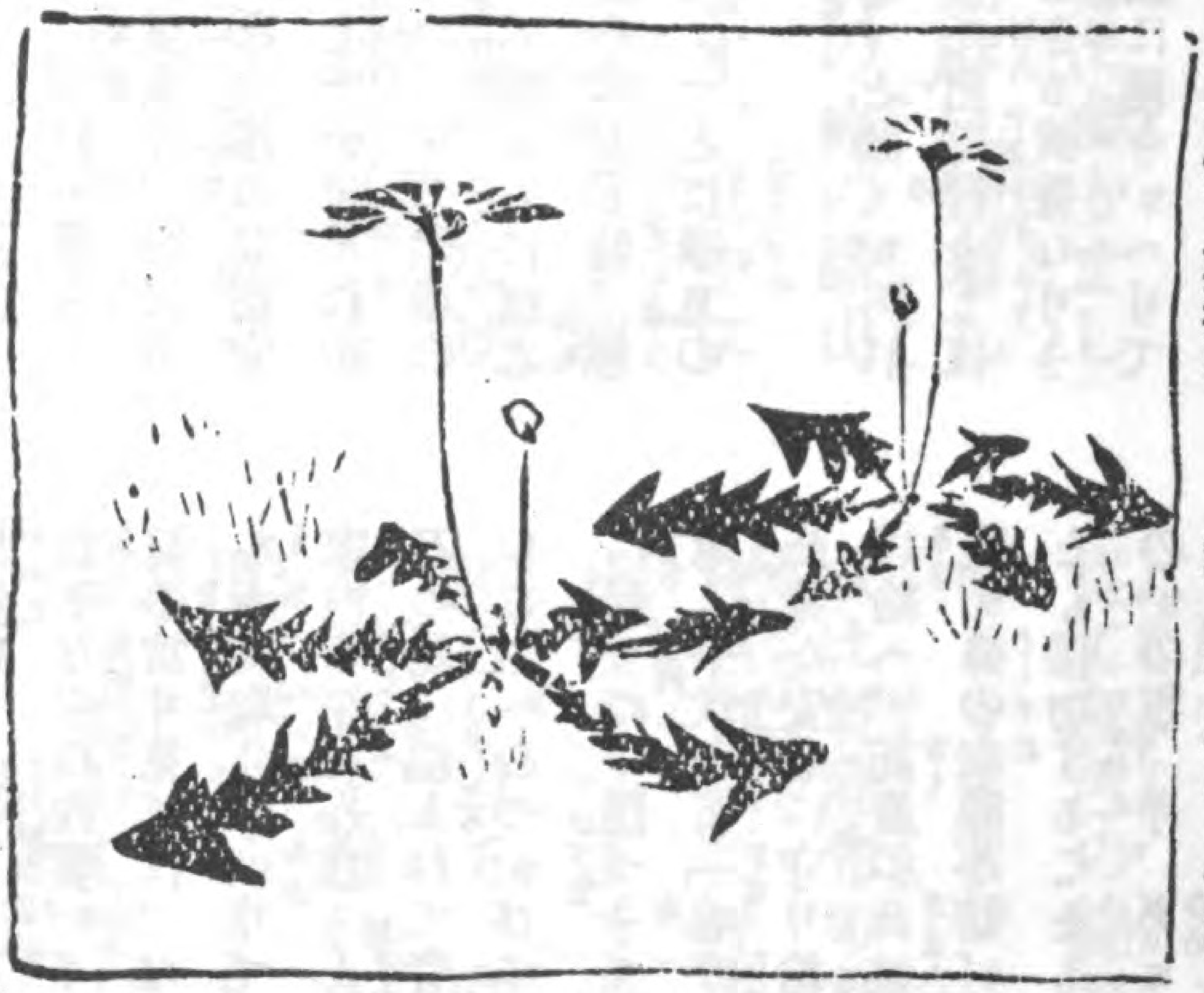
後藤紫浪　抄譯

南海の孤島に吹き卷く汐風に、はかなき露の玉の緒つなぎ留むるも、若しやの希望あればなり、いとしき妻子と連れ立ちて、讀み慣れたる故國の野邊に遊ばむは、何の日か、惱む思ひの功なさに、顏は白うなり果てぬ、恩なき年月は、いたづらに幾度逝き戻りして。

幸運丸の破船にも似て、狂ふ嵐に航路を失ひ、此島に流されたる船あり、船人等何處と知る由はなけれど、飲用水の盡きたれば、小川もがなと見渡すに、遙かなる山の麓に、眞清水の流一條、朝霧の晴間より見ゆ、いたく悅び、磯近く舟よせて、人みな水源を求めむとおのがじゝ進み行きぬ。人なき里に人の聲しかも多數の人の罵り騷ぐ其物音にや驚きけむ、麓の小屋より步み出づる者あり、長き髮は麻の如く肩のあたりに亂れかゝり、身に纏ひしは海草か、そも又枯葉か、我が云ふ言の通はぬに、いらだちて、手眞似をすれど傳へ得ず、されど道しるべして淸水流るゝ小川に出でたり、人々の打語らふを聞きたれば、長くも結ばれ居たる舌の、やう／＼に解け初めぬ。

水も汲みたれば船人等、此怪しの者伴ひて、船に入りぬ。途絕ゝながらに語り出づる悲慘の物語に始めの程は眞とも思はざりしが、遂にいたく心動きて、淚を落すものもありかくて猪之助は、心優しき待遇をうけ、故國に連れ歸へらるゝ身とはなりたり。

猪之助が港の人々ならねば、たとへ尋ぬるとて妻子の消息をきがむよしもなく、まして船体も老朽はてゝ淚には堪へぬばかり、船なれば、その進行いと遲く、猪之助がはやる心は、既に飛び去りて彼方にあり。



日數を重ね／＼て故國にぞ着きたり、待ち盡したる故鄕との、露草渡る朝風にわが吐く呼吸は、そのむかし朧月夜の花かげに、戀しき情人の手を取りて思はず漏らせしそれにも似たる哉、家路を辿り行きぬ……家とは誰が――猪之助が家は今ありや。

秋の末なれば大陽は照らせども、風のみいたく身にしみ渡る、枯葉散る梢に鳴く駒鳥の聲音さへうらがなし。

日は暮れぬ。霧深く立こめて路わかず朧氣なる彼方の火光をとめ來れば町に出でたり、嬉しさに躍りても行くべきに、さはなくて頸垂れて、我家の門に到りぬ。樂しく共に起伏し、慕ひ合ひたるお淺、さては七年の昔、生れたる幼子など、悅びて、迎へ出づるかと思へば、あな、その人は更なり、火影だになく賣家と書きたる札のみ霧ながら見ゆ、噫、巳んぬる哉」かく獨言つゝ過ぎて行く、あはれ、猪之助、何處にか行かむとはする。

行きしは何處、そのむかし友どち打つれて遊び暮らせし酒店なり其頃にさへいたく朽ちはてたれば、今はあらじと思ひたるに、な

き歎に入りたるは、家にはあらで亭主なりけり、寡婦となりたるお丸となむ呼ぶ老媼の、利得は日々に薄れ行けどはつかに業を營み居たり、水夫揖取集ひ來りて飲みつ食ひつのゝしり、合ひにし昔の面影は更になく、今はたゞ行き暮れたる人の、さみしく明かす一夜の宿とはなり果てたり。

元より心立よき老媼なれば、猪之助が斯く物凄げにながめ暮らすを心なく思ひ、折々は來て徒然を慰めけり、腰は屈曲り、頭は白うやつれたる猪之助を其人と知る由もなければ、事の序に其留守の間の事共もれなく打語る、悲嘆極まる時は涙なしとか、それかあらぬか猪之助が顔を横ぎる悲憂の雲もなく、物語りする老媼のほどだにも心に止めざる如く見ゆ、されど「げに不憫なるは猪之助なり、遠き渡津海の藻屑と消ぬ果てゝ」と、老婆の云ひし時、思はず身戰ひして獨言ちぬ、海の藻屑と「消ぬ果てゝ」とは嘆息の奥に。

「せめて今一度、お淺が笑顔見まほし、樂しく暮すと聞くからに此思念いと切に、遂には堪へ難くて、山邊を指して出で行きしはさなきだに曇り勝ちなる霜月の日影の暗うなりまさる黄昏なりき木の根に腰かけて、遠く見やれば、千々の詞臆胸に湧きかへりて苦しさやる方なし、忽ち見る一條の燈光、樂しき房吉が窓を洩れ出でし、とめ行く猪之助、あはれ燈臺の光に誘はれ、我と我身を打つけて死ぬとは知らず、飛て行く、海鳥にもたとへつべし、其身の在りと覺らるゝを恐れて、木蔭ながらに、室のさま窺へば塗りも輝く食卓に、銀の食器きら〳〵と暖爐の火光に映じて、其傍に居るは、その昔、戀ひ遂げざりし房吉なり、膝に乘れるは其子にて、肉つき豊に、薔薇色なせる手を述べて、姉が高く上げ低く下げて誘ふ玩弄物取らむとしては、取り兼ぬる可憐の態見てはみな笑ひさゞめく、一度死にたる人の蘇生りて、我妻ならぬ我妻、我子ならぬ我妻が子、雄々しき子、美はしの娘、溫情、平和、を目の當り見ては、なでふ堪へ得べしや、よろめき倒れんとしたるを木に取りすがりて、はづかに免れ、一聲高く叫ばむとしたれど家内の平和を破らんとの心憂くてやう〳〵抑へ、さては數たる小石の足に蹈まれて音立てむを恐れて離つたひに門に出で、戶を閉ぢるさへ心づかひするなど、其心根思やるだに悲し。かくて廣野に到りぬ、跪づきて祈を捧げむとしたれど、膝に力なく、されば地に平伏して「嗚呼、最早堪へがたし、かの離れ小島に居し時、此身を安泰に守り給へる大御神、あはれ、今しばしの間此身を助け給へ、此身の此地に居ることを告げざるやう力を與へ給へ、お淺が身の幸福を妨げむの心なければなり、——子供等に物云ふことも接吻することも今は叶はぬ身となりはてにしか、母そのまゝのかの娘、子、あゝ我子……」詞も、思想も、力も今は盡きぬ、しばらくは夢の如く打伏せしが、ツト身を起し、獨り寂しき狹路を辿り行きたり、「お淺には告げぬ、知らさぬと」涙ながらに繰りかへしつゝ。

《つゞく》

清國見聞談（つゞき）

阿多廣介

此日の午後は齋藤君等と、西湖の見物に參りました、西湖は錢塘門を出づれば、直に湖畔に到着しますが、四方は呉山城隍山天目山其の他の諸山に包まれて、周圍は凡そ四里位あります、其中には小さな島嶼や堤防等が散列して、林間紅葉を認め恰かも我邦の蘆の湖か中禪寺湖見たやうな景色で唐宋時代の高塔は今に存し名處古跡は數ふるに遑まなく短時日に探求し得る限りで有ませぬ、斯くて先づ小舟に乘じて萬字樓の有る島に參りました、玆は有名なる鳳皇林の廟のあるところで、なか〳〵風雅質樸ある建築でありまして、萬字樓は字形をなし西施湖に臨む其湖名は美人西施の名をあやかりし程で風景絶雅ですが、惜しいことには掃除が行き屆かず、乞食坊主が麁茶を勸むるのみで古の美を損じてをります。坊主は我邦と同じ風采でありますが然し學問も見識も財産もなく從て灰色の綿服をまとひ御寺の三助みた樣な境遇であります。

次に乾隆帝の行宮のある島に行きました、此處は流石帝廟だけで裝飾等華麗で、我國の日光廟と比較すべきものゝやうに思はれました、殊に奇岩怪石を以て、庭石や洞門を建立し壯嚴なる書籍庫は鍵鑰を嚴にし、さすがに當時の盛大と乾隆帝の用意周到なりし事が思はれます、其れから岳飛の廟を參拜しました、其の墓所は後に寫眞に示しますが、饅頭形の墓で其左右には所謂岳飛の四天王の像が佇立して、昔の面影が追想されます、庭内には數多の石碑が建立されてありまして岳飛や其他名家の詩文を彫刻し、拔目なき僧侶は之を石刷

にして販賣し、參詣人常に絶ぬさうであります、李鴻章の廟も目下湖畔に建築中でありますが既に四萬餘圓ヶ費したとの事で立派なものであります支那にては大官名士にして功績あるものは勅諭を以て廟宇の建立を許さるゝ譯けでありますが、李氏は長髪賊の鎭定等杭州には少からぬ功績ありとて其勅許を得たのであります、かくて其日は夕方まで西湖ぃ景色を眺めましたが、殊に高塔の影が倒まに水面に映し其塔先が湖の中央に相合せしは奇景で名物の一つであります日歿後は城門を閉しますから再遊を期して歸りました。

二日の午前は武備學堂の總辦伍元芝君、大學堂の總辨勞君及び大河平領事を訪問し、午後は齋藤氏と乘馬して、靈陰、紫竹林を見物しました、靈陰は西湖の周圍を二里位回つて山中にある名所でありますが、其の山は皆石灰岩より成つて其の岩石に幾萬となく佛像が彫刻してありまして、奇巖怪石自然にあり胎内くゞりなど高野山のやうであります、此處の石は我邦にも有名なもので盆石などで我邦にも渡來してあります。

紫竹林は宋時代に建築された伽藍で有ります、其の本堂は燒失して居りますけれども、其結構壯麗なりし事は石垣塔宇の遺趾によりて想像されますが殊に五百羅漢は、我邦等に見る可らざる立派なもので有ります、久振り乘馬しまして而かも慣れぬ支那馬でありますから、臀も傷めましたが、幸に落馬もせずに、再び西湖の晩景を眺めて歸宿しましたれば伍元芝君、張其昌君其の他日文學堂の伊藤君等五六人來訪されました、杭州第一の支那料理にて晩餐を共にして、大に談論しました、伍君はかの有名なる梁啓超君等と同時に進士に及第した人で年齡四十位 容貌魁偉、眼光耿々、豪傑

の風采を備へて居りまして、前巡撫の際は、杭州知府として、巡撫を補佐し北清事件の際、日清同盟を主張建白したる嚆矢で有つたそうですが、其後巡撫が變つて、閑散の身で有りましたれども、此の頃擧られて、武備學堂の總辦となり、大に齋藤君の意見を容れて、學堂の改良進歩を計つて居られます、同氏は文人の出身でありますけれども今日の清國の狀態は文武兩道を以てせざるべからずとて大に武備學堂の事に盡力されてありますが夜半に至るまで種々文武兩道に付いての意見を論じましたが、夫を一々御紹介する必要もないと信じますから、單だ女子教育に付いて論じた事を御話しませう、私が伍君に申しますには、男子の教育は固より焦眉の急務で有るが、女子の教育に付いては、如何の御意見であるかと申しましたら氏はカラ〳〵笑つて云ふには、昨年も貴國の女丈夫の奥村と云ふ人が來杭されて、女子教育の必要を説かれましたけれども、私は清國は男子の教育すら、屆かないから、未だ女子どころではないと答へましたと云ひましたで、私は更に議論を別にして、申しますには、成る程貴國の今日の狀態は男子に新學を教授するのは急務である、然しながら大丈夫が國家の經倫をなすに當りては、當時の救濟は百年の計を定めてやらなければならぬ、男子は新學を授け、武術を練習し、富國強兵の道を計るは、當時の急務である、女子を教育して、家庭を改良し、子女の教育を改良して、心身の改良を計るは、即ち國家百年の計であると信ずる、貴下は其の百年の計をなすの大人物なるとを、余は信ずるのである、其だから女子教育の御意見を承り度いと云ふた、次第であると申しましたら、氏更に曰く、大に然り、然りといへど

も我國に於ては、舊來の惡習として、女子の足を紮着する風習が有つて、爲めに女子は活潑なる動作をなすとが出來ぬ、從て常に家居して、憂鬱の狀態を免かれず、且つ學問をなすに付いても、深く研究するが如き體力に於て堪へざるが爲め、今日は昔の後漢の曹子の如き、人物の出來ない次第であるが、貴諭の如く如何にか女子教育刷新の道を講せねばならぬと答へました、次に私が尋ぬるには、目下貴國の女子はいかなる事をして心身を慰めらるゝかと、謂ひましたれば女子は小説本を讀むか或は演劇を見る位で從つて誠につまらぬ有樣で殘念な次第である、然しながら上諭によつて、脚を紮着するとを止める事になりましたから、之から段々女子教育も進められる事に成らふとの返事でありました、然し猶同氏が云ふには、習慣は中々一朝一夕には改められぬものでありますが、殊に此の習慣の如きは矯正するに、種々の難問題が有ります、なぜなれば此の習慣の爲めに清國にては足の大きな婦人は、嫁に行かれない、貰てくれないと云ふので、親心としては可愛想なものと思ふて、生るとすぐから足を少さくする工夫をするのでありますから、其の人情を改革するのは甚だ困難であります、而しながら貴諭の如く女子を改良するのは、實に百年の計でありますに依て、之より段々と女子教育に付いても盡力したくありますから、何卒御助力を願ひたい、且つ又貴國の婦人の御助力も仰ぎたいものだ、との噺しでありましたから種々女子教育に關する我邦の失敗談やら現時の狀況等を話し、且つ今後清國女子教育法等に付き意見を述べました。(つゞく)

塔の澤

小說



谷活東

（上）

『今度の電車は何時ですか。』

『國府津へ二時四十五分ですから、三時四十五分彼是四時になりませうねえ。』

『今は……。』

『今は。』と枕元の盆に乘せてある女持の時計を取つて、『三時が十五分過ぎましたよ。』山は未だ枯木のまゝの、たゞ雪が無いといふばかり、寒い寒い氣色をガラス越しに、此處は十疊の二階、床の間に後を向けて、太織の夜具を重げに寐て居るのは、長い病氣と見えて顏の色はもとより、髮の艶も美く無い。年は未だ二十を越えぬかと見える、細面の、目は割合に大きいが、それが不釣合と言ふのではない、二側の其わたりに得も言へぬ愛敬が秘んで居る。枕元に坐つて居るのは二十七か八位の年增で、銀杏返しに結つた、色の白い、分別ありさうな顏は、此家の女中頭の、お北といふ小田原產、襟の掛つた秩父縞の綿入れを着て、寒さうに、時計を又素の處に置いた。

『もう一時間とは無いんですから、……、今度の電車には屹度お出でせうよ。』

『然うねへ、屹度お出だらうと思ふけれど、もしや御用でも出來てねへ……。』

『ですが、今日は土曜日でせう、それですもの、屹度お出になりますよ。』

『此間のお手紙にも然う書いてありましたがね、それでも、今度はもう一人來る人があるもんですからね。』

『オヤ、何樣がお出になるのですか。』

『えゝ、私の姉が來るのです。』

『オヤ、然うでございますか、それはお樂みですねへ。』

『その來る事に付いてねえ、いろ〳〵、取込みがあるもんですからね。』

「そりやアもう、殿方と異つて又お仕度も長うございますから。」

「いゝえ、然うじやアないんです、………、お前さんは、あの、御亭主をお亡しなすつたとかお言ひでしたねえ。」

「えゝ、ホ………、然うでございます、失くなした方が、よつぽど樂なんですよ。」

「でもそんな事は。」

「いゝえ、貴女、亭主あんてえものは、女房を樂にして置くから亭主あんでせう、女房に心配ばかりさせる樣な亭主なら、無い方がよつぽど増しあんです。」

「それだつて………。」

「いゝえ、然うですとも、お宅の旦那樣のやうな方なら、幾人でもホ………、まさか幾人も亭主を持つ譯にやアいけませんけれども、ほんとにあー言ふ御心切な方は、そりやア別でございますよ。」

「私の姉もねへ、今度夫を失くしたのです。」

「オヤ、それはまア、いつぞや、夏でございましたねへ、御一處にお出になつた、あの方でございすか。」

「えゝ。」

「まア、へえ、然うでございますか、何日?。」

「去年の十一月です。」

「へえ！。」

「それでねへ姉には子供もなし、親も無いので今度私の看護を爲て貰はうと思つて居るんです。」

「然うでございますか、貴女もお獨りで、恁うやつてお出になつちやア、お淋しうございましようしねえ……。」

「えゝ、ですが、お前さん、やお由さんなぞが心切に爲し下さるから。」

「何う致しまして、ちつとも行屆きませんで、屹度、旦那樣がお出になつたら、叱られるだらうと思つて居るんですよ、あんなに言ひ付けて置いたのに、何故面倒を見てくれなかつたかつてねえ。」

「だつて一人を置いて行く方が無理ですわ。」

と言ふ時、入口の唐紙が開いて、

「奥樣、旦那樣がいらつしやいましたよ。」

と、飛込んで來たもの、前に話の出た、お由と言ふ女で、極つてひようきん者、

(下)

年は廿七八、色の白いのに金椽の眼鏡を掛けて、八字髭の立派な男。紺甲斐絹裏の外套をサラリと脫ぐと、下は大島の綿入羽織、衣服も同じこまかい十の字飛白で、白縮緬の帶。

「姉さんは。」

と床の中から、

『來ないよ、おゝ寒い、まア一風呂飛込んで來やうか。』

『こんな寒い處に奧樣を一人お殘しなすつてさ、ほんとに、東京は暖かうございませう。』

とお由が外套を衣桁に掛けながら言ふ。

『東京は此處より寒いさ、此間も凍え死んだ人が二人ばかり在る。』

『嘘を有仰い、態う見えても東京ぐらゐ知つて居ますよ。』

『然うかね、妙な事もあるんだ』

とお北が出した褞袍と着更へて。

『御案内しませう、貴郎は函根は初めてゞいらつしやいますから』

『ハ、、、つまらない敵討だ。』

『函根權現、ホ、、、、何とか言ひさうですね。』

とお由が先へ立つて行く、殘つたお北は、脱捨てゝ行つた大島を疊みながら。

『お出にならないのですか。』

『然うねえ、何かさはりが出來たのでせうねえ、困ちまうねえ。』

『ほんとに、折角お樂しみに遊ばしたのに、オヤ何か入つて居りますよ、出して置きます、お手紙のやうですが。』

『手紙、さう、此處へ下さいな。』

『はい。』

と、衣服の袂から出たのを渡す。

『オヤ、姉樣からだよ、開けても可いかしら。』

『封が切つてあるじやアございませんか。』

『えゝ、だけれど。』

『可いじやアございませんか、屹度何かお出になられない事の書いてあるんでせうよ。』

『でも叱られると不可ないから。』

『何あなた、きつと、貴女にお見せにならうつて持つていらしつたのでせう。』

『だがね、今に上つていらつしやるだらうし、それ迄待ちやア可いんだから。』

『然うですか。』

とお北は衣物を疊み了つて、亂箱の中に入れて、床の間に直す。

『何故だらうねえ。』

と手紙の裏を見たり、表を見たり、頻に心配の樣子。

『ですから、御覽遊ばせよ。』

とお北は素の坐へ來て坐る。

「見ても可いかねへ。」

「可うござますとも。」

「さう。」

と引抜いて、女文字の細い文を讀み初めた。お北は心配氣に脇から覗いて居た。やがて讀み了つて素の通りに卷いて封へ入れて、

「然うかねへ。」

と溜息をつく。

「何うなすつたのでございます。」

「お前さんは御亭主を失くして可いと言つて居るけれど、姉さんはよつぽど、悲いんだと見えるねへ。」

「そりや、貴女何樣だつて、御夫をお失しになつちやア、……可いと言ふのは世の中に私ばかりでございませうよ。」

「じやア、女の方が死んだら、夫は何う思ふだらう。」

「それは貴女、同じことでございまさアね。」

「然うかねへ。」

文を持つた手を力なく下した。すると顏の色が見る見る惡るくなつて、息づかひも荒く、俄に容體が

變つて來た。お北は驚いて、

『奥さま、何うか遊ばして』

と聞いたが、返事が無い。處へ男も湯から上つて入つて來て、此様子を見て驚きながら、

『何うか爲たかね。』

『今お手紙を御覽になると、急に恁う……。』

『手紙、あゝ。』手に持つたのを見留て、『あの手紙を見たのか。』

『えゝ、惡いお手紙でもございましたか。』

『ふむう、何ね、これの姉が看病に來る筈だつたが、姉の夫が去年、これと同じ病氣で死んだんで、それで心持が惡いから來られぬと書いてあつたんだ……、神經が強いからな。』

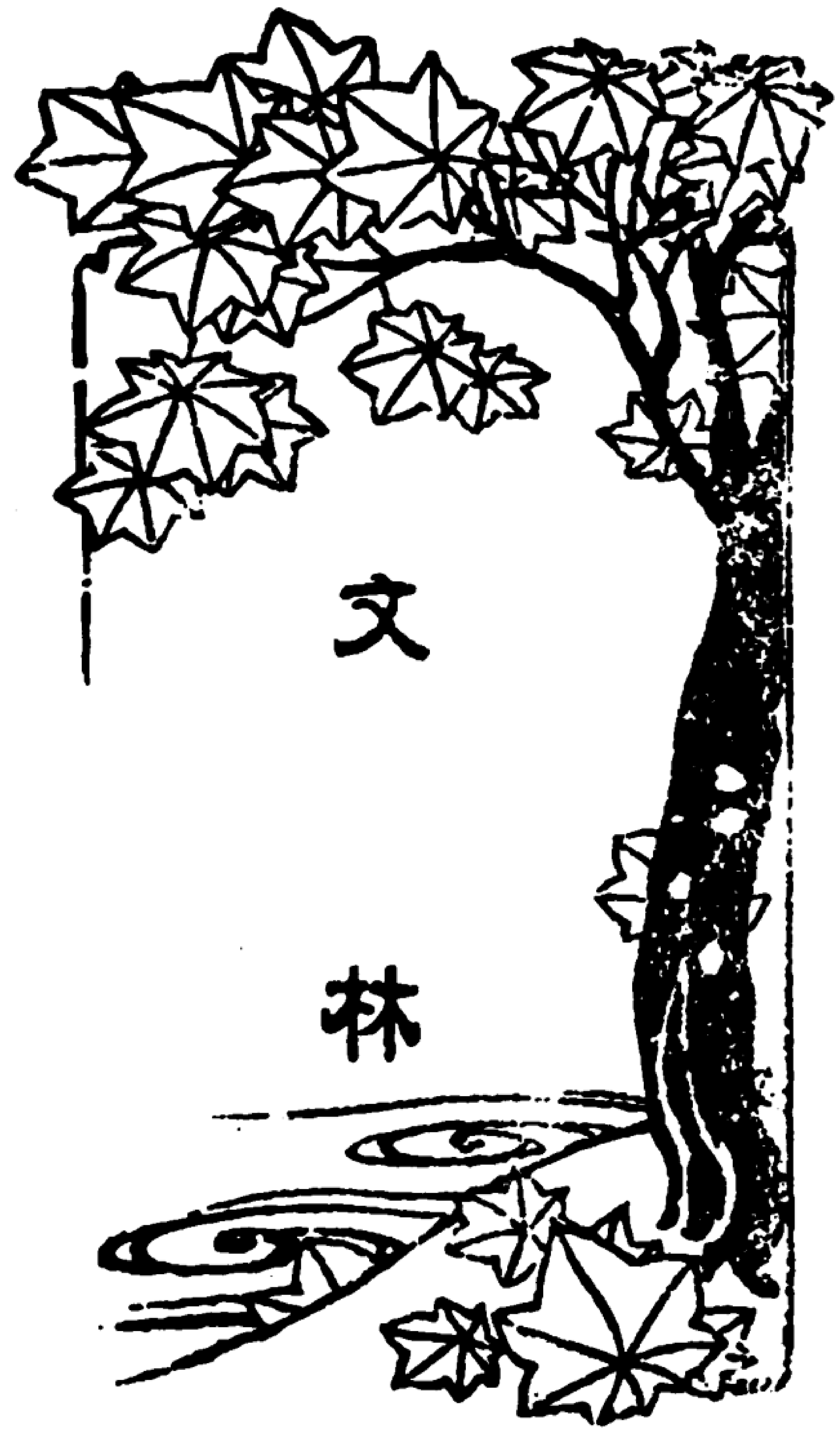
『それで……。』とすり寄つて、病人の手をしつかり握つて、『奥様、奥様。』と呼んだが返事が無い。

やがて、お北は涙聲に恁う言つた。

『旦那様、私が惡いのでございます、私は命に掛けても奥様の御病氣は直します、私が、この手紙をお目に掛けたのでございます、それで……旦那さま、屹度直してお目にかけます、命に掛けても、命に、小田原の道了様は荒神で御座います。』

と言つて其後、夜の目も寝ずに看護したさうで、一に看病とやら、三月の中頃には立派に本服して東京へ歸つた。處がお北はそれから一月ばかりの間に、何の病とも知れず死んで了つたと、僕が去年函根へ行つた時聞いた話である。小田原の道了樣が、それ程荒神であるかは知らぬが、運命の道には、一つ足を辷らせると、脇には川もあり、海もある。

（をはり）



若木梅　久我建通

うゑおきし若木の梅はことしより
花さくはるをわするなよゆめ

高架鐵道　鍋島直大

開けゆく世にもあるかな眞金路を
ひとのゆきかふ上にしくまで

箏　佐々木高行

里の子か手にもつかたみ重けなり
わか菜のほかに花もつみけむ

月前梅　水野忠敬

おほろ夜の月の影にもさやかなり
ゆかしくかをる梅のひとむら

曉鶯　宮地嚴夫

ねやの戸をあけ方にきて嬉しくも
庭のこすゑにうくひすのなく

閨中梅、　北郷久政

春風はふくともなしにあかつきの
ねやまてかよふのきの梅か香

車中春雨　荻原嚴雄

をくるまの内まて雨はこほれきぬ
やなきの枝のなひきかゝりて

水畔梅　芝葛鎮

水くるまめくるわら屋の軒はさへ
ゆかしく梅のはなそかをれる

垣梅　千葉胤明

松はかり立めくりたるやまかつか
　かきにさきたりうめの一もと

春田　岩崎勝從

堰いれし水もさこそはたりぬらむ
　なはしろ小田に春さめのふる

殘氷　近衞貞子

千島のうみ氷のやまのたかければ
　はるの舟路はゆきもやられす

堤柳　柳原愛子

下草になひきかゝりぬさくら田の
　つゝみの柳したりしたりて

落梅風　岩崎寧子

うめの花薫りおくりしかせなれは
　散すもさのみうらまさりけり

節分　小池道子

豆のかすそひゆく年をよろこひし
　をさなこゝろそ戀しかりける

江上春風　保科節子

はる風の至らぬくまもなかりけり
　入江にうかふうめのはなひら

鎌倉右大臣　南郷柳子

鶴か岡千とせをいのるかみかきに
　みをはたさむと思ひかけきや

谷殘雪　中村禮子

うくひすはみやこに出し谷かけに
　こゝろなかくも殘るゆきかな

曉春月　小川直子

あけかたに月こそやとれ花かけに
　まとろむ夢のさむるまくらに

深夜春月　服部磯子

夜もあけは雨にやならむ大そらの
　ふかくかすめるありあけの月



教の庭

三月十五日兼題

樞密顧問官正三位子爵黑田清綱先生撰

（先生今尙伏蓐し居らるゝに付門弟子の代撰に係る）

春雨

天

東京牛込區北山伏町　後藤喜代子

わか艸のみとりのはゝとおもはへは
なかなかうれしはるのあめかも

地

札幌區南三條西三丁目　山田ふみ子

春さめのいともしつけくふる夜半は
むすふゆめさへこまかなりけり

人

三河國寶飯郡下地町　永井さい子

さくら花さく日をいつとまつころの
春さめうれしき夜はのはるさめ

甲の部

肥後　德永萬壽子

さきにはふ花のしつくとおもひしは
ふるともわかぬのきのはるさめ

讃岐　横井秀子

春さめの降るもしつけきつゆうけて
ほころひそめぬはなのひとひら

埼玉　横田音羽子

わきいつるわたみの山のゆけふりの
かすむとみれはゝるさめのふる

三河　服部萬子

つばきつる音はかりしてはるさめに
かたやまさとはひともとひ來ず
清國　稲田象子

をちこちの野山のすゑもこのころゆ
ふるはるさめにいろつきにけり
肥後　佐々小琴子

はゝ笑てはなこそにほへわさばらけ
ふるともみえぬはるさめのおと
東京　篠田圓子

いつしかと花まちわぶるわかいほの
のきはさひしくはるさめのふる
美濃　吉村せむ子

花さかぬころはうれしきはるさめも
なか〳〵いまはかなしかりけり
三河　河合奴比子

うめはちりさくらはさかぬ中かきに
やなぎのまゆをひらくあめかな
東京　杉田仲子

はとのなく聲もしめりてやまてらの
はなちるにはにはるさめのふる
肥後　田代綾子

打なひくやなぎのいともしめやかに
かすみよりふるはるのあめかな
福井　佐藤そう子

をり〳〵はつはきのをつる音もして
しつけき夜半にはるさめのふる

乙の部

草木までふかきめくみにうるほひて
はなさきそむるみよのはるさめ
岩手　藤澤もと子

ぬれつゝもほころひそめし花の枝に
かすむあしたのあめしつかなり
東京　三好珍子

花にふくよへのみなみのふきかへて
けさ東風さむくはるさめのふる
埼玉　横田秋子

八重かすみいつしか雨となりにけむ
のきのしつくのおとそきこゆる
東京　川村清子

春さめのふるから小野のわかくさに
みとりそへゆくきのふ今日かな
長野　小泉みつじ子

鳴やみてやなぎにいこふうくひすの
つはさもぬけにはるさめのふる
東京　池田靜子

きゝすなく聲もしめりてみわたしの
まつはらとほくあめかすむなり
京都　東寯子

歌の園

うちとけて友とかたろふことの葉も
しめやかにふるはるのよのあめ　東京　牛山柔子

さほ姫のたもとおもけになりぬらし
きのふもけふもはるさめのふる　筑後　鐵山増代子

うくひすのこゑもしめりて聞ゆなり
ものしつかなるはるさめのそら　周防　大角志賀子

うら〳〵とかすむあしたの春さめに
はなのしたひもとけやそむらむ　東京　北島功子

音もせてふるはるさめにきのふより
いろそひてみゆ野へのわかくさ　東京　河田いし子

花みんとちかひしかひもあらしやま
きのふもけふもあめのふれゝは　熊本　志方圓子

くれなゐの梅こそかなれはるさめの
しつくの田ゐのしつかそてかき　肥後　佐々有鄰子

しめやかにすまとひしてくらさはや
けふもはれせぬはるのなかめに　三河　服部正子

つれ〳〵とけふも書みてくらしけり
はなまつやとのはるのなかめに　三河　本多きさ子

はるさめははれぬ物からうれしきは
さくへくなりぬにはさくらはな　三河　宇津野代幸子

あをやきの糸のしつくにおとなくは
降るともわかしはるさめのそら　東京　北島操子

うくひすの鳴ねもいたくしめるまて
うめか香そひてはるさめそふる　長野　小林よし子

しつかやの軒のたまみつたえ〳〵に
ふるとしもなきはるのあめかな　出雲　山根久子

あくかるゝこゝろもしらてさく花に
きのふもけふもはるさめのふる　筑後　武田鶴子

われはしめ歌よみいてしそのかみな
おもへはこそのはるさめのころ　東京　高橋津音子

つれ〳〵にふみ見る窓におともせて
なくさめかほにはるさめそふる　播磨　本多宣子

うら〳〵とひはりなく野もはる雨に
ゆふへさみしくとふひともなし　神戸　井上品子

棚ひきしかすみのひまをもれいてゝ
ふるも長閑けきはるのあめかな　東京　菅田清子

音なしのかわ邊に降れるはるさめの
名にちなみてやわきてしつけし　靜岡　夏目松枝子

夢のうちにみし花とりのしなさため
せめてなくさむ夜半のあめかな　東京　山本梓子

さと川のきしへのやなきうちけふり
ゆふへしつかにはるさめのふる　下野　芦谷隆子

のに山にいまやにしきをおりしかん
いとくりいたしはるさめのふる　香川　久保かう子

賤かやのゝきのたまみづおとなくは
ふるともしらしはるのむらさめ　長崎　高田杉子

春さめのふるのゝみちのあさけふり
かすみとなりてたちまとひつゝ　東京　牛山柔子

おとせれは降ともしらぬはるさめに
ぬれてはかへるやとのかられこ　東京　河合象子

野へはまた淺みとりなるわかくさの
つゆしりそむるはるさめのそら　埼玉　前野壽賀子

きのふけふのとかにそゝく春さめに
やなきのみとりいろまさりけり　下野　岩岡さく子

つれ〳〵に雨はふるなりこのゆふへ　下野　葛生定子
はなのいろ〳〵しなさためせん

うちなひくしたりやなきの風たえて　東京　田中眞子
かすむのきはにはるさめそふる

わかなつむ人もきにけりからころも　長崎　八尾いへ子
はるさめふれゝ野へにたかへに

鳩のなくこゑはかりしてやまてらの　東京　佐藤たみ子
ゆふへさひしくはるさめのふる

あけぬれと猶おほろよのこゝちして　秋田　古瀬りく子
けふるを見れはゝるさめのふる

春さめのふりそめぬれはかすかなる　伊豫　鹿野里子
やまのみとりもいろやますらん

あをやきの糸くるはかりはるさめの　札幌　山田靜子
おやみもあらすふりしきるなり

しつやかに降れとも花のひとゝきは　廣島　小谷治子
さくらなみよるはるのあめかな

こゝろさす野邊のつくさや生ひ出ん　東京　永井さき子
かすみのとかにはるさめそふる

琴の音のしめりかちなるゆふまくれ　東京　田中よし子
かすみをもれてはるさめのふる

とほ〳〵とのきの玉みづおとさへて　東京　牛山竹代子
ねられぬまとにはるさめのふる

猶ふりてあそひしてふもかくれけり　東京　金原玉城子
すゝなにそゝくはるさめのそら

はるさむみ外山はゆきのふりなから　秋田　三浦ふさ子
さとはかすみてはるさめそふる

晴やらぬなかめにけふもくらしけり　下野　民屋寄代子
はなを待ちつゝ野をおもひつゝ

うくひすや梅のはなかさきなくらん　下野　中村清子
こゑしめやかにゝほふはるさめ

うこきたもやらぬやなきに露そひて　岩代　田中二三子
降るとしもなくかすむあめかな

たきすてしかゞりうすれてさくら花　東京　下田しけ子
ちりしくにわにはるさめのふる

もろひとの花にうきたつこゝろをも　京都　東　照子
しはしゝつむるはるのあめかな

あをやきのはなたの下をよりかけて　肥後　坂本たけ子
ふるはるさめのをとのしつけさ

すむ人もいまはあらやのさゝかにの　肥後　田代艶子
いともみたさぬはるのあめかな

うたゝねのゆめのまくらに音すなり　兵庫　泉さい子
はなちるころもよはのはるさめ

かの森はかすみにけりとおもふまに　東京　林　栄子
はるさめけふるゆふまくれかな

我やとのかきねにつゝくやなきはら　東京　戸木のふ子
みとりそむてふはるさめそふる

うちけふりふる春さめにけふもまた　東京　林　環子
はなみのちきりあたとなりつゝ

春さめのしつかにふれるさまみれは　安藝　和住千鶴子
はなのしたひもいまやとくらん

花さそふめくみのあめとしりなから　東京　椎野ぬき子
のき端さひしきゆふくれのそら

草も木もゝねいでぬらんはるさめの　伊豫　渡邊信子
めくみあまねき露をうけつゝ

歌の園

丙の部

草もきもめくみあまれしはるさめの　わかおほきみのみよにたくひて　東京 椎野鋭子

しつくのみのきはにみせて春さめの　ふるともわかてかすむゆふくれ　東京 椎野蘭子

長〳〵とふりみたしたるたわやめの　かみよりほそきはるのあめかな　秋田 古瀬とよ子

思ふとちむかしをかたるこのゆふへ　こゝろありけのはるさめのおと　東京 山口春子

垣ひとへとなりのをとめふみまなふ　こゑもかすみてはるさめそふる　兵庫 泉久巳子

はるたちてみとりにかへる青やきの　いとにみたれてはるさめそふる　名古屋 岡崎茂子

たまつはきこほるゝ音もましるかな　あめしつかなるはるのゆふくれ　名古屋 木下鶴子

やまさとのはなのつかひの近からん　よしはるさめのふりへたつとも　宮城 大槻切音子

かすみよりふるはる雨は日をへても　はれぬなかめそのとけかりける　肥後 德永多瑠子

音もなくふりくるものをあしたより　わかくさもゆるはるさめのそら　肥後 德永廣子

立ちこめしかすみや雨となりにけん　はなよりかすむはるのあめかな　下野 花方米子

打ちけふり晴れぬなかめに野も山も　くさのめ木のめもね出つるらん　下野 民屋信子

たすさひの琴しの忍ひねかすむなり　はなちるやとのあめのゆふくれ　北海道 澤參子

見わたせはしつか伏やのけふりさへ　しめりかちにもはるさめそふる　秋田 三浦さわ子

さほひめのかすみの袖やぬらすらん　のとかにそゝくはるのあめかな　下野 菅沼德子

なり〳〵に軒端をめくるたまみつの　おとにこそしれ夜半のはるさめ　東京 高谷いち子

いたつらに軒のたまみつかそへけり　はなまつころのあめのゆふくれ　東京 高谷華子

玉たるゝやなきのをすのうちなひき　かすむのきはにはるさめのふる　東京 石野敏子

きゝすなくかた山さとのゆふくれに　あはれをそへてはるさめのふる　東京 杉田磐子

つれ〳〵な旅のやとりのこまくらに　うたかきつくるはるさめのころ　東京 佐藤雪深子

てる月をかすみのそてにかくしつゝ　しのひねにふる夜半のはるさめ　奈良 澤田與志子

さま〳〵のことのはくさし摘そへて　はるのあまよのしなさためする　秋田 古瀬たゝみ子

一しほのいろまさりけりはるさめの　のとかにそゝく小野のしはくさ　岩手 藤澤みつほ子

つれたちてあすは花見にゆかんとて　いさむかひなきはるさめのふる　遠州 平野芳子

さきそめし花につれなきはるさめも　くる木にふかきめくみなりけり　東京 積山鏡子

はる雨のふるやのゝきはおともなし　野へのわかなやいかにもゆらん　肥後 澤田春子

歌の路

まちわふる花にめぐみのかゝるとも
知らてつれなくおもふはるさめ　宮城　大槻慶子

しめ〲とまくらの山にはるさめの
ふりしむかしそしのはるゝかな　伊豫　竹村竹里子

しつかやの軒はいふせくはるさめの
ふるからのへにもゆるわかくさ　肥後　徳永雪枝子

うちかすみ春さめぞふるかす日野は
いまそわかくさもえやそむらん　肥後　坂本菊子

春さめにつはさしなれてうぐひすの
なくねもさらにうちしめりけり　肥後　坂本道子

こゝろさへさひしくなりぬ春さめの
ふるやのゝきにおとはかりして　肥後　田代喜和子

梅か枝にきぬるうくひすそれなから
のとかにかすみはるさめそふる　淡路　石田貞子

はる雨にのきのたまみつおもしろく
とほ音のことゝきゝまとふかな　東京　山口すま子

きゝすなく聲よりほかにこゑもなし
はるさめかすむおかのへのみち　東京　敷島うた子

梅のはなさかりのころのはるさめは
おつるしつくもかにゝほひつゝ　東京　伊能りう子

山のはのかすみより降るはるさめに
もえいつるらん野へのわかくち　丹波　大槻ふさ子

おちこちの野山みとりにそめてけり
かすみより降るこのめはるさめ　丹波　大槻まつの子

若くさのみとり生ひそふにはの面に
うれしくかゝるはるのあめかな　東京　戸塚てつ子

さめにのこりしゆきもきえにけり　東京　中野昌子

のへのわかなやいろまさるらん

鳥の音はきこえなからもうちかすみ　東京　内田きみ子
れよけにふれるけさのはるさめ

野も山もみとりにかへすはるさめの　東京　吾妻ちか子
しつかにふるもやさしかりけり

かすみつゝ雨となりけむいにしへの　東京　片山ふみ子
しのふのき端りかせのつゆけさ

いつこまてかすみのとはりかけつ覧　東京　片山あや子
ふるとも見えぬはるさめのそら

おともせてふりそめしより槇の戸に　東京　川瀬たき子
いとしつけしやこのめはるさめ

こそ見えしかれ野の草も淺さみとり　東京　川村松子
あまねくめくむはるのあめかな

よなこめてふりいてぬらん春さめの　東京　椎野清子
おともさひしきのきのたまみつ

きのふよりけふは小草のいろそえて　東京　椎野秀子
かすみにまかふはるさめそふる

かすむかとも思ひし空のそゝまゝに　東京　内田とく子
なくらくなりてふるやはるさめ

うれしくも春さめそふるまちわひし　東京　館脇ます子
はなのしたひもけふやとくらん

打わたす野邊もやま路もあさみとり　東京　平尾あさ子
かすみなからにはるさめのふる

我かこゝろいとゝきえゆく春さめに　東京　吾妻とみ子
もえまさるらん野へのわかくさ

しめやかに春さめのふるこのゆふへ　東京　松村あさ子
ともやきませとこゝろまちつゝ

歌の園

にめやかに降るや春さめつく〱と
　おもひみたるゝまとのゆふくれ　相州　米本ふじ子

つく〱となかむるそらに春さめの
　おとしつかにもふりいてにけり　相模　米本光江子

憂き事のはるゝまのなきよもすから
　のきはなめくるはるさめのおと　渡島　池田あさ子

佐保姫のかすみのそてやしほるらん
　のきのしのふにつたふはるさめ　渡島　喜多村きさ子

玉たれのおとはかりしてしつかやの
　のきはしつかにはるさめのふる　渡島・喜多村すゑ子

はるさめはふるとしもなし静かにも
　つはきかつちるおとはかりして　渡島　喜多村みち子

春さめのふりそめしよりわかいほの
　にわのわかくさもねいてにけり　伊豫・坂田きよし子

かすかなるみれの草木もこのころは
　ふるはるさめにいろやますらん　伊豫　鹿野生子

空たきのかなりをこめてのとかにも
　くらすいほりにはるさめそふる　名古屋　瀬木せき子

しめやかにかすむのきはのいと水は
　やかてくさきのはなのかそいろ　山口　富士野たか子

牛ひきてかへるわらへのしつかにて
　はなのひとむらはるのあめふる　東京　近藤はな子

しめやかに降る春さめに咲き出てし
　はなのしつくのにほひこほるゝ　横濱　山内玉子

けふもまたにほふ梅かゝたつれんと
　いてしはる野にあめすさむなり　神戸　井上早子

たかとのゝ夢のしらへもとたねして
　ゆふへしつけきはるのあめかな　栃木　川邊秋子

さよふけてのきはなつたふ玉みつの
　おとにそしるきはるさめのそら　横須賀　橘花子

何となくものおもはするはるさめの
　ふるやのうちそわひしかりける　伊豫　濱尾やすな子

ぬれつゝもさくらましりの春さめは
　なかめゆかしく思ほゆるかな　長野　小林芳子

横かすみたなひく野へのひとつやの
　やなきいろとるこのころのあめ　山口　富田ふみ子

つく〱とむかししのふの草のつゆ
　あめとなりゆくはるのゆふくれ　京都　坪内りき子

このめにていさつれ〱を慰さめむ
　あめふりくらすなかきはる日に　栃木　青木たま子

春さめにはなのしたひもとくらんな
　なとわひしくもおもひけるかな　品川　三富むめ子

つれ〱とふる春さめやけふいくか
　はなまつほとのこゝろしらすて　東京　田中ちよ子

見渡せはのへはかすみにうつもれて
　のきはのとかにたまみつのおと　東京　田中ちゑ子

さきそめぬ花のあたりをなかめけり
　あめふりそゝくはるのゆふくれ　福岡　秋野きよ子

はなはまたうめはかりなる我にわに
　いたくなふりそはるのよのあめ　東京　山本蔦子

たなひきし山もかくれてかすみより
　かすみにそゝくはるのあめかな　熊本　日高かす子

しつけしなとふ人もなききくさのやに
　おとさへたてすはるさめそふる　東京　藤田いく子

梅のはなかつちるやとのゆふまくれ
　うくひすなかすたゝはるのあめ　三河　佐久間れん子

川そひのやなきかはるのかすみより
　しとろにおつるはゝさめのつゆ　伊勢　黒田靜子

見わたせはきしの松かねうちかすみ
　いりえしつかにはるさめのふる　三河　佐々木康子

もえはたる野の若くさのいろをこめ
　うちけふりふるはるのあかな　伊豫　黒田しつ子

しら雪のむらきえのこるおかのへに
　なにたつれてやはるさめのふる　埼玉　前野ふさ子

しめ／＼とふる春さめにうくひすの
　はれうちあらふさまのゝとけさ　下野　森田みと子

とふてふの黃金のはなにまひくるふ
　なさけ知らすのはるの小あめに　下野　菅　俊子

そよ／＼とふせやのやなき打なひき
　おとなふものはゆふくれのあめ　下野　菅氐貞子

うくひすの羽袖おもくもはらふかな
　のきはのうめにかゝるはるさめ　下野　菅谷じん子

をちかたは雨かかすみかわかれとも
　のきのたまたれおとしつかなり　下野　菅田靜子

ちるはなを惜みてあめにぬれつゝも
　ひとひを野へに立ちくらしけり　下野　菅間みどり子

ふりつゝきはれまもみへぬ春さめに
　野へのわかくさいかにもむらん　下野　菅の屋とめ子

をしふすまのとかなるよの夢さめて
　おとしつかなるあめをこそきけ　東京　安井きやう子

さゝかにのいともやふらすふる雨に
　東京　安井あや子

立よりしうめのはやしのしたかけに
　ほころふものははなにこそあれ　東京　安井せつ子

あをやきの糸のしつくにしられけり
　こほれてにほふはるのあめかな　周防　大角志賀子

はるさめは花をれたむかふりつゝも
　しめやかにふるのきのはるさめ　下野　民屋美津子

むき生ふる畑にひはりのこゑたへて
　打ちぬらしてそいろをしあする　下野　瀬下知賀子

しめやかにはるさめ降りて露おもり
　はるさめ降りぬかさかすみ見ゆ　下野　瀬下喜代子

すみれつむ乙女もあらぬ野のすゑに
　つはきのはなの落つるおとする　下野　佐藤文子

すみれ咲き鈴菜はな散るはるさめに
　ものさひしくもはるさめのふる　下野　大木善子

花のいろうつろひやせんきのふけふ
　ぬるゝもよしや野路をわけ見ん　下野　木宮愛子

しめ／＼としたりやなきに風たえて
　にわにさひしきはるさめのおと　下野　和賀井芳子

野も山もなへてみとりに染むるらん
　いとものとかにかすむはるさめ　下野　和賀井花子

おこたりはよはよりふりし春さめに
　すかみのあやを織るはるさめに　長野　熊谷たい子

明日よりは若菜つむへくかたおかの
　けさのれさめはこゝろせかるゝ　栃木　井上ふよ子

しつ／＼とふるやはる雨きのふけふ
　野へはかすみてはるさめのふる　山口　藤井もと子

野へのみとりいやまさるらん

歌の庭

こゝろし降れよはるさめ野にやまに
いまをさかりのはなのゆふへは　下野　岩岡蕊子

さきみてる花よりにほふ春のあめは
しつくもにほふこゝちこそすれ　下野　大木、知賀子

たれこめしかみのころもかゝけつゝ
雨になりゆくかすか日野のはら　三河　佐々木ちう子

春さめのはれゆくかたのかけらふに
とはまさるなりのべのわかくさ　茨城　中里げん子

行路花

四月一日
詠題作例　撰者　黒田清綱

いく度か駒のあがきをとゞむらん
花さくころの志賀の山ごえ　山岡良旗

道の邊の花見るあひのながければ
まつ時すぐと妹やいふらん

・　・　・　・　・

見渡せは柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なる、今日此頃咲き匂ふ花の木影に、急ぎ行く路も忘れて。昔の様の長き春日をながめ暮すも可笑しく、十人十種、其のながめとりどりなるべし。（鶴舟子）

華族女學校教授井上頼圀先生撰

音樂會の記

人

長野縣北佐久郡南郷牧村　松澤まつ子

待ちに〳〵し音樂會の日は來りぬ。千代よばふ雀の、心も空に、三人四人の、友と、つれだちて、やう〳〵に松杉まはらに、しばふなめらかなる、城山を、登りて、城山館に、つきし時、あたかも、午後一時を報じぬ。いそぎ會場に入れば、さても人々はみち〳〵ぬ。正面の高き、だいの上に、様々の樂器そなへられ、大きやかなる花瓶に、ときはの小松、白梅のまだつぼみ多きが生けられつ、其左側には、高野高等女學校補習科二年生、則ち、賛會の會員凡そ三十名程、海老色の袴氣高う、居流れ、左側には、何れも洋服着け來賓の方々ひかへ給へり。折しもあれ、梅が香やしたひ來にけん、一聲なるの、鶯の聲「あゝと見れば、あらず〳〵音樂會の人々の吹奏のはじめにてそあれば思はず打笑まれしが、それより引つゞきて、「ヴァイオリン、」「オルガン、」「ピアノ、」を或は、合奏

に、或は、獨奏に、何れおとらぬ妙にいみじき音樂よ。別けても〳〵なつかしきは、「ピアノ」につれて歌ひにし唱歌よ。たとへば涓々として流るゝ、水の如く洋々として吹く、春風の如く、一度これに耳かたむけなば、鬼をもひしぐ武士も、忽ち心やはらぐらん。東西知らぬ幼子も希望の光やみとむらん。あはれ〳〵未來の國民の母たる、女子達は、此音樂の如き、心もて、此會の如く樂しき「ホーム」をつくらまほしや。など思ふ〳〵うちに早も、最終の吹奏樂は終へぬ。いざ歸られと、袖ひかれて、會場をいづれば、今しも月は、山の端、高くさしいでゝ、見渡す、此方は川中島清く渡るゝ犀川に、黄金の花をちらすなり。

人

長崎市新町十三番地　入尾いへ子

玉園山なる諏訪の神社回廊にて、音樂あるときゝ、日頃好める道とて、夕刻より家をいで、御山にまう登れば、霞棚引く峨眉山の頂をはなるゝ月、眞澄の鏡を薄絹もて包みたらん樣にて神殿の火影うす暗きは、中々に神さびていと尊し、回廊のかた見やれば、美しうそうそきたる人十たりあまり、向ひ座して、列居るさま所からにやたふとく覺えぬ。やがて笙、篳篥、笛といやつぎ〳〵に音取りて、折折調べ初めたる樣いとけだかし、つゞきて笛の役、句頭を吹きいづれば、はか皆おなしねに吹つれ、打ものさへゆかしうかき合せたるは、名におふ春鶯囀にてきくわれさへに梅の木の下に宿りせし心地ぞせられける、次は迦陵頻なり、神垣には名の似つかはしからねど、其音のえもいはれぬにいと靜かなるは後の世にありてふ佛の御敎も思ひ出られていとたのもし、其次は拍子もおもしろう吹出けるを何ならんとて耳をすませば、柳花苑となんいへる曲にてこぎ交せたる色は見えねど、げに春の錦といへる言の葉も思出らるゝぞかし、武德樂は名さへ勇ましく、此御社の大神は御軍神とし承り奉れば、殊にめでておはしまして、海陸の皇軍御たま幸ひ賜はざらめや、さて彌はてには羅陵王を奏しけり、其音の妙なるは、此道にわけいらぬ身のきゝわくべうもあらねど、何れも一入きはひてふきすさみ、やうやくに拍子とくなりゆき、われを忘れて調へ、彌與に入りたる時は、陵王の

霊魂も、天翔りきて聞きやすらんと、彼の古事さへ思ひ浮べてあなとのみ忍音をもらしぬそも〳〵樂は千早振神代の昔より傳はれるものと聞けれど、その論ひはしばし措かん、今の世の古樂てふは、其かみ唐土より傳へこしを、我御國にて世々に吹きつたへ、樂曲も樂器も萬づ改め正して、かばかり愛で度音樂とはなれりけり、もろこしては今は全く絶えはてしときくも、革命國の幸なき事こそおもひやらて哀れなれ、今専ら世にもてはやさるゝは西洋の音樂にて、ときめき玉ふ男の子は更なり、らうたき女子たちの「ピヤノ」また「ヲルガン」とやらんを知らざるは、あせあ必るぞかしと、學の校にても敎へられつれば、さばかり惡しうは思はれねと、古樂にくらべては、はるかに品おとりつべう覺えぬ。月の夜高殿に簾まきあげて、ものする絲竹の調べは更にもいはず、夏の夕の川逍遙に吹あす管の音に、心ゆかざらめやは、すゝろありきの道すがらも笙篳篥なんどの音ふと聞えたらんには、賤が伏屋も光り滿てる心地せられて、住らん人も慕はるゝよ、ゆかしき笛も、今の世の浮たる調べの聞えたるは、吹く人の心しらひも、ひげにけおされてなん、手風琴といへるをやさしき姫たちのなよやかなる手してかなづるは、やゝにくからねど、學のやに通ふ男の子の下宿の手すりなんとに身をよせて、かいならしたる己れはしたり顔きらめど胸そこなはてほと〳〵たくりもせらるゝよ、あき人のものする名ひろめんとて、市のちまたにかしましう管吹ならしそう〳〵しう鼓打つなんど、妾はいつも耳打おほふ。こも世におくれがちにて、外國の道にくらき身のかたよりか知らねど、古への禮樂てふ方々にのみ心ひかるゝ故ならんかし、とまれ春の調べの床しかりつるふし〳〵を後の思ひ出にもとかくはものしつ。

人

長崎市新町十三番地　高田杉子

わが、大君の惠みあまねき御世は、歌舞音曲なんど縦に行はれて太平のさましるくそなれりける。されどおほかたは俗樂にのみふけりて、いたく人のこゝろも荒れければ、心ある人たち打かたらひて、音樂會てふをおこされたり、さればたへなるゆかしきしらべもありなんと、うれしう思ひいさみ、ゆけば初めは、西洋の樂とやらんにて「バイ

ヲリン」「ヲルガン」「ピヤノ」其外名さへしらぬ異樣の樂器種々ありけり。かなでらるゝまゝ心すましてきくに、いとおもしろきねながら、何となうひなびてきこゆるぞうたてき。まして天津乙女のおりたちしもかくやありけんと、思ゆる、斗りのやさしき姫たち、白きたゝむきうごかして、かなで給ふさま少しもにつかはしからず、中々に可笑しきものにありける。これ西洋の音樂は大和人のこゝろにふさはぬしるしなるべし。花にあくがれ、月に心やりて、ふしおもしろう、あはれに思ひをのぶる糸竹のえんにたへなるつゝみのおとの大空にすみのぼりて、えもいはれぬしらべにくらべては、あたかも小供の騷々しう戲むるゝに似て、あながまといはまほしき心地せられぬ。されば嚴かなる神社佛閣などの儀式には用ふべくもあらずかし。それ大和にはみやびの御わざにも用ゐられ、神佛の儀式にもつかへこし雅樂てふ物ありてそのねをきゝては、めに見えぬ鬼神もあはれと思ひ、人のこゝろもやはらぐものなり。されば古歌にも人の思ひに通ふ成けりといひで、いと竹の千とせの聲をたゞへられ、から國にては禮樂をもて國を治むとさへあかめられたり。かゝるたふとき古樂なれば、これの絶えざらんことをつとめて、そがおくふかくきはめなば、きく世の人も神代のまゝのま心になりやしぬらんを、外つ國の音樂をのみ用ひずもがな。世の人たちのこのふみ見て時おくれたるをこのしれものとそしり給はめど、わが思ふふしを筆にまかせてかくは物しつ。

東京　佐藤深雪子

櫻盛の花影に、囀り物合せむも心ゆく業ならめど、上野公園音樂學校にて、今日午後一時より音樂會開き侍ればと、國本蝶子の君よりふりはへての言の葉に、それこそ、さこそと思ひやられ、父母の許しを幸ひ、疾く車走らせぬ、至ればやがて、定まれる番組の順を追うて音樂は始りぬ、蝶子のオルガン、雪子のバイオリン、瑞枝子の箏、某外國婦人のピヤノ、何れも〳〵、面白う聞こゑぬ。殊に三曲合奏は惠子の胡弓、三味線は文子、箏は蝶子の君にして、此の君ある爲か、一入まさりて聞ゆ、美しき其こゑ、清らかなる音、世の塵に汚れし賤が身も、清め去られて、天に昇るかと疑はれ、げに此世の樣ともおほへぬまでに我れ知らず指は常に膝の上をはじきて、知らぬ譜を合せぬ、音絶えし時、雲の絶間より下界へ突き落されしもかくやと、口惜さ限りなし今はとてかへる道すがら、耳に殘れる音の忍ばれて、ゆかしうなむ。

歌の庭

淡路　泉さい子

今日は、月曜日とて、かねて、はかりし、慈善音樂會某の館に催しありとて、友なる人より、しらせこしぬ、朝とくより、其設につらなりしに、此會の人たちよりつどひて、今日の催しの順番など妾にしらせ、今日の音樂の部の方は、諸學校の先生並に生徒たちのつとめ給へは、諸方よりの寄附の品々、はすべて傍聽人へ、賣わたす、ことゝ、さだめ、たれば、すなはち此賣却の役は、御身よろしくつとめたまへかしとのまをしわたし、かしこまりぬと其殿につき、なれぬにわかの商業人身なかたくするも、おかし、早時間の來りぬとて、いさましき樂隊の、音に、つれて、秋の親の立むかへば、あいらしき生徒の聲、ふりたてゝ、唱歌をうたひわれもしく、いともたへなるしらべに、聽衆のかつさいの聲かしましくわれも思はず興にいりて、もの賣わざも、忘るゝばかり、なりき。また慈善深き人によりて、寄附の品、入場切符の價とてよからぬかねを募れたり、元より、此會は、慈善てふことを、主としてのことなれば、とりくの金子をあつめ、扨て此金なして倦にも幸なき、みなし子に募みて、聊國家同胞の義務を、はたし、もて國恩を、報じ申さむと、とりく其の準備をそなしける、おほけなくもひらけゆく、み代のうれしさは、かゝるたぬしき、設けの席につらなり、常にあい見ぬ人たちと、心を友にして、不幸なる人のために、かゝるうるはしき業をなしつることのうれしさに家路にかへり、今日のつかれもわすれはてつゝありしことゞも、あらかじめこゝにしるしぬ。

東京　池田靜子

我妹と、待ちに待ちたる音樂會は、いよくあすにと迫りぬ。妹は、いたく悅び、種々仕度なんどなしつゝ、床につきぬ。我も又うれしくてたやすくねむられず、あすは唯が技をかなすならん。さぞや我妹の手を打たゝきて悅ぶならんなど思ひつる中、いつしかねむりにつきぬ。さてふと目をさませば、鷄の明をつぐる聲の二聲聞ゑぬ。すは夜明と打驚き起き出でしに、早や妹はほゝゑみつゝ「お姉様御早やうムいます」とのあいさつ、いつもはなかなかに起きざるに、けふに限りてと思はず笑を催しぬ。やがて朝食をはり、身仕度などなしつ、家を出でぬ。時に天うらゝかに、暖き風は徐にわれ等の面を打拂ひ、鶯は梅にさゑずり、われ等を迎ふるが如く、送るが如し。やがて會場にと着きぬ、門邊には、我國旗をかゞげ、門柱には、慈善音樂會とは記されぬ。見るに數多の紳士、令孃はひしひしと、つめかけ給ひぬ。わが兄弟も遲くれじと掛の人にあいさつし内にといりぬ。會場は一しほ美しく、さながら目をいるばかり、とやかくする中、音樂は始りぬ。其妙音其妙技、何とも言にいひがたく、さながら仙境に入るかと疑はれぬ。わが妹は唯愛らしき手を打たゝき、ほめつ悅びつせしのみなりき。かくして時をうつす中終に近づきければ、別をおしみ、家にかへりぬけふ來られし方々の御心や、いかなりしならん。わが思とは變はらざりしなるべし。

肥後　佐々有鄰子

ふりしきりし。春雪の今朝は日影うるはしく。はれわたりぬればとて。定日の音樂會に出席せんと。たれかれとなく有志の婦女はいでたちぬ。妾も末席にものせんと。午前八時の時計の音もろともに梅瓊軒（ばいすゐけん）を自轉車にて走り出て。會堂にぞつきにける。教師の君は、早朝より席にありて、生徒のいたるを待うけたまひて、樂器を人にさづど奏樂の端にとりかゝり、管絃調曲の音樂轟じるこそはしまりける。鐘鼓。琴瑟。管絃は。春蘭の花に、赤白桃李は、風に和き。つたき華にかきしるして、席上の狀況を言葉の花にあらはすことあなはれどたゞ三月十五日の會場に出て、教師の君に目見みことなたのみ記し侍りぬ。



彙報

○赤十字社總裁推戴

日本赤十字社は總裁小松宮彰仁親王薨去あらせられたるに付閑院宮載仁親王殿下を總裁に推戴し三日御承認を蒙りたり、

○岩倉公母堂の逝去

贈太政大臣岩倉具視公の令室にして公爵岩倉具定氏の母堂たる槇子の方は本年七十七歳の高齢に達し舊臘以來腎臓炎より尿毒症と爲り老衰日々に加り岡國手始め係醫數名詰切にて折角看護中なりしが藥石効を奏せず遂に去月二十三日午後七時十五分眠るが如く長逝せられたり葬儀は仝二十八日午後一時出棺品川海晏寺に於て執行せられき

○維新の女丈夫

前項に記せし岩倉公爵母堂槇子の方は贈太政大臣岩倉具視公の令室にて文政十年江州膳所本田藩士の家に生れ少にして岩倉家に宮仕へに出でたるが才色双美なりしかばつひに公の令室に擧げられ兩男三女を設けぬ長女増子は即ち今の掌典長岩倉具綱氏の令室たり長男具定公は當主となり二男岩倉具經氏は子爵具明の父にて物故されぬ二女極子は戸田伯に嫁し三女寛子は故森有禮子の令夫人たり母堂は先公具視公が維新の大業を創するに當り其内助の功擧て云ふべからず萬つゝましやかなる性質の内に凛々しき男心を有し折から元治嘉永の亂緒を解き初めし時世に在りて先公は天下の志士と交はるに母堂は陰にその應接に當り雋峭たる公の

辣腕以外に嬌口を以て志士を懷けしめしは尋常の女流にあらざるを知るべし先公の幽閉せられて京都の片在所岩倉村に隱居せる頃は西鄕吉之助、坂本龍馬、佐々木高行の如き勤王の志士密に公が深夜の門を叩く者殆ど每夜の如くにしてその閑居の納屋の隅椽の下等には十數名の浪士を常に匿まひ置くに母堂は手落なく食事を供し湯茶を勸めて天地に身を狹めたる志士の心を安め鬱懷を散せしめしには何人も感憤せざる者無き程にて後に至るまで母堂の德を稱たり此際佐幕黨の間者は一齊に公が身邊に注目して其の動作を探らんと百方道を盡す中に勤王の志士に名を藉りて公に近かんとする者無きにあらざりしも母堂はまづ自からその來訪の人に接見して正邪を鑑別して後公に引見せしむるに必ず人を誤まらず先公が維新大元勳たるは全く母堂が間接に志士を操りしの功といふべく女丈夫とは母堂の如きをやいふならん母堂曾て當時を追懷して人に語れる談話は當時の有樣を見るが如く幷せて女傑としての母堂が面目を窺ひ知るを得ん其談話に曰く「先公が岩倉村に蟄居遊されし時は剃髮して麻衣を着け對岳と號して坐せしが佐幕黨の憎み甚だしく夜中生々しき人の腕又は足首などを窓より投込みなどして威嚇したるも心を据えては怖ろしとも思はず或る夜の如きは午前の二時とも覺しきに雨にそぼ濡れつゝ裏手の畑より短かき袴を着け熊の皮を肩に纏ひ手拭にて頰冠りせし怪しの男裏戶を叩くに敵か味方か分らねども臆しては腹や見られんと誰れぞと劇しく問へば吉之助に候ふと答へしに直に內に入れて公に介せし事もあり當時閑居の貧困は譬ふるに物なく菜は澤庵の外おくいつも夜深に來れる志士のまづ食事をと乞はるゝに冷飯に澤庵を勸むるが心苦しかりしが

いづれも寢食をも忘れし志士の事とて其の粗食をも舌打して食したり其頃の志士は晝は多く山に隱れ夜に入りて人家に出で僅かに食を得る有様にて佐々木伯(高行)の如き妾に逢ふ毎に當時の恩を謝せらるゝも事實は只時々冷飯を供せしに過ぎざりしなるが又當時の公卿の臺所に立入ればこれ以上の饗應の實際爲し能はざりしにて先公御自身すら食に事欠るゝ事も珍らしからぬ程ありき」以上の談話はいかに母堂が事に處して丈夫も及ばざる膽氣を有せしかを知るに足らん又其大膽なる一話として語るべきは同じ頃何者か公の玄關へ生首を投込みし者あり首は板敷に轉々して鮮血尾を引きて流るゝに其物音を聞きて走せ出でたる召仕の男女はいづれも其有狀に顏色を失ふて逃入れるを母堂は驚く色もなく立騒ぐ一同の者を叱し去り自ら玄關に立出で首を取棄て血を拭ひしには見る者其の膽氣に恐れ入りぬと聞けり往年女の右大臣と稱せられし今の中御門從一位の令室富子(先公の姉)往事を談する毎に必ず母堂を稱へたりといふ

○女囚携帶乳兒保育會の好果　板垣伯の發起に成れる同會は目下會員八百名に及び着々好果を收むる由にて保育者相州腰越の醫師佐竹音次郎氏は最も慈善心に富み懇切に之を乳養し且森エイ女は在監中の母の乳を與ふる爲日々乳兒を負ふて監獄に出入し各熱心に之に當れるより創立後僅に一年に充たざるに乳兒は皆健全に養育せられ居るのみか猶間接の効果として乳兒吉澤ハツの母が並外れたる惡婦なりしに拘らず己の兒に對する慈善家の恩に感じて全く悔悟し以後神妙に獄則を守り今は監獄内のモデルとなれる如き結果を見るに至りたれば伯は猶進んで勞働者の兒童を保育せん計畫あり目下頻に入會者を勸誘しつゝありと

雜纂

○東京女學校　鳥尾子爵の統轄する下谷區東黒門町東京女學校は本郷區駒込千駄木町大田子爵邸内二千餘坪の敷地をトし校舍新築に着手せり本月下旬竣功の上は高等女學校の資格を得技藝專修裁縫教員養成科並に高等女學校程度以上に於て三ケ年の研究科をも併置する筈

○芝高等女學校設立出願　府下昨年度の高等女學校不就學者千數百名に及ぶを以て今度芝區三田四國町水產學校跡に高等女學校を設立し度旨棚橋、小川、山本、杉浦外三氏より文部省へ出願したるに直に認可せりと

○私立濟美學校の設立　今度嘉納治五郎、鷹司熙通、上田萬年、近衛篤麿、菊地大麓、目賀田種太郎、箕作佳吉、澁澤榮一外數氏の發企にて私立濟美學校なるものを設置（位置選定中）し尋常高等小學校、中學校并に高等女學校を通じて十一箇年を以て卒業せしむる組織となし嘉納、上田、目賀田の三氏之が創立委員として取敢へず神田區今川小路八番地に假校舍及び事務所を設け來る四月より尋常小學第一學年に入べき男女兒童六十名を差當り募集するよし小學授業料は每月六圓にして入學金金二百圓なるが同一家の者にて二人目以後の入學者に對しては入學金を要せずとなり該校設立の趣意は家庭の事情甚だしく懸隔せざる兒童を收容し夙に小學期に於て品性陶冶の基礎を確立し中學期を通じて更に修養を加へ斯くして十分なる成效を期するに在るが故に教員の住宅及び寄宿寮をも校内に設け子女教育に熱心なる父兄の希望を滿さんとするものなりとぞ

○幼者の美擧　去る明治廿八年の夏の事なりき筑前國福岡市須崎の海邊に幾多の幼者が游泳の稽古をなしをりし際不圖沖合を通過したる水雷艇の

ありしかば皆々打眺めアンナ船が欲いなど羨望しをりしを一人の老人が出きお前方も毎月一錢づゝ積金をしてアンナ船を作り國家有事の日に乘出しては如何かといふを正直一圖の小供心にソレはよからうと忽ち評議一決し其月より毎月一錢持寄りて之を福岡郵便局に預けはじめしが塵も積りて山の譬へ今は積んで十餘圓になりしが其一團の幼者も段々成人して既に中學生以上の身となりしもありよしや今直ちに軍艦水雷艇は購ひ得ずとも幾百年のうちには世界第一の軍艦を幼者の力にて造り得ずとも限らずと毎月一錢がけの事業を後者なる幼年に引續ぎ貯蓄を奬勵しをるといふいとも健氣なる心掛けといふべし

○感ずべき小學生徒　江州神崎郡御園村は約二里の村落にして東西二箇(尋常、高等)の小學校あり去九日は前夜より雪降り出で五寸ほども積りし上風さへ太く吹き荒む折柄同村大字林田に住む東校尋常科第二學年生山口ます(八年)と云ふが自宅より學校迄の道程十數町以上あるにも拘らず雪を冒して登校せんと其姉なる尋常四學年生山口こん(十一年)と共に我家を出でたるに雪風身にしみて肌を裂く如き寒さにますは手足凍えて感覺を失ひ其上下駄の緒切て歩く事出來ず雪中に倒れて泣き居りし處へ尋常四學年生の北川ふさ(十二年)が來て此有樣を見兼ね雪を掃ひ慰めなどするも到底歩行く事出來ねばふさは是非なくますを傘、學校要具と共に脊負ひ勞りつゝ學校の控所まで連れ來りしに他の生徒は此を見て笑ふものさへあるを秋山校長は惻してふさの行ひを賞しますが積雪の爲に進退谷り居りしを見て自己の困難を省みずこれを脊負うて登校せしめたる行爲は誠に奇特なりとて賞狀に家庭實業讀本一部を添へて附與せしといふ

四月以後の兼題廣告

	歌	文
四月 一日	行路花	落花を觀て感を記す
四月 十五日	歸雁	亡き友の墓に詣づ
五月 一日	早苗多	池亭蛙を聽く
五月 十五日	夕蛙	故郷を出づるの記
六月 一日	雨後蟬	初夏野外に遊ふ
六月 十五日	池蓮	結婚を祝する文

投稿〆切期限は總て發兌日の十日前則一日分は前月の二十日、十五日分は其月五日とす。依りて其期限内に到着すべき日取りの順序を數へて寄稿せらるべし。

當選者には文は壹圓(天)五拾錢(地)三拾錢(人)歌は各其半數の計算を以て孰れも代價相當の書籍を呈す。

明治三十六年三月　　女鑑編輯局

投稿心得

○兼題歌文は、女子は、何人にても隨意投稿することを得。

○投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二つ折)の事。

○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ其他は、悉く、平假名若しくは一音の漢字にて認むべし。

○文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。

○右歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して、分明に認め、住所姓名は、題目の下に明記すべし。

○投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。

○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは採らず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

西村茂樹序　三輪田眞佐子著

女子處世論

訂正第八版
定價金廿錢
郵税金四錢

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫育化導の良蹟、夙に女社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり、今本書を著述して女子處世の心得を説く着筆溫厚摯實、理義極めて丁嚀なり、曩に第七版印刷せしに賣盡し今や訂正して第八版印刷中にて旬日ならずして製本出來せんとす、女子教育に重大なる責務ある教育家諸士の愛讀を望んで止まざるや切なり

發兌元　東京築地二丁目廿一番地　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　小堀鞆音鏑木清方畫

小牧合戰

新刊

菊版洋裝
口繪入美本
定價金五十五錢
郵稅十錢

豐太閤を龍に譬ふれば東照公は以て虎に比すべし、龍吟ずれば雲起り、虎嘯けば風生ず、小牧山の大合戰は此の獰龍猛虎の拏攫なり、山岳震撼して波濤洶湧せるの壯觀は決して他人の能く萬分が一をも寫し得る所にあらず。塚原澁柿先生學問該博にして最も近古の戰史に精しく豐臣德川兩公の事蹟に深く意を注ぎ闡幽微顯の功一にして足らず、此書の如き前古未發の秘密を探索し以て正史の遺漏を補ふ、特に長久手の大殺を以て其原因嬋娟たる一位の美人にありとせる如き實に奇想天外より來れるものと謂ふべし、且其口繪は目下歷史畫界の泰斗と仰がるゝ小堀鞆音氏揮毫は鏑木清方氏の筆になるもの、文章と相須て英雄美人の眞面目を發揮せり。

發兌元

東京築地二丁目

株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

大宮兵馬著
國語漢文假字遣ひ法
定價拾八錢
郵税二錢

幸田露伴序
村上濁浪編
識血字相術録
定價參拾錢
郵税四錢

吉丸文學士編纂
名家修養談叢
定價參拾五錢
郵税六錢

松川甬著
結婚と家庭
定價貳拾錢
郵税四錢

太田法學士著
木村重成
定價拾八錢
郵税四錢

發兌元
東京築地
株式會社 國光社

本派本願寺前大法主

明如上人遺芳録

全壹冊菊版最美本、上人最近眞蹟、名號、偈頌、和歌等數葉挿入、別にアートタイプ尊影（中平商店發行）を添ふ

◉壹冊定價金貳拾錢郵稅金四錢

本書は今回遷化せられたる本派本願寺第二十一世明如上人大谷光尊法主一生の御傳記にして本山の記錄に基き眞宗文壇健筆家編纂の任に當り顧問諸氏の校閲を受けたるもの也加ふるに中平商店發行の上人御尊影は最近の撮影に係り一見眞に逼るを以て契約の上本書と共に發賣することゝしたれば信徒諸氏は勿論他宗他門の人と雖も一本を購ふて長く上人の高德を欽仰感戴せられむことを切望して已ざるなり

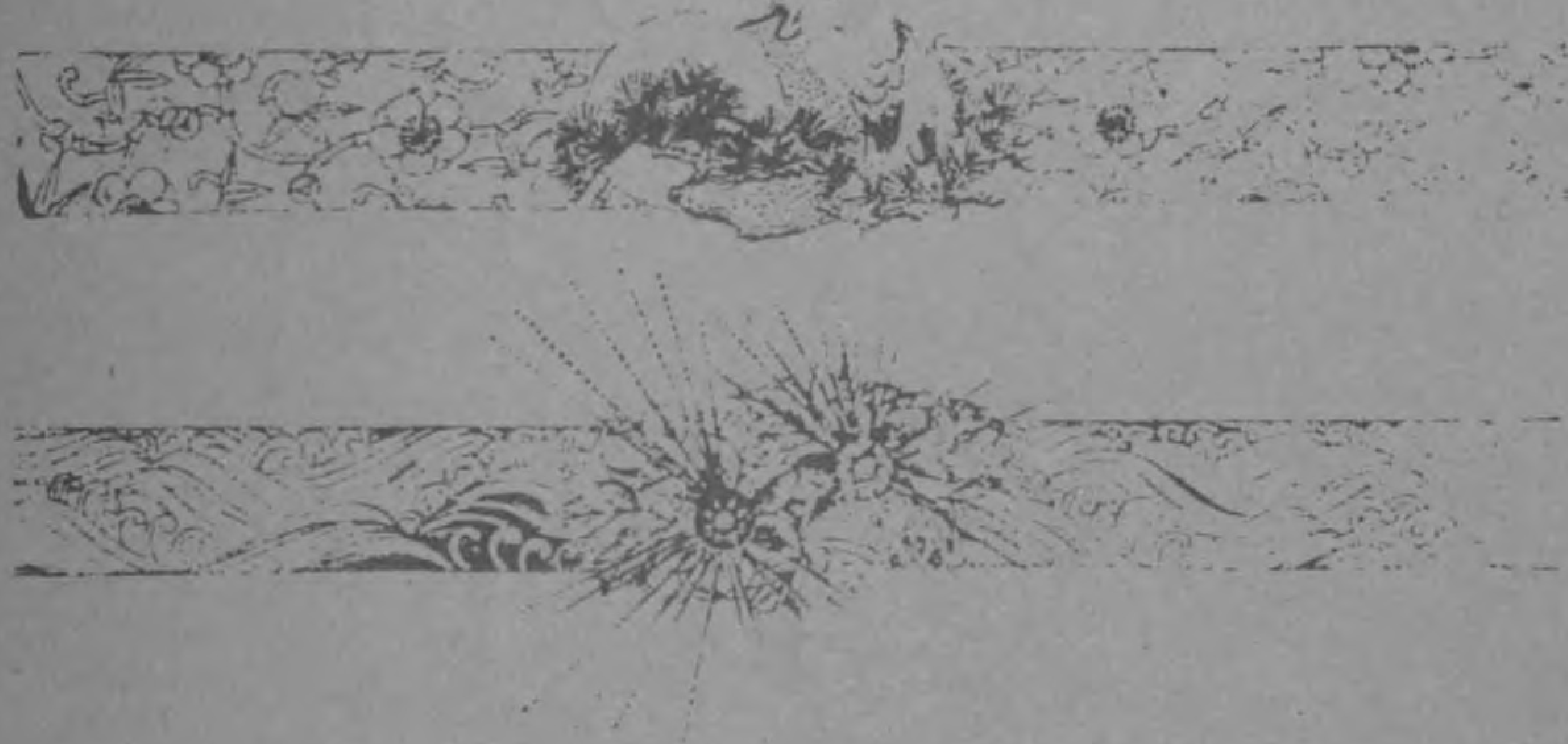
發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地 電話特新橋八八 電話新橋二六九三 株式會社國光社

京都市松原通大宮西へ入法宣寺 國光社員出張所

大阪市心齋橋北詰東入 國光社員出張所

●本書は全國到る處の書店に販賣せり

明治三十六年三月十五日發行
毎月二回一日十五日發行
第拾參年第六號
明治卅五年三月十二日第三種郵便物認可



（東京[illegible]株式會社圖光社印刷部印刷）